

すみれ色の瞳の乙女—  
天馬の章—【一章完結】

月歩

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは天馬（グライフ）と呼ばれたロボットとあるフアティマの物語である。

戦場で記憶を失い、主を失った少女エディ。

自らを造ったコークス博士の工房で目覚める所から彼女の物語は始まります。

謎のモーターヘッド・マイスター「レディオス・ソープ」が登場し、ウモスの若騎士レスターと、そのパートナー・パルスエットとの再会を果たす。

エディは辺境で起きた事件に再び巻き込まれることになる。

グライフ・シバレースの章：廃棄少女編【全14話】

※

この作品は、「騎士は増えぬ、なぜなら一人の騎士生かすのに一人の騎士を殺すからだ」という剣聖デューク・ビザンチンの台詞通りの中身になっております（・・ω・・）

※改訂版

2019年10月6日から一日ごとに一話を【予約投稿】します（全一四話）

# 目次

廃棄少女

はじまりの章【星団歴2911—29

17】 | 1

【1話】 目覚め | 19

【2話】 来訪者 | 38

【3話】 エディの一日 | 52

【4話】 辻斬り事件 | 70

【5話】 エディの夢 | 83

【6話】 ル||フィヨンドの姉妹

97

【7話】 狂犬ラルゴ | 117

【8話】 サンドラ・イルケ | 133

【9話】 孤児院の少女 | 145

【10話】 契約の言葉 | 165

【11話】 騎士の誓い／起動 | 183

【12話】 決戦 | 209

【章終】 エピローグ | 236

## 廃棄少女

### はじまりの章【星団歴2911—2917】

この物語は一人の少女の記憶、体験。それらの断片的な記録から成り立っている。

そして、幾つもの時代を駆け抜けた人々の記憶をも追っていくストーリーとなっている。

登場するのは時代と人が移り変わっても永遠に変わらぬ一人のファティマ。

本編はA—1 D2（オールディーツー||エディ）と呼ばれたファティマを中心に回っていくものとする。

これは、最後の終焉の時代にその名を残した彼女（エディ）の始まりと、終わりまでを語る物語でもある。

そして私は騎士とファティマ——やがて時代の流れの中で消えていく彼らの、彼らが最も光り輝いていた時代を語ろうと思う。



ジョーカー太陽星団カラミティ星——南部にあるキーヤ大陸には二つの大国が栄えていた。ロツゾ帝国とウモス国家社会主義共和国である。

ウモスとロツゾの国境がある北方山岳部。その国境沿いにある地帯は昔から鉱物資源が豊富であったせいか国家同士の紛争が絶えず発生していた。

現在は多くの炭鉱が掘り尽くされ、鉱物資源が稀少となった今では炭鉱の名残のみが残っている。

この時代、希少鉱物資源の獲得舞台は宇宙へと移り変わっていた。植民星が開発され、大国の利権争いは宇宙にまで及んでいる。

今ある炭鉱跡も地域的な空洞を狙った不正な取引を目的とするキャラバンに支配され、そこを隠れ蓑に違法なブラックマーケットを築かれるに至っていた。

彼らは常に移動しながらその位置を掴ませなかった。国境警備隊との追いかっこのいたちごっこが延々と繰り返り広げられている。

それらの摘発も辺境警備に当たる騎士の課題であったが、今世間を賑わせているのは辻斬り事件だ。

手合いと呼ばれる騎士同士のルールある決闘とは異なり、辺境を警備に周る騎士（ヘッドライナー）の首を狩る殺人鬼が出没していた。

つい先日にも北方に広大な領土を持つクバルカンの飛び領が近接する地帯で辻斬り事件が発生し、それらを廻ってウモス側とクバルカン側で険悪な折衝を行ったばかりである。

さらにはロツゾ帝国の横槍が入って両国の関係はますます緊張を増していた。国家同士の縄張り争いが辺境にまで拡張したことで火種はくすぶり始めていた。

いくつもの国境を股にかけるこの地では何が火種になるかわからない。特に哨戒に  
周るMH同士が鉢合わせをしてしまったケースなどもだ。



砂が舞いモニターを一瞬覆い隠す。黄色い砂を含んだ風が吹き去って一瞬だけ風が止んだ。

すぐに次の風が強く吹き付けて装甲に当たると金属音を響かせる。

対峙し合うのは二騎のMH（モーターヘッド）だ。

斥候として見回り任務に就いていた両者が武器を抜いてしまったのは不幸としか言いようのないことだ。

本国に指示を仰ごうにも、この周辺にある違法なキャラバンから発せられる結界がノイズを生んで通信を妨害する。

さらに質が悪いのは、この風にメトロ・テカ・クロムの細かい粒子が交じることだ。

兵器であり精密な機械であるMHにとってこの砂は最大の敵である。細やかで微量な粒子が機械に入り込めばすぐに不具合を起こす。

MHがこのような場所で長時間活動することそのものが間違っているのだ。

「さーて、どうするか……引いてくれると助かるんだがなあ」

赤いMHのкокピットで脂ぎったバイザーを拭き取り騎士が呟く。

「セルマ、通信は回復できそうか？」

『駄目です、マスター。ノイズが酷くて……』

「面倒だな……降りてちよつと話そうかっていう雰囲気じゃないなあ」

わずか数百メートル先に立つのは武者のような外装甲を持つMHだ。その色合いは青紫で特徴的な装甲は紫怨鋼——青騎士（ブルーアーマー）と呼ばれるウモスの主力機だ。

これに対するは赤黒い装甲のMHはアパッチという。

アパッチを使う傭兵騎士は多い。飛びぬけた性能ではないものの、扱いやすく十分なまでの信頼性がある騎体だ。

赤と青——そう呼ぶにはすすけた色をしていやがる。そう思考したのはアパッチの騎士だ。

「間接をシールしてても、モニタがこれじゃやりにくくて仕方ねえ」

砂塵は強くなり始めていた。前方に見えるMHも装甲色とシルエツトが居場所の目印だ。

睨み合いが始まって数分だが、この近さであるにもかかわらず近接通信さえ行えない



ほどだ。

『マスター、左足間接部のギアミッションに異常を発見。踏み込みに約〇・〇二八%の遅延が出ます』

「砂を噛んだか？」

『いいえ、ギア部分の噛み合わせに不一致する異常です。密接変行できる部分なので砂ではありません』

「ち、整備もまともによってないのかよ。他に不具合は？」

こんな場所での無理なMHの運用に原因があるのだが、その責任は全部雇い主への愚痴に変えていた。

『ありません』

「わかった。それにしても砂嵐がひどい。こちら辺は身を隠すのもってこいだな」

モニタ越しに見える石灰岩の岩壁と灰色の空。細かい流砂が巻き上げられて騎体の脚部に打ち付けていく。

相手は辻斬りか否か？

ここ最近のブラックな噂話が本当だとすれば、相手が青騎士だろうが油断はできなかつた。

即ち、辻斬りそのものがウモスカロツゾ、もしくは第三国の差金ではないかという備

兵の間でのきな臭い噂話だ。

どこぞの国が新型の開発ついでの試運転にここを選んだとしても不思議ではない。降りて平和的に解決。というにはこの地形が余計な邪推を生む。生身を狙った不意打ちも誰も見てないのであれば容易い。

「金のなさに下手打つちまったな……」

MH同士がぶつかり合えば脆い岩肌だ。こんな場所で戦えば岸壁が崩れてくる可能性が高い。

最悪の足場だ。そこに足の不具合である。

嫌な感じがする。正直、ここでは戦いたくない。向こうも同じことを思ってくれればいいのだが。

本来の任務は最近噂の辻斬りを探すことだ。

彼は三か月辺境に出ずっぱりだ。雇い主は早く結果を出せとそればかり要求してくる。

ウモスとロツゾとは微妙な位置関係にあるアリエンタ共和国から依頼を受けての哨戒任務だ。

アリエンタは小国だが、鉱物資源調達のパイプを各国に回して商売している。情勢が不穏になるほど支障が出るといふことだ。

こんな借り物のアパッチなど寄越さずともいいものを、と彼は心の中で愚痴る。ろくな整備すらされていないのでは話にならない。

食うために仕事を選ばなかったのが運の尽きだ。

そうしなければ借金の返済にファティマを売りに出さねばならないほど逼迫していた。

この地域の特殊な事情もある。いろいろ察して引いてくれれば助かるのだが。

だが彼の予想に反して青騎士のエンジン音が変わる。

「あーあ、本気でやるつもりか？ こりゃあ向こうさん、大分焦っているな。若造だな……セルマ、奴のデータを取りたい」

『ウモスのブルーアーマーに間違いありません。エンジン音からしてチューニングクラッチはニュートラルですから正規の青騎士スタイルのようです』

「ルーキーの教育もなつてねえのかよ。出会いがしらに抜刀とか笑えん。抜き返したこっちはもつと笑えんぜ……」

それは即ち戦いの狼煙は上げられたも同然ということだ。騎士同士であれば、なおさら抜いた太刀を収めるのが難しい。

何も考えずに逃走するのも手であるが、何の手柄も立てずに帰ったのではろくな給金ももらえずに放り出されることになる。

こうなつたからには成果を挙げねば傭兵稼業は成り立たない。雇い主が吝(しわ)すぎてこのままではファティマを手放さなければならなくなる瀬戸際だ。

『マスター引きましよう。この戦いには意味がありません』

「いいや、大有りさ。騎士同士がモーターヘッドに乗つて互いに剣を抜いたんだ。お天道様だつて見のがさねえよ。それが騎士つてやつさ。後、金もないしな」

『了解、マスター勝ちます』

「帰つたら久々にお前も調整だな。きれーきれーになつて来るんだぞ。そしたらたつぷり可愛がつてやる」

『マスターのバカ……』

コクピットに響くいたファティマの恥らう声に彼は笑つた。

「行くぞ青いの。実剣(スパイド)で行く。セルマ、さつさと終らせるぞ!」

『イエス・マスター。こちら全解放行きます』

刹那の後、動き出した両騎が切り結ぶ。

大地を音速を超える風が吹き抜け衝撃波となつて谷間を揺らす。その衝撃で脆い岩肌は砕け散り細かい粒子を飛ばした。

MH同士の戦いは人の目では追えぬほど速い。音速を超えた一撃を互いに加え合うたびに谷の地形が変わっていく。

その疾さで撃ちあう鋼鉄の巨人はコントロールのわずかなミスさえも致命的なものとなる。

風が強くなり砂嵐がその戦いの様を覆い隠していく。

MH（モーターヘッド）——ジョーカー星団において数千年に渡って戦いの道具に用いられてきた騎体（マシン）。

それは人が作り出した最強で最狂の決戦兵器だ。

超帝国によって生み出された超絶な力を持ったヘッドライナーの末裔である騎士とMHをサポートするために生まれたファティマによってのみMHは操縦することができた。

国家間の争いにおける揉め事の解決は常にMH同士の戦いによって決されてきた。そこに例外はなく強い騎士とファティマとMHを揃えた者が勝ってきたのである。

それがジョーカー星団における戦いのルールとして定着していた。そしてまた戦いの末に待ち受ける残酷な運命からは誰も逃れられない。

戦うために生み出された彼らの争いの果てにあるものとは……

星団暦二九一一年——この時代。いまだ騎士とファティマが華やかかなりし輝いていた時代でもあった。



砂混じりの風が舞う。激戦の後をしのげる抉り取られた岩壁や崩れ落ちた岩だなに砂が積もっていく。

倒れ伏すのは一五メートルを越える鋼鉄の体躯を持つすすけた赤い巨人だ。

いつの時代も敗者は倒れ勝者が立つ。生きて大地を踏むのは勝者の騎士であった。

「パルセット、怪我はないか？」

MH・青騎士の足元に座るパートナーに問いかけたのはまだ若い青年だ。

「平気です。マスター、それとパルセットですっ！」

目深にかぶった砂避けのフードを押さえて彼女は些細な抗議をする。

すっぼりと肌を守るコートに身を包んでいるのでその美しいシルエットは覆い隠されている。

フアティマ・パルセットは嫁いでこの方まともに名前を呼ばれたことがない。

「そうだったな、パルセット。騎士は生きているかな？」

青年はまだどこか少年のような幼さを感じさせる顔立ちをしている。その彼にパルセットは首を傾げてみせる。

答えなかったのは呼び間違えられて抵抗したからではない。問いに対し何とも答えようがなかったのだ。

「両方……はないか」

ウモスの若騎士ミハイル・レスタターが破壊されたアパッチを見上げる。

胸部装甲は破壊されコクピット部分がある胸部の一次装甲まで吹き飛んでへこんでいる。そこはMHの弱点である騎士が乗る場所だ。

これで騎士が生きているはずがない。

軽率すぎた。今の問いも己がしてしまった行為にも――

間一髪の戦いだった。相手は戦いなれた傭兵――そう気がついた。もう手遅れであつたが。

勘違いで武器を抜いてしまった己に不甲斐なさを感じる。

切り結んだ感触から手加減などできそうもなく、一瞬でも気を抜けばこちらがやられていた。

アパッチのバランサーの異常により相手が崩れた一瞬の隙を突いての特攻だった。その攻撃で相手を粉碎した。

初陣を勝利で飾ったのだがその手応えは虚しい。胸の内は後悔に包まれていた。

余計なことをファティマに聞いてしまった。精神的にこの光景はショックであるはずだ。たとえばダムゲート・コントロールされていてもだ。

ファティマは自らの意思をダムゲート・コントロールで縛り付けている反面、蓄積されたストレスが溜まってしまうと精神崩壊を起こすと言われている。

初陣でなんて様だ――

物思いに沈むミハイル。こんなことを考えている場合ではなかった。生存を確認しなければ。

「マスター、生命反応ありますっ!」

ファティマルームを強制解除したパルスエツトが叫ぶ。その様子からミハイルは絶望的という観測を飲み込む。

「生きているか……よかった、なんて言える立場ではないな」

「ひどい……状態です」

パルスエツトが哀しげに目線を落とす。

ファティマ・ルームの座席は大量の赤い血で染まっている。投げ出された細い手足は動かない。

破壊された頭部はその顔面が元の形状を留めていなかった。脳が割れていた。

「急げば間に合うかもしれん。パルスエツト」

「はい……ごめんね」

ファティマを抱えたミハイルに続きパルスエツトが破壊されたアパッチを振り返り  
呟いた。





「ダメだ、脳波が弱すぎる……」

簡易医療キットをミハイルが操作する。急いで組んだテントの表では砂が吹き荒れている。

二人でフアティマの容態を確かめる。

流れ出た血に染まった白いフアティマスーツ。伸びた手足が力なく垂れたままピクリとも動かない。

頭部に負った傷は素人にはどうしようもない。こんな状態では目覚めようはずもない。

この治療キットでは応急処置しかできない。近くの町に運んでも適切な医療施設は望めなかった。

フアティマを救うには絶望的な状況だ。

気持ちは焦るがミハイルには打つ手がなかった。不安を感じ取ったのかパルスエツトがミハイルの服の袖を掴んだ。

「マスター、この音はディグ？」

パルスエツトの呼びかけにミハイルが顔を上げる。パルスエツトが眺める天幕の向こう側を見る。

そして近づいてくるエンジン音に耳を傾けていた。

「こつちに来る？」

辺境の国境地帯だ。好き好んでやって来る者はいない。近頃はどこもピリピリしているのだ。

腰の光剣（スパッド）を意識しながらミハイルはテントを出る。

ライトを光らせ防砂窓に覆われたデイグが近づいてくるのが見えた。そしてMHを恐れずに青騎士の近くで止まった。

唾を飲んでミハイルはデイグから降りてくる人物を見定めようとする。

ドアが開き長身で瘦身の黒衣の老人が現れる。禿げ上がった頭につけた硬質なその黒は威圧感すら漂っている。

騎士か？

黒から連想されるのは黒騎士だ。だがそのイメージを追い払ってミハイルは声を上げた。

いや騎士ではない？

「誰だ！ 名と所属と階級を言え」

威厳を込めミハイルがウモスの紋章入りの制服を誇示するように問う。

国境近辺の自由な移動は、基本的に移動を許可された国家関係者か公共交通機関のバスにしか出されていない。

目の前の男が国家関係者なのか、それとも観光客……

万が一にもそれはありそうもない。老人の堂々とした様子からこちら側に近い人間であると判断する。

「やれ、最近の若者は口の聞き方を知らぬ。ドンパチやっていたのはお前たちか？」

深いしわがれた声。その声に威厳を感じ取りミハイルは警戒を強める。光剣はいつでも抜けた。

「失礼、あなたは？」

もう一度今度は丁寧に関い直す。先ほどの問いは少し神経質になりすぎていた。

ただ者ではない——

「マスター、この方は——」

「何だ、パルスエツトか。これはまた若いのをパートナーにしたな」

遠慮なく老人が進み出るとその腕にパルスエツトが抱きつく。

「なっ」

ミハイルが驚いたのも無理はない。マスターと定めた騎士以外にフアテイマが懐く人物など育ての親であるマイトを除けばそんな事は起こりようもないことだった。

その常識では考えられないことが目の前で起こっていた。

マイトか——

「ば、パルセツト。この方は？」

ミハイルの声が上がらず。若き相応の戸惑いの入り混じった顔で老人と相棒のパルセツトを見る。

「えつと、わたしにとって、お爺様（グランパ）のような方です」

その老人の腕にまわりつくパルセツト。まるで親子というより孫と祖父のようにも見えた。

「グラン・コークスだ。モラードが言っていたのはお前か。ミハエル・レスターだったか？ えらく若い小僧に取られたとな。奴もそう歳は変わるまいに」

自らの名前を呼ばれミハイルの蒼ざめた顔にようやく色が戻る。

「グラン・コークス博士……」

星団最高のフアティマ・マイトの一人っ！

正確には候補として名高い男だったがあくまでも裏方に徹してきた存在だった。

フアティマの育成とお披露目という華やかな道を蹴り、半生をフアティマ・コントロールと医療に傾けた。

フアティマを問わず多くの命を救った男。

もし、フアティマ育成に力を傾けていたならば、バランシエ・フアティマに匹敵するフアティマを生み出したであろうと言われた鬼才。

世間から姿を隠し、風の噂では引退したとも亡くなったとも言われていた人物だった。

その男が目の前にいる。

光明を見た思いでミハイルはコークス博士をテントに誘う。

「私の過ちで、無益なことをしてしまいました。彼等に償いたいのです」

胸に手を当て悔恨の言葉をミハイルは口にする。コークスがテントに横たわるファティマに視線を送った。

そして白いファティマスーツに目を留める。

「セルマ……」

コークスが伏したファティマの名を呼んだ。その声にパルスエツトがハツと顔を上げる。

「レスター、ファティマを車に運べ、まだどうにかなるかもしれない！」

ミハイルはファティマを抱きかかえるとテントを出た。

助かる……いや疑問など考えるなミハイル。コークスは神の手を持つと呼ばれた男だ。その望みに託すことにしよう。

ファティマをデイグに乗せる。車内は思いの外広かった。

そこにある機器にミハイルは目を見張る。一流の病院でも滅多にお目にかかれない

医療器械が積み込まれている。

「パルスエツト、手伝え。あと、若いの」

コークスが両眼を覆うグラスアイを身につける。

「はい、何なりとお手伝いします」

「貴様は邪魔だ。ここから出ていろ」

役立たずと言われミハイルは頭を垂れて身を引いた。やれることは祈ることだけだ。

砂嵐はすでに止んでいた。吐き出した息は白い。ミハイルは視線の先で赤い空に沈むノウズの太陽を眺めていた。

そして時は流れすぎる——それは長い六年という歲月だった。

## 【1話】目覚め

コンソールのモニタの画面に浮かび上がるのは背の高い老人の姿だ。

その毛髪はすべて禿げ上がっている。痩せた肉体を包むのは白衣だ。その強面の顔に、一度見たら忘れないであろう印象的な黒いグラスアイを両眼にはめている。

その顔は無表情のままに画面を凝視している。

グリーンの色彩を帯びたモニタが映し出すのは液体の中に横たわる裸身の少女。その顔が浮かび上がって別画面に映し出される。

ファティマ――

この世界に生み出される芸術品であり、最強の戦闘マシン・モーターヘッド（MH）を駆ることができる電子の妖精。

寿命を持たぬ女性型ファティマ・S型。特に若い少女の姿をしたソレは緑色の液体に浸かつて、普通の人間がするように深い眠りの呼吸を繰り返す。

水中呼吸可能なその液体は主に医療現場では馴染みのものだ。外界からのいかなるアレルギー物質からも肉体を守ることができる。

その羊水はファティマの身にもっとも馴染むものだ。ファティマはその中で成長を

し、または肉体の再生を行うことができた。

免疫能力に欠陥があるファティマにとってなくてはならないものだといえる。

その技術は人間への医療に応用できるものだ。どんな重傷でも治療を行うことができた。

優れたファティマ・マイトはジョーカー星団における最高の医師でもあった。

グラフ上に表記されたバイタル画面は正常。裸体を晒す少女の胸元が上下し幾つもの気泡が浮かび上がる。

老人の骨ばった指がコンソールのキーを操作する。するとブシユンと音を立てベッドの固定保護システムが外れた。

同時に排出された蒸気が室内に満ちて彼のグラスアイを曇らせる。

『スリープモード解除。ベッドタンクのロック解除を開始します。一〇、九、八……』  
機械的なマシンボイスがカウント開始を告げる。

中央のファティマ・ベッドがロックを外されて音を立てて盛り上がる。狭い工房内に起動音が響き渡り停止した。

工房内にファティマ・ベッドは一つしかない。いくつもの管とチューブがむき出しになつてベッドに繋がれている。

その狭い空間の中にジョーカー技術の粋が詰め込まれていた。



そして少女はその瞳を開く。

永い夢を見ていたような気がする——

浮かび上がる意識はそれまで見ていた儂い夢を破り周囲の様子を知覚させる。揺らぐ髪が液体の中で揺れる。

緑色の海の中にいるようだ。

どんな夢を見ていたのか思い出せない。手を伸ばせば届くような夢は覚醒と共に消え去っていく。

コポリ、と音を立てて気泡が浮かび上がる。緑色の液体がベッドから排出され裸身に繋がれた細く透明なケープル達が露になっっていく。

ベッドから起きた彼女の意識は冷たく暗い世界に覚醒する。液体の中のあたたかな温もりと違つてここはえらく寒い。

(ここは……どこだろう?)

音を立ててベッドタンクの蓋が開いていく。室内の照明を受けてファティマの瞳が黒い輝きを放った。

調整されたばかりなのでアイカバーを外されている。

基本的にファティマは感情を人前に映すことを許されていない。

その美しさを人間らしく表現することは禁じられていた。ジョーカーの星団法は

フアティマを縛るためにあつたが同時にフアティマを守るために存在する。

薄い透明なアイカバーはフアティマに義務付けられた制約であつた。

少女は眩しさに瞳を閉じる。肌に触れる空気をとても冷たく感じる。ベッドの中のぬくもりは永遠の揺りかごだ。

起こそうとした身は起き上がれずにペタリと浴槽に腰を下ろしたまま周囲を見回した。

久しぶりに目を覚まし肉体と精神の接続に不慣れであつた。

愛らしく優美な曲線を描く肢体。無防備なまでに煽情的な姿をさらすが、少女は脱力したまま首を傾げる。

髪からこぼれる雫が体を伝い、腰から太ももへ。そして足元の液体の残滓と交じり合う。

肉体に刻まれているのはマシン・ナンバーと呼ばれる個体マーカード。

グラスアイ越しに老人が少女を覗き込む。

「あ……」声を出そうとしてその細さに驚く。まるで自由に声が出ない。まるで長いこと喋らずにいて今初めて言葉にしたかのようなうだつた。

「オール・デイツー。わしの声が聞こえるか？」

老人の問いかけにベッドの中の少女は頷いて応える。それが自分の名であることの

再確認。

私はA11 D2（オール・ディー・ツー）。それが新しく与えられた名前だ。そう、前の名前？ そんなの知らない……

「エディ。今後お前をそう呼ぶことにする」

私はわたしが誰であったのかを忘れてしまった存在。A11 D2（エー・ディー）なのだ。

「さあ、答えてごらん。わしが誰か言うてみる」

エディはその名を知っている。記憶野に刷り込まれた情報が正しい答えを告げる。

何度もその顔を見た。それは教育システムを施すときの顔であつたり細かい調整をするときの顔でもあつた。

そして小さな声でその名を告げた。

「……グラン・コークス博士。お父様です」

黒のグラスアイが無表情にエディを見下ろす。

老人の視線には感情がなく羞恥心は湧いてこない。いや、感情は浮いては沈み込んで薄い余韻を残すのみだ。

今ここにいていないような不可思議な感覚。個体としての自らの感覚がまだ不確定な精神を揺るがせる。

「お前は一度壊れたスクラップだ。新しいマスターを見つけるまでわしと共に生活することになる」

A11 D2はスクラップという意味だ……

新しいマスター？ 前のマスターは……？

わからない。思い出そうにも記憶屋は何の情報も残していなかった。

倦怠にも似た喪失感が全身を包む。なぜかはわからなかった。

濡れた肌が外気によって乾かされていく。

(どうしてこんな？ どうしてここにいるの？——)

不意にわからない感情が心を満たしてかき乱す。

取り乱してもおかしくない精神状態。その激しい感情は抑え込まれて平静な感情に

戻される。

感情抑制。精神制御のシステム。ダムゲート・コントロールが働く。

一瞬浮かび上がった強い感情と記憶のようなものはすぐに無意識下に仕舞い込まれて消えてしまった。

思い出そうとして思い出せない。直前の感情の働きが何であったのかさえもよくわからなかった。

「記憶に問題はるか、エディ」

「いえ……」

覗き込むように一步踏み出したグランの間にエディはコクリと頷く。

私はAD（エディ）。

壊れたファティマ。

お父様が直してください。

以前のことは何も覚えていない。

今のはきつとエラー。

D2とはファティマの性能を測る基準の一つだ。それは数段階に分類され、パワーゲージという単位は純粋にファティマの能力を図る基準となっている。

D2は一番下の下級ランクだ。A11 D2とは厳しい工場ファクトリーの基準からすれば廃棄対象であることを意味している。

インダストリー製ファティマの不良品とは文字通り廃棄され処理されることだ。

それを人道的な見地から捉えられる殺人と定義を同じにされる事はない。なぜならばファティマは人工生命体であり、人間としての人權を一切保有していないからだ。

人ではないゆえにファティマは物として扱われる。それは星団法に基づいては合法であった。

完成にまでぎつめたファティマの廃棄も滅多にあることではない。

他の追隨を許さない超高性能コンピュータであり、戦争の兵器の頂点であるMHを駆る彼女たちは非常に高価な財産でもあるからだ。

精神崩壊から再生して復帰する者もいる。しかし、廃棄されたファティマの辿る運命は過酷なものだ。

そのことをエディは知っていた。いや元からの記憶などあるのだろうか？ さつき  
の記憶と感情は何であつたのか？

自分でも抑えきれぬものが込み上げて心を揺らしたのだ。そのざわめきも今は何も  
感じない。

「立て」

「はい」

言われた通りにエディは立ち上がる。お父様の言葉に逆らうことはできない。その  
ように造られている。

作製者であるマイルトは親であると同時に、アークマスターとして、マスターと同等の  
制約をファティマに課すことができた。

「わしのこととはダディと呼べ」

「はい、お父様（ダディ）……」

寒さで震えるエディの剥き出しの肩に大きなバスタオルがかけられる。

「死にかけてだったお前を助けたのはわしだ。覚えているか？ 頭を吹き飛ばされ、脳波も死にかけていたお前のスイッチを入れたのだ。お前は以前の記憶を持っておらん」

「はい……いえ」

エディは首を振った。何も覚えていなかった。老人の顔を見て思い出すものは何もなかった。

焼けた大地と壊れた戦車。

いくつもの戦場と。

壊れたロボット――

モーターヘッド――

まただ……

それは突然、フラッシュバックとなってエディを襲う。体を奮わせ自分の腕をタオル越しに強く掴んだ。

今のは何だ？

私の記憶なのか？

それは初めて感じた恐怖だ。

怖い？

怖いという感情？

グランは背を向けてベッドの後始末に取りかかる。その背をエディはぼんやりと見つめる。

「……久しぶりの表の空気だろう。上に部屋を整えててある。シャワーを浴びてゆっくり休め」

「はい……」

訪れた動揺も一瞬の記憶が去って精神制御が効いたのかエディは冷静さを取り戻す。「そこを出て、左へ行き階段を上がれ。そこがお前の部屋だ。服もある。好きなものを着ろ。ファティマ用のものだから気にしなくていい」

扉を指差してグランが指示する。

「わかりました」

その言葉に従ってエディは狭い工房を後にする。コークスの背中を見つめた後自動扉が閉まり通路の右手を眺める。

工房から出ると廊下が左右にあつた。左手にはグランが言ったように階段が見えた。右手を眺めるとそこは居間だ。奥がキッチン。その通路を真っ直ぐ見ればさらに下に下る階段があるのが見て取れる。

よくある、ごく普通の一般家庭に見られるような構造だ。縦に長い構造であると推測



できる。

お父様に言われたとおり上に上がる階段を登る。

途中の踊り場に窓があった。光がそこから差し込んで淡いグラディエーションの色彩を地味な石畳の床に投げかけている。

そこで足を止めて窓際から外を眺めた。青い空に眩しい光が目射した。

眩しい――

窓の遙か下に連なる赤い屋根が見えた。今いる場所が思ったより高台にあることに気がつく。

窓を開け放つ。下を眺めれば、緑の蔦が淵にまで伸びて、円を描く塔の壁面を緑で埋め尽くしていた。

鳥の鳴く声がすぐ近くで聞こえる。今いる位置と同じ目線で白塗りの高い塔が見えた。

鼻先が少しむずがゆくなる。耐えられなくなつて顔を押しえて軽くくしゃみをする。

クシユン……

まるで城のようだ。眼下にあるこの建物に属する建造物群と塔は古代の城を思わせる造りだ。

遠くの曲がりくねつた道路をデイグが走つて行くのが見えて谷あいの町に入つてい

く。その町から高台に道が伸びていくつかの見えない経路を伝ってこの城まで続いていた。

断崖の谷のような場所にある城だ。こんな場所にそびえ立っている。

ここはどこなのだろうかと見上げるも視界情報から読み取れるのは青い空を流れる雲の動きの予測くらいだ。

日中の陽気に暖められた空気がまた鼻孔をくすぐる。

クシユンっ！

もう一度、今度派手にくしゃみをする。

「ん……」

タオルをまとっただけの素足でここは冷い。素肌に感じる寒さはバスタオルでは防ぎようがない。

窓を閉め棧と窓枠の作り出す影と交わる自分の影を踏む。

天井を見上げれば上に扉が見えてそこ以外に該当する部屋がないのを確認する。階段を上がりきり塔の頂上に当たる部屋のドアノブを回す。

そこは暖かさで包み込まれた小さな空間だ。部屋に満ちる日向と花の匂い。部屋を一定の温度に保つ微かな空調の音。

レースのカーテンのある出窓に黄色い花が飾られているのが見て取れた。壁は花柄

と草模様のベージュの壁紙が部屋一面を支配している。

こじんまりとした部屋で調度品は木製の箆笥に小さなテーブルと椅子、そしてベッドがあつた。本棚にある本は児童用の教育雑誌で女兒向けのものだと見て取れる。

それ以外のものはない。シンプルで居心地のよい部屋だ。部屋の雰囲気は元々この部屋が女性のものであるのだろうという印象を受ける。

この部屋を使えるということは空き部屋なのだろう。見覚えがあるものは何一つない。ひとしきり部屋を眺めた後、小さな洗面所のあるシャワールームの戸を開ける。壁に小さな丸い窓がついていて柄はないが部屋と同じベージュ色の壁だ。

バスタオルを脱ぎ捨てて淡い光の中に裸身を晒す。無駄な肉一つない肉体は少女らしさを強調する。

傷一つない白い素肌。その自分の体には何の感慨も湧かない。

バスタブにその細い足を入れるとコックをひねる。水が出てそれが温かくなるのを待つ。

すぐに湯が出て水しぶくシャワーに身を委ねる。そして熱い雫の洗礼を頭から受けていた。



——目覚めから二月後。

小さな雲が風を受けてあつという間にぐんぐんと流れ去っていく。その空の下では試合が行われている。

地を蹴った足のすぐ後に衝撃波が地をえぐる。そして刃が交差する瞬間にエディの手からスパッドが飛んでいた。

「あつ!？」

止まろうとしたものの勢い余ってエディは尻餅をつく。ショートカットの黒髪が揺れて飛んだスパッドの行方を追って手が伸びる。

そのスパッドを空中で掴んだのは黒衣の老人だ。

次の瞬間にエディは投げ飛ばされた。お留守になった足元をさらわれる。そして腕を掴まれ芝生の地面に寝転がされていた。

「踏み込みが遅い。お前は今ので三回は死んでいるぞ? 流れを読め」

グラン・コークスが真上から覗きこんで告げる。

「お父様は強いです……」

抗議するようにエディはお父様であるグラン・コークスを見上げる。

マイトでありながら騎士としての力を持つ者は希少だ。その力の差があるが、コークスは純粹な騎士としてよりマイトとしての力の方が強い。

それでも一般基準のファティマより力は強かった。廃棄基準（ALLD2）のファ

ティマがどうあがいても敵うようなものではない。

騎士に敵うようなパワーゲージを持つファティマの方が希少ではあるが。

「不器用者め」

「はう……」

手厳しいレッスンだった。お父様からスパッドを受け取る。

戦うことは少し……いやかなり苦手です。

お父様の教育は厳しいです。といつても、普通の子なら簡単にできることも私には少し大変です。

壊れる前の自分のことは知らないけれど、きつと前の私もダメな子だったに違いありません。

だって、失敗ばかりで合格点を全然もらえませんか。

繰り返しやる演算計算すらも大変で自己流のプログラムを作れと言われたときも作ったものを見せたら変な顔をされました。

だから、目下は家事整頓をきちんとやろうと考えています。館の人に掃除のコツを教えてくださいましょう。

「エディ、来週からわしの診断について来い」

「はい？ 町にですか？」

エディは首を傾げる。

町というのはシユロの街だ。今二人がいる館の庭はル<sup>II</sup>フィヨンドという名で城の名前でもある。

ここが二人が暮らす場所であつた。生活空間はもつぱら塔の中で、館は公務を行う場所として使われている。

エディの知識的、情操的な教育を行うのは主に館の中でだ。

お父様が町に出ているのは知っていたが何をしているのかはよく知らなかつた。週末になると必ず出かけるのだ。

今まで城の外に連れて行つてもらつたことはなかつた。ファティマが出歩くことは基本的に許されないことだ。

許しを得て外に出るのは初めてのことに。自分はずまく立ち振る舞えて良い点数をもらえるのか自信がない。

少しだけドキドキする。

人前に出て本当に大丈夫だろうか？

粗相をしてみまわないだろうか？

我ながら世間知らず過ぎて困つてしまう。

エディはグランの後に続いて館の中へ入る。

来ている服はファティマ用のスモックで動きやすいものだ。しかし素材は天然素材であるからその服だけでもとんでもない値段になる。

それを容易く汚してしまうのでエディはとても申し訳なくなるのだ。洗濯は館にいる使用人の仕事だ。

「お嬢様、服が仕上がりましたので試着をお願い致します」

「はい」

メイド服の女がエディを迎えて奥の部屋へ誘っていた。

城に勤める使用人はエディのことをお嬢様と呼ぶ。

ファティマに対する態度ではないのだが、マイトは貴族級として扱われるし、コークス本人も子爵位を持つ。

自然、彼が扱うモノに対しても敬意が払われている。

エディを見る目の多くは好奇心からであったが、グラン・コークスという存在に対する尊敬に寄るところが大きいのだろう。

ファティマであるからといって粗末な扱いを受けたことはない。

そのルーフイヨンドにおけるコークスのもう一つの顔がミッテラン子爵という呼び名であった。

騎士の称号と正式な爵位を持つ貴族でもある。

華美ではないもののエディもその格に合わせた格好をさせられる。館とその敷地内限定であるが肌を見せないフアティマ・ドレスに身を包むのだ。

普段着にしては贅沢なスモックを脱ぎ捨て用意された服を手取る。

「この服は……？」

「表に外出するときはそれを着るようにと旦那様が」

「わかりました」

下着姿になってエディは服の袖に腕を通していく。

「大変良くお似合いです」

黒を基調としたスカートを揺らしてエディはくるりと鏡の前で一回転する。黒い髪と合った服装になった自分が自分を見つめている。

色合いは地味ではあるものの色はお父様とお揃いであった。それが少し嬉しい。

「お父様は町で何をしているのでしょうか？」

ずっと疑問だったことを口にする。するとメイド嬢はニツコリと笑い返す。

「子爵様は町の恵まれない子や病人を無料で診察してくださります。壁の外にいる家庭にも気を使って診察に行かれるのです。大変有難いことです」

「そう……」

「いつもお一人でしたので、お嬢様が付いて行ってくださると助かります。子爵様は大



事な方ですから。

その次の日からエデイのお父様の助手生活が始まっていた。エデイがシユロで目覚めてから二か月少しのことだった。

## 【2話】 来訪者

その日エディが長い廊下を抜けて執務室の扉を開けて一番に聞いた声は叱責だった。

「エディ、遅いぞ」

「申し訳ありません。お父様……」

お父様に頭を下げ謝る。

お庭に遊びに来てた仔猫さんが可愛くて構ってただけなんです……

エディはお父様に言い訳を考える。命じられたらすぐに動かなければこうして叱責が飛ぶのだ。

その厳しさは城の使用人にも徹底されているので、普段は陽気な人も主の前では厳格な使用人となる。

お父様から満点をもらうことはかなり難しいのだ。

「お前に仕事をしてもらう。届けてもらうものがある」

「町にですか？」

お父様のお付きで出かける任務は週に一度。それ以外で城の外に出たことはない。

「いや、炭鉱町の方だ。届けるのは薬だ」

「はい」

机の上に置かれた処方箋の葉が入った袋を受け取る。書かれた住所の場所は知っている。特に辺鄙で町の人間は寄り付かないような場所だ。

元々炭鉱町として栄えたシユロも今では観光が主体となっている。炭鉱町には細々と暮らす人の集落がまだ残っていた。

炭鉱町は特に貧しい人々が暮らしている。エディもまだ一回しか行ったことがない。でもお仕事を単独で任されるのは初めてだ。これを完べきにこなせばお父様が「よくやったエディ。お前は最高の娘だあ」って言ってくれるかしらん？

……訂正。絶対言いませんね。

「終わったらまっすぐ帰って来い。寄り道するな」

「はい」

袋を抱え張り切ったエディが走って館を出ていく。その姿を窓越しにグランは眺めてカーテンを閉じた。



そしてシユロを目指す一人の旅人がここにいる――

波打った砂を風がさらって細やかな粒子を振りまいていく。そこは広大な砂の海だ。

その足元から崩れる砂を踏みしめる。砂丘を越えて荒涼無人の地を歩くのはコート

で身を覆った男だ。

もつとも顔もフードですつぽりと覆っているから男なのか女なのか定かではない。吹き付ける砂礫は人の肌を容易に傷つける。

ブーツが砂にとられ一歩進むにも難儀する。足は踝までズブズブと沈み込む。ここまで歩いてくるにもかなりの労力を費やしていた。

「ひい、ふう……」

砂地に転々と足跡を残し彼は高い岸壁を見上げた。

吐き出した息は白い。大陸の南といつても今は冬だ。

崖は自然の風が創り上げた超自然の産物だ。

デイグのエンジントラブルで放り出されていなければこの景色をゆつくりと眺めていられたのだが。

「近道だと思つたら道なんて全然ないじゃないか……さすが辺境地帯だよ」

強い風にフードを押さええ青年が呟く。言葉を風がさらってあつという間に谷の狭間に運んで行った。

谷の回廊——彼が目指すのはその先にあるシユロの町だ。

ふと足を止めて周囲を見回す。そして常人の耳では捉えきれない音を拾っていた。

「面倒事……かな？」

いったんはその方向から背けてシュロの方を見る。

「まあ、なんだ。放っておくのもあれだしね……」

それがブラスターが発射された音であると理解する。そして走り出す。一ツ跳びで最初の短い渓谷を横断する。

遠目に見えたのは小さな集落だ。岩肌を何度も蹴つて跳んで辿り着いた。

そこに土色の壁に同じく土を固めて作った屋根を持つ家がある。突き出した煙突があり納屋か倉庫として使っているであろう別の建物も見える。

のどかに見える田舎の風景のようだが暴力が行われた形跡が見て取れる。貧しさを表す粗末な家財と破壊された家具の木片が飛び散つて砂に埋もれていた。

慎重に岩場を降りて近づく。家の中の気配を察知して足を忍ばせて家の中を覗く。破壊された扉入り口に額を貫かれた男が無残な骸を晒している。

この家の主だろうか。その手にはブラスターだ。先ほどの銃声はこの銃だと思われるた。

その奥で二人の男が女を犯していた。

ドラッグ——

一目で彼は男らが薬物に汚染されていることを見抜く。女はすでに事切れていた。その手足は異様な方向に曲がり骨は砕かれている。

死骸を犯すなどまともな神経ではとうていできない所業だ。

騎士の力を持った者が一般人を力任せに犯せば結果は見えている。それもドラッグで破壊された脳では理解などできまい。

辺境のあぶれた騎士の犯罪など珍しいことではないが、現場の凄惨さは目を背けたくなるものだ。

「なんらあ、てつめえ？」

「葉か……」

一人が濁った瞳でフードの青年を睨みつける。濁った目で下半身をさらし猥雑なものをつぶら下げている。もう一人も死体を犯し漁るのに夢中だ。

家の中に漂う匂いに青年が眉をしかめた。フードを深くかぶって固定しているのでその顔は見えない。

「酷いことをする」

「ああん？」

男が次の言葉を洩らすことは二度となかった。ほぼ同時に二つの首が跳んで乾いた音を立てて青年の足元に転がる。

目にも留まらぬ早業だ。青年の手に光剣（スパッド）が握られている。

事切れた死体が四つ並んだ。埋葬をしなければならない。

「ごめんね……」

裏手から派手にものが崩れる音が響き野太い男の声が聞こえた。女の悲鳴の後沈黙する。

「あつちもかつー！」

家を飛び出して走る。家の裏手の少し離れた倉庫がある。凶行がそこで振るわれていた。

家畜が逃げ惑い血に濡れた地面に倒れ伏した男女の姿があつた。組み伏せられた少女はまだ幼いと見て取れる。

納屋の前で溢れ出た藁の前に膝を突き粗野な男が少女に馬乗りになっている。

「ぎひひ、こいつはおーあたりだぜえー」

「……っー」

涙に濡れた少女の顔が歪む。男の汚らしい一物がまだ幼い少女を貫いて男は歓喜の笑いを響かせて腰を沈めた。

「ひゃっは〜っー！」

悦楽の笑みを張り付かせたまま男は息絶えていた。ゆっくりと倒れたその首をレーザー剣が貫いている。青年が投げたものではなかった。

「誰？」

青年の誰何に風車のある塔の影から少女が戸惑うようにこちらを見ている。

そのほっそりとしたシルエットは風よけのマントを羽織っていてもよくわかった。騎士にしては線が細すぎる。

ファティマ？

いや、だけど？

ファティマが人を殺すものか？

青年は戸惑いながらもその少女を観察する。

「君が投げたものだね？ 僕は彼らの仲間じゃないよ。取りにおいで」

光剣を拾って青年はファティマに掲げて見せる。もう危険はないし害を加える存在でないとアピールする。

強い風が風車を回して音を立てる。マントごとさらってしまってしまいそうな風だ。この地を支配するのは風の暴君だ。

死体が転がる横で青年は少女を介抱する。少女の年の頃はまだ幼くジョーカー年齢で三〇を越えないくらいの少女だ。

ショックで気を失っているのだろう。そのあどけない顔が凶行に晒された少女の悲惨さを強調していた。

股から血を流した少女の体をすっぽりとマントで包んで抱き上げる。



野ざらしに無残に転がる三つの死体。少女の両親であろう男女は息絶えていた。

黒髪のファティマが死んだ親の側に座って顔を確かめている。その少女に青年がスパッドを差し出す。

「はい、どうぞで」

「ありがとうございます……」

スパッドを受け取り——エディは礼を述べた。青年の顔を見る目をそらせない。

あまりにも美しすぎる青年がいる。中性的で女性でも通りそうな声。長い栗色の髪を編んでひとまとめに束ねている。

一目見て女性かと見紛うような人物だ。このような人は館にもシユロの町にもきつとない。

「食いつばぐれた連中か。国境近くにはゴロツキが多い」

「あの、騎士様」

「え？ あ、僕は騎士じゃあないんだ……」

「え？」

エディの瞳が揺れて青年を盗み見る。

どういう意味だろうか？ 騎士ではない？

騎士以外あの動きはできないことへの疑問がそこにあつた。身体能力は明らかに

自分を上回っているはずだ。

しかし、騎士ではないと言われればそんな気もしてしまう。それはエディの勝手な騎士のイメージからだったが。

強いのかもよくわからない。ファティマとしてのマスターを選ぶ本能が機能していない。

お父様が仮のマスターだからだろうか？

それともただの壊れファティマだからだろうか？

エディにはその区別がつかない。

「僕はマイスターなんだ。駆け出しのモーターヘッド・マイスターでね。名前はレディオス・ソープ。君は？ ファティマさん？」

ソープがエディを見つめる。その美しい瞳にエディは一瞬だけ言葉を失う。

「AD……エディです」

名前を告げる。そして付け足す。ここにいることの説明だ。

「えと、お薬をお父様から届けるように言われてきました。シユロの人たちは守らなければいけません……」

「なるほど、ファティマが独断で人殺しなんてできないものね。じゃあ、この子のことは知ってるんだね？」

「は……」

エディは頷く。ソープに言ったようにエディは薬を届けに来ただけだ。

この場所は崖な上に傾斜が多く困難な場所なので普通の人あまり訪れない場所だ。炭鉱で働く二組がここに住んでいた。

お父様から聞いた話によると、この近辺で働く人々はボオス星から来た人々の末裔らしい。シユロは各星から来た移民が作った町でもある。

この家の生活様式はナカカラ様式と呼ばれていて独自の文化を感じさせるものだ。住民は無残にも殺害されてしまったが。

少女の名前までは知らなかった。前に来たときは見なかったからだ。若い娘が一人いるということは知っていた。

この辺境地帯では観光客以外はシユロにはやってこない。国境を越えて入り込んだならず者がやってくることもある。

自警団もあるのだが騎士は皆無だ。騎士警察（ナイトポリス）など当然ここまで来ることもない。

エディに与えられたコードはシユロの住民を脅かす者と戦うことを許すものだ。それはマスター命令と同様の権限だ。

ダムゲート・コントロールもその命令には作動しない。

しかし騎士が三人もいてはエディではどうすることもできなかった。助けを呼ぼうと思ったとき青年が現れたのだ。

その青年は騎士ではないというのが騎士を殺害している。それは正当防衛だろう。この辺境では何が起るのかわからないのだ。

「ここに警察なんていないよね……」

「自警団がいます。もう呼びました」

「良かった。実は迷子でね。デイグが故障しちゃって」

「位置を教えてくださいだされば回収します」

「お願いするよ」

ソープが笑って片目をつぶってみせる。

あわわ……

エディの回路が混乱する。どう対応していいのかよくわからない。



シユロ市内のセントラル広場にソープは立つ。

「さっすが辺境。民族色彩豊かだな。異国って感じがするよね」

ボスつと音を立て紐のついたナップザックが石畳の床を軽く叩く。様々な色合いの石が組み合った石畳が目を引きつけて楽しませる。

観光客が居つくにはわりと居心地は良さそうである。国境地帯なので覚悟はしていたがここは安全そうだ。

ソープは能天気にも周囲を見回す。

その外見は一見すれば女性と間違えられることが多いが彼にとつてそれは日常茶飯事なので慣れつこだ。

もつともこういうところでは余計なトラブルがやってくることもある。

「はぁーい、お姉さん。宿はどう、もう決まつてるの？ 安くしとくよ」

「ありがとう、でも平気、宿はあるからさ」

客引きをあしらいいベンチに腰掛けるとシユロ市の観光パンフレットを開く。

「うーん、お腹減っちゃたなあ……にしても、ここつて紛争地域つて印象とは違うなあ。自治領主殿の手腕つてどこかな？」

そう呟き市内バスから降りた人々が歩き去る街路を眺める。多くの人々が行きかい露天も多く見られる。

数時間前は荒砂漠にいたのだがこの街の活気は悪くない。道の脇には水路があつて綺麗な水が流れている。

標高があるわりに水をふんだんに使えるのはいいことだ。

「あの、レディオス・ソープ様」

エディに呼びかけられスープは振り向く。

連絡したシユロの自警団が到着して彼らに引き継いで二人は町の中央に向かっていた。そこで身分証明やら何やらを提出し、ついでに入国手続き申請も済ませたのだ。

シユロは小さいながらも国境地帯にある独立小国である。他国からの干渉を受けることはなかったし、観光客はIDを提示しなければならない。

「お帰り、エディ。もう終わりだよね」

「はい。お時間を取らせて申し訳ありません。レディオス・スープ様」

「スープでいいよ」

「はい………スープ様……？」

エディは緊張気味に言い直す。

呼び捨てにすることはできない。若いけれど敬意を持って呼ばなければならないのである。

マイトやマイスターは貴賓扱いするのが常識だ。

「うん」

エディはちらりとスープを見てからデイグを遠隔操作して広場まで誘導する。

「領主閣下のお招きだね。会うのは久しぶりなんだよね」

「では、お父様とはお知り合いなのですか？」

「古い付き合いだよ。シユロにこもってからは一度も会ってなかったんだ」  
デイグに乗り込んで走り始める。運転するのはエデイだ。風がソープの髪をかき乱す。

谷の上にある城を眺める。夕暮れの日差しがいくつもある尖塔と外壁を赤く染め上げている。

ルIIフィヨンドはシユロの観光資源でもある。星団ガイドブックにもシユロの城のことは写真付きで紹介されている。

「お姫様を眠りから解き放つのは白い騎士か、それとも——」

意味深なその言葉はすぐ隣りの少女には聞こえない。風が音をさらった。

そしてソープはそんな自分の台詞に笑うのだった。

## 【3話】エデイの一日

朝の小鳥がさえずる声でエデイは目を覚ました。親鳥が甲斐甲斐しく子どもにエサをやる姿を確認して今日の身支度を整える。

小さな鏡台の前に座り髪を梳く。

首に下げたクリスタルが光を反射する。取り外し式のヘッド・コンデンサだ。

これはファティマにとってとても重要なものです。

胸元のそれを指先でいじりながら、今日は何をするのだろうかと思考する。

剣術の練習はしているが光剣の扱いはまだ慣れない。先日投げたときもあまり自信がなかった。

当たったのも相手が動かなかったからだ。

おぞましくも少女を犯す騎士相手に立ち向かうには相手が油断していなければいけなかった。

それは正しい判断であつたはずだ。

結果的に少女が傷付けられるのを傍観することになってしまった。エデイの物思いは沈み込む。今日は剣術の練習はなしでいい。



気持ち切り替えようとダンスから服を取り出してベッドに順番に並べていく。

週末はお父様とお出かけをする日です。

週に一度。一緒にお買い物をしたり、本を読んで人前で朗読したり、外に出て勉強をするのです。

人前に出て話すための訓練でもあるのでお父様は助けてくれません。これも社会勉強のためだそうです。

話しかけるのはいいが親しくするのは禁止だと言われました。親愛の情を示されてもフアティマは友人になってはいけないのです。

フアティマに親しくしてくれる人は珍しいと聞きます。

はい、私はお父様の言うとおり、ちゃんと人に話しかけて答えをもらう事ができません。お城の人とはみんな顔馴染みになりました。でも、向こうからは滅多に話しかけてきてくれません。

彼らは——掃除をする人。料理を作る人。庭を手入れする人。領主の身の回りの世話をする人がいます。

彼らは私のことをお嬢様（マドモアゼル）と呼んでいます。それと同じようにお父様は閣下（ムツシュ）と呼ばれています。

シユロは多国籍な人種が多い町です。昔の鉱山全盛期に各地から人が集まってでき

た町だということですよ。

今でも街にいけばいくつかの言語が交じり合った言葉を聞くことができます。多数派を占めた人の言葉が今でも残っているのだと町の創設資料に書かれていました。

いけない。時間に遅れてしまう——お父様は時間に厳しいのだ。

ファティマ用のスモックスカートを身につける。お父様に指定されたものだ。

成人したファティマが身に付けるファティマ・スーツよりもスモックは柔らかかみがあつて普通の衣服とあまり変わるところがない。

黒のロングスカートはファティマに定められた服装基準ではありません。でも私はお父様が着ろというものを着ます。

その上にカレントスーツと呼ばれるコートを羽織り、帽子をかぶれば日常の外出着は完成する。

ああ、帽子をかぶるのも服装規定から外れているようですね。

よし……

出かける最後のチェックに小窓を開けて外を観察する。ひさしの下の鳥の巣を見て今日の元気をもらうのだ。

親鳥はエサを取りに行つて留守だ。ピーピー鳴く小鳥たちに「行ってきます」と挨拶をしてエディは部屋を出た。

◆  
ブーツを鳴らして黒衣のグラン・コークスがルーフィヨンド館の広い玄関ホールに立つ。

アーチを描く天井の天窓から降り注ぐステンドグラスの光がよく磨かれたホールの床に反射する。その光が冷たい玄関の空気を暖かなものにしていた。

壁際にかけてられた古時計が太い針を揺らし針が時刻九時を指す。規則正しい音が人気がない廊下に鳴り響く。

城の使用人たちは館のそれぞれの配置で仕事をしているはずだ。

「エディ、まだか？」

グランの声が響き、少し遅れて返答が返ってくる。

「はい、お父様」

返答の後、エディが奥から姿を現す。その手に大きな鞆を片手で持っている。

大の大人でもやっと持ち上げられる医療用の鞆だ。それを顔色一つ変えずにグランの元に運んでいく。

外出用の医療カバンだが緊急医療の道具も入っていて軽く五〇キロ相当の重さがある。

細身の少女が持つにはアンバランスな代物だがファティマはただの華奢な人形では

ない。

重いといえば重いけれど大事なものです。

エディはグランの隣に並んで真上を見上げた。この館で最も美しい天井が玄関にある。

天井から差し込む赤や青のガラスが生み出した光の模様が創り出す世界は厳かで幻想世界への入り口、もしくはは出口のように思えた。

エディの格好はグラんに倣うように黒一色だ。

黒いファーの帽子に、同色のコートに膝下まであるスカート。そして手袋からつま先まで、どこまでも黒で表現されている。

身を包む服の素材は合成繊維ではなくすべてが天然素材の服だ。

スモック以外で身につける細かい品も高級品であった。ファティマの身を包む手袋さえも一般人には手が届かない品である。

それ以外のものをファティマのデリケートな肉体は受け付けけない。劣性遺伝の塊であるファティマはささいなアレルギーすらも致命的な病となりえるのだ。

それゆえにファティマを所有するということは体調や精神の管理にと大変な資金を必要とするのだ。

間違つても一般家庭の家政婦のように扱えるものではなかった。が、グランはまった

く気にすることなくエディを使っている。

それは多くの場合、普通の騎士がするようにであった。

「やあ、おはよう。お出かけかい？ お洒落さんだね」

ホールに青年の声が響く。ホール上の階段の手すりに身を預けてソープがいた。

「おはようございます。ソープ様」

向き直つてエディは頭を下げてソープに挨拶する。

ただの挨拶だというのに緊張してしまう。ソープ様にだけこうなるのはどこかおかしいのかもしれませんが。お父様に診てもらわなくては。

「領主閣下様もおはよう。今朝はちよつと冷えたね。朝食は済ませたの？」

ソープの問いにグランは答えない。代わりにエディが返答する。

「はい、先ほど」

「僕はお腹ぺこぺこだよ」

「いつまでも寝ているから食べ損ねるんだ」

グランが振り返つて言った。

「それより、ここに駐屯騎士を置かないのはやはり物騒じゃないかと思うよ？ 治安だけじゃなくて、ここも危なくないかな？」

「過剰な武力は厄介事を持ち込むものだ。近頃のモータヘッド狩りの手合いも相手がい

なければシユロなど眼中にはいれんよ」

「そうかもしれないね」

MH狩り？

初めて聞く話だ。二人は把握しているようだが……

「貴様は貴様の仕事をしていれば良い」

「そうだね、午後いっぱい調整から初めさせてもらおうし、必要になったら彼女を借りるよ」

「はい？」

自分のことだと気がついて生返事を返す。エディを見てソープがにっこり笑って返す。

それがまるで不意打ちのようにも感じて胸がドキドキした。

私の回路がざわめく。

ちよつと危険信号。

収まれ、私の心臓。

ダムゲートが働いてエディは平静さをすぐに取り戻す。

「では僕は下に降りるけど、閣下をよろしくね。お姫様」

「はい、お任せ下さい」

当然の返事を返す。お父様のお世話はエディの役目だ。

家長に従う娘のようにお父様の日常生活の世話をしたから、塔に出入りする使用人の仕事が減って感謝されていた。

元々、城には最低限の使用人しか置いていなかったからだ。

グランが城主として活動することの多いルーフイヨンド館の管理をするのは大変なことだ。古い建物なうえに、この地の気候もあつて修繕を控えた場所がいくつもある。

グランとエディは父と娘というよりも祖父と孫娘という関係性で使用人からは見られていた。気難しい老人の世話は大変なのだ。

ほどなくして城から黒いデイグが門を抜けてシユロの町へと降りていく。



ルーフイヨンド館はグラン・コークスが所有する城だ。館の周囲に四つの塔を持ち城は切り立った崖の上にある。

その城下町であるシユロ市は谷の狭間にあり、外縁部に古風な城郭を持つ人口五万人を擁する小都市でもあった。

シユロは古い歴史を持つ。炭鉱町として賑わったのが三〇〇年前ほどで、今では稀少となった金属の採掘を行っていた。

シユロは独立性を持った自治領である。一切の武力を持たない中立都市であり、軍事

的な意味合いを持たないことから重要な拠点でもない。

そのシュロ市の現在の自治領主がグラン・コークスだ。その名前を表に出すことを嫌ったグランが領主名として名乗っているのが、サロモン・ルイ・ミッテラン子爵という名前だった。

それゆえにファティマ・マイトのグラン・コークスとしての名はあまり浸透していない。

城の外での名称は閣下殿（ムツシュ）だ。シュロ市の住民でその風変わりな自治領主のことを知らない者はいなかった。

毎週休日になると、こうして町に住む地域住民たちの間を廻っては健康診断から治療までを行っているのである。市内の病院でオペをすることもあった。

最近、その同行者にエディが加わっている。



孤児院への慰問は今日が初めてのことだ。エディは人に出会うことに少しばかり緊張する。

人に会うときはいつもこうだ。表に連れ出されるたびに知らない人に会う。

ディグで走っていると街ですれ違う人が手を振って挨拶してくる。挨拶を返したものかと迷うがすぐにその姿は見えなくなっていた。



隣で運転する領主閣下は医務用のグラスアイではなくサンシエードのミラーをかけた運転をしていた。

目を覆ってしまうと黒衣の大男であるグランの印象はかなり威圧的で硬質なものとなる。

どうもあまり、閣下殿（ムツシュ）と呼ばれるのは好きではないようだ。

エディはお父様観察の感想を胸の内ですべる。

言葉で何かを表現することにエディはいまだに躊躇いを覚える。

人と話すのは苦手です……

緊張するとももつてしまうのだ。それが恥ずかしくて口をつぐんでしまう。

お父様から命令されない限りあまり喋らないのはそういうところから来ていた。

でも、ソープ様とはお話できます。外の人なのに不思議な感じですよ。

シユロ市の外れにあるセント・モルガナ孤児院の広場はレンガの赤い壁が印象的だ。

対照的な黒衣の二人が玄関ホールに立つ。真向いに集められた一二人の子どもたちがいた。

「こんにちは……」

「こんにちはー」

少年少女たちの声が円形になったレンガ壁のホールに一斉にこだまする。白い建物

は教会のようにも見えるが孤児院だ。

このセント・モルガナ孤児院では事故や親の死で家を失った子どもたちが収容されている。

挨拶の声をかけたエデイが戸惑うようにお父様を振り返る。この後、どうしたらいいのかわからない。子どもを扱ったことはないのだ。

「エデイ、子どもを並ばせろ。年の小さい順にな」

「はい……えと、順番に並んでください……」

感情の薄い言葉を投げかけてからその反応に戸惑う。

子どもたちはまったく言うことを聞きそうにない。集まったホールでそれぞれが思いの行動を取っていた。

「エデイ、もつと大きな声を出せ」

グランがグラスアイと診療道具を身につける。早くしないと叱責が飛んでくる。

「ひゃいっ！」

思わず素つ頓狂な声を上げてしまい恥ずかしさに包まれる。

……よし、声を出そう。

「み……みーなーさーん。あ、集まってー」

口元に手を当て慣れない声を出して呼びかける。ちゃんと聞こえてるのかしらん？

期待に反して何人かがエディを見たもののまったく言う事を聞いてくれなかった。子どもの中に義手の子がいるのが目についた。事故か何かで失ったのだろうか？ それよりも反応がないことでエディは尻すぼみだ。

じえんじえんダメですし……

「何だ、その気の抜けた声は？」

呆れたようなグランの声がエディに投げかけられる。前門の子どもたち。後門のお父様である。

「う……お父様……」

エディは半ば抗議するようにお父様に視線を返す。

精一杯、出したつもりです……！ いうこと聞いてくれなくていじけそうです。

エディの顔を見て眉を上げたグランが鼻を鳴らして立ち上がる。

「がきどもっ！ 年齢順番に前から並べっ！！ 一〇秒以内で飴二つだぞ」

腕を上げてグランが指を二本突き出す。すると、一斉に子どもたちが走り出し年齢順に整列してみせる。まるで飼慣らされているかのような動きだった。

ガン……それってありなんですかー。

おとーさま。餌付けしてましたか、ソーでしたか。

思わずエディはジト目で見るもグラスアイを付けたその表情を読み取ることは難し

い。

「服を脱がせろ」

「はあい……」

それでも役に立つこともある。予防注射の針を見て何人かの子どもたちが泣き出し  
てしまう。

「大丈夫、ただの皮下注射……ほんのちよつとチクリとするだけ……」

そんな子に近くで励ますように寄り添うのがエデイの仕事となった。嫌がる子を押し  
さえつけるのは少し嫌だったが。

初めは恐る恐るだった。が、全員が注射を打ち終えるとまるで歴戦の看護婦にでも  
なったような気持ちになっていた。

最後に飴玉を入れたかごを持って子どもたちの間を廻って飴を渡していく。

義手の子がニツカリと笑って飴玉を掬っていた。その少年の顔が印象に残る。

全部終わって医療器具をカバンにしまいお父様を待った。

すぐ後ろで院長とお父様が話をしている。その声が漏れ聞こえて来る。町の設備の  
話のようだ。

「感染症を防ぐには衛生をもっと重視しなければならぬ。もっと清潔にしろ」

「閣下、そうしたいのですが、水が足りないのです。先日、近くの井戸が壊れまして。隣

の区画から引くにしても規約があつて……」

「フェルナン、町内議会を開け。爺さんどもに何のための議会所か思い出させろ」

この町の水事情はそれなりに問題もある。だがそんな問題はエディの預かり知らぬことだ。町のことは町で、城は城で水を賄っている。

シユロの町は観光資源の維持のために区画の整理を思い切り行えない難点があつた。工事をすれば改善されるが大きく景観を損ねる。違法な増築がされた区域もあり、それも問題となつているが、町のことは町の間が決めることとして領主は口を出していない。

各区画で使用される井戸水は上水道を流れるもの以外での他区への利用は制限されているから、この区画の井戸水が使えないとなると生活に支障が出かねない。

入り組んでいる貧民街は特に手を入れるのが難しい。

その後、拙いながらエディが絵本の読み聞かせを子どもたちに披露した。

院長夫人が希望したことでエディに頼んできたのだ。「どうしましょうか？」とお父様に聞くと、「お前が自分で決めろ」と言われました。

何とかつかえながらも最後まで話し終える。

すると、まばらながらも拍手が起こつた。

まだ表現方法は鍛えようがあるつてことでしょうか？

◆ 少しでも前向きに考えるエディであった。

「病院に寄る」

シユロにも小さな病院がある。領主にして病院長というもう一つの肩書がグランにあるのだ。先日、エディが保護した少女がそこに入院している。

どうしよう……お話してくれるかな？

孤児院で朗読に使った絵本をお見舞い用として持っていた。

保護した赤毛の少女は全然口を聞いてくれなかった。

「それが好きかな？」

何冊かある絵本の表紙は原色が豊かな色合いの絵だ。電子本よりも子どもにはこういう絵本が受けるのだ。

エディの部屋の本棚に絵本がいくつかあって良さそうなものを選んで持ってきていた。

エディの問いかけには答えず、アイラという名の少女は絵本を食い入るように眺めている。

手に取ったのは騎士とお姫様の物語。ありふれた絵本の内容だ。アイラは俯いたまま絵本のページを捲る。

エディは沈黙に詰まって言葉を捜した。答えてくれない相手への対処法は知らない。両親を目の前で殺され、自身も強姦された少女にかける言葉を持たなかった。起こった惨劇と、防げなかったことの罪悪感が胸に落ちて少女の前で委縮してしまう。

慰めの言葉を自分が言っていていいものかさえわからない。

「エディ、行くぞで」

その声に顔を上げてアイラを見るが、少女は相変わらず無言でページを捲っていた。

「エディ」

促すようにグランの声が響く。

「もう行くね。バイバイ……」

仕方なく立ち上がり小さく手を振ってエディは別れを告げる。アイラは最後まで顔を上げることはなかった。

滞在した時間は短いものだった。何かできたのかといえれば何もできなかった。

「お父様」

「何だ？」

デイグを運転するグランが答える。

病院を出てデイグはセントラル広場に差しかかる。セントラルはシユロで一番人で

賑わう場所だ。観光客の大半がここに集まってくる。

市内の安全速度は四〇キロに設定されている。小型のデイグがレンガの路地をすり抜けていく。通行人が避けるのを待って前に進む。

「あの子はどうなりますか？」

「引き取り手がいなければ孤児院だな」

グランは視線を前に向けたまま答える。

「孤児院の子たちにもあの子のような目にあつた子がいるのですか？」

エディは目線を下げる。思い出すのは凶行の現場だ。二つの家族が無残にも殺害された。犯人は流れの騎士。

「腕のない子どもがいただろうか？」

「はい」

孤児院に義手の少年がいた。きらきらした笑顔でエディの印象に残つた子だ。

「あれは運良く助かった。親は片親でな。酒場で因縁をつけてきた男に殺されたんだ。犯人は流れの騎士崩れだ。賭博のトラブルで斬られた。そのとぼちちりで子どもも巻き込まれた。その犯人は自分が犯した罪の代償を自身で受けることになった」

そこでいったん言葉は切られる。

緩やかなカーブを曲がると、デイグはゆっくりと城へ向かう道を上がり始める。



「……その子は叔母に引き取られたが、女はろくでなしの呑み助だった。その女は病で死んだ。わしが女を看取ったとき、子どもはろくに食べ物も与えられていなかったのだろう。がりがりの？せっぱちになっていた。部屋の隅でうずくまってな。それで孤児院に入れた」

「そう……ですか……」

応えてエディは自分の手元を見つめる。お互いに無言になる。

「お前が気に病むことはない。お前を行かせたわしの不注意だ」

それだけ言うと、グランはその後は無言になって城までデイグを走らせていた。

## 【4話】辻斬り事件

闇夜に包まれた荒地にMHが一騎立つ。MHを駆る騎士が追うのは不法なキャラバ  
ン一味だ。

ドラッグから人身売買。臓器売買など、あらゆる違法行為を行う者の摘発に当たつて  
いる任務の最中だ。今日は新たな情報を得て、非番であるにも関わらず出撃していた。  
くすぶるようなMHのエンジン音が虚空に鳴り響く。鈍重な外見をしたそれはデボ  
ンシャと呼ばれる騎体だ。

デヴォンシャ・シリーズとも呼ばれる、死刑執行人を思わせる外見が特徴的な名工。パ  
ラベルム・スターム公の作品の一つである。

搭乗するのはウモス共和国の正式な国家騎士フィス・マイヤーだ。  
デボンシャはウモス共和国では主力である青騎士より配備数が多いMHだ。低出力  
ながらも安定した性能を持つ騎体として多くの騎士が愛用している。

辺境警備を担当する騎士団が所有するMHの多くはこうした量産品が主流だ。

本国の青騎士に乗るのはエリート騎士に限られていたから、実質、国家騎士が使う騎  
体として非公認ながらも認知されている。

こうした形式で他国の騎士も同様のMHを使用するので、戦ともなれば国家仕様の迷彩や機章を施されて出撃することになる。

風吹く空に低出力に抑えたデボンシヤのエンジン音がこだまする。

「たく……待つのは苦手だぜ……ポリスじゃ手に負えない連中追いかけるのも骨だぜ……」

その音に嫌気が差して騎士は額に手を当てた。こうもうるさくては逃げてくださいますと云っているようなものだろ。

本来であれば、こういった捜査の追跡任務にMHで当たるものではない。人手不足もあり、勝手な出撃とあつて本部に応援を頼むことはしていない。

そんなことをしていたら捕まえられるものも捕まえられない、というのが辺境騎士の辛いところだ。実際、応援など待っている余裕はみじんもない。

不法キャラバンの犯罪者どもがMHを持ちだしてきたら警察では対応不可能だ。

『マスター、キャラバンからの反応消えます』

「おいおい、ここまで来てとんずらか？ そりやなかるが」

どう考えてもこつちの動きを悟られたに違いない。人手不足も程がある。

脳裏に頼れる友人の名前も浮かぶが、その友人も下手を打てばクビが危うい。結局、一人で当たるしかない。

チツと舌打ちするが逃げるのを放置することもできない。

『……いきました。風上に反応確認。おかしいですね?』

「いいさ、見つけたんだからな」

『ラジャー。シークエンス・モニタリングを続行します。コントロールをそちらにお任せします』

「よし、逃すんじゃないぜ。久々の捕り物だ。応援が来る前に片つけちまおう」

ふと、風向きが変わる。北からの風がよりいっそう強くなってデボンシヤのボディに砂を打ち付ける。

「吹け吹け、そんなん効かないけどな」

そのとき、緊張したファティマの声が騎士の耳朶を打つ。

『マスターっ! MH駆動音です。この音は……?』

「はいはい、連中隠し持ってやがったな。最近溜まってんだから憂さばらしするぜ」  
『種別不明。エンジンベースの判別ができません』

「何だそら? 正体不明ってそりゃあよ……例の辻斬りなんじゃないのかよ?」

『短距離レポート来ますっ!』

「おいおい、真っ暗だったのによ!」

ギリッと騎士が奥歯を噛む。幾人もの騎士が辻斬りに殺されている。その弔いをす

る機会が回ってきた。

「わりいな、レスター。賭けは俺の勝ちだ」

騎士は旧友の名を呼ぶ。賭けの代償は酒場での一杯の約束だ。

『マスターっ！』

ファティマの悲鳴に似た叫び。

エンジンを全解放し、闇の中より疾走する土気色のMHが太刀を抜き放つ。それは「居合」と呼ばれる駆動剣術の技である。

「はええっ!？」

驚愕の声を発する。対応しきれずデボンシヤが回避に動く。

『回避っ！』

回避運動と共に光剣（スパッド）を放つも、一閃した太刀の軌跡がデボンシヤの光剣を持つ腕を切り落とし、返し刀に上胸から顎を袈裟切りに、さらに破壊した頭部に止めの一撃を放った。

頭を失ったMHが膝を突いて倒れる音が響き渡る。残酷なまでにMHの弱点を切り裂いた技はあまりにも鮮やかであった。

すべては一瞬で決まった。一方的な殺戮劇だった。

掃射レーザーが放たれ、上空に投げ出されたファティマの身を焼く。

『騎士とファティマの死亡を確認しました』

電子音が響く中、無機質なファティマの声が告げる。

「ふん、見ろ。また太刀を一本駄目にしてしまったぞ」

謎の土気色を帯びたMHのkokopittoで仮面の男が呟く。

亡骸となったデボンシヤを冷酷な瞳で見下ろす。その関心は殺害した者にはなく

太刀に向けられていた。

「後はミミバどもに始末をさせろ。帰投する」

『了解』

そして現れたときと同様に闇の中にその姿を消していた。唯一、その足跡の痕跡だけを残して――



ウモス辺境バーテローの町。ウモス辺境を守る国家騎士団が駐屯するバーテロー駐屯地に今日も砂交じりの強い風が吹く。

「レスター、聞いたか？」

その日、ミハイル・レスターが稽古を終えて騎士団の詰め所に戻ると、上級騎士のフェルドリック・ホランが仮眠室の奥から姿を現した。

ホランはミハイルの今の同僚だ。ヤニ臭い匂いが染み付いた男だがミハイルはこの

男を信頼している。

出勤して顔を合わせるのとは二日振りだ。二日の休暇は鍛錬のための稽古に当てていた。朝は顔を会わせる機会がなかったのだ。

最近、ミハイルは稽古に力を入れていて。特に目立った任務もなく、暇とあれば腕を磨く以外に打ち込めるものがないのだ。

町に出て憂さを晴らすといえば酒しかなかった。

いつもは斜に構えた印象が強いホランが真面目な顔をしているので、賭けに買った負けたという話でもなさそうだ。

「何をですか？ ホラン先輩」

緊張した面持ちのホランに何かあったなど直感的に悟る。

「フェイスがやられた。D地区だ」

「な……」

息を飲みホランを見返すミハイルの肩にホランが手を置く。

「やつとお前は同期だったな？」

肩を掴んだまま用心するような声でホランがミハイルの耳元に囁く。

「は……」

お互いに目を合わせミハイルは神妙に頷く。

ミハイルと同期であるフィスは確かな腕を持つ騎士であつた。反骨精神が強い性格なせいでこんな辺境に飛ばされた男だ。

気のいい男で、人怖じせず自分に自分と対等な付き合いをしてくれる友人の一人だ。

そのフィスは着任したばかりだ。バーテローの隣の管区なのでミハイルとは近い内に酒を飲む約束を取り交わしていたのだ。

そのフィスがやられたという。にわかには信じられずミハイルは拳を握り締めた。何があつたんだ、フィス？

「例の辻斬りらしい」

「まさか」

首を切る仕草をするホランにミハイルの懐疑的な言葉が投げかけられる。

辻斬り——その言葉は、ミハイルに苦い思い出を思い起こさせる。

「まさか、だつたらいいんだがね。たつたの三太刀だつたそうだ。生き残りはいないのもだ。顎を裂いてさらに頭部に一撃。騎士もファティマも生かしておかない殺人鬼野郎らしい」

背中を見せてホランが窓の外を眺める。イラついたように煙草を啜える。

表では強い風に砂が混じつて安っぽい素材の壁にパラパラと打ちつけていた。

「そんな……まさか」



たった三太刀でフィスを殺せる者がいることがミハイルにとつては信じられない。

同期の中でも腕っ節が強く、タフで粘り気のある剣技で定評がある男だ。上には上がいるがそう簡単にはやられまいという自負もあった。

「似てるだろう？ やつだ。手口が六年前とそっくりなんだ」

ホランが拳を壁に打ち付ける。

いつも冷静な男が憤りを隠せない。その様子にミハイルは見ていられない気持ちになる。

視線をそらすように風すさぶ外の景色を眺める。

「先輩の奥さんは六年前に……」

言いよどむ。その先は言わなくてもいいことだ。

ホランの妻は夫と同じウモスの騎士だった。六年前、哨戒中に正体不明の辻斬りに殺害されている。

「あの、辻斬り野郎にやられたんだ」

はつきりとした声で告げるとホランはいらついたように煙草に火をつけた。

「あの辻斬りとは限りませんよ？」

ミハイルの言葉にホランは答えない。ジジジ……と火が煙草を焼く音だけが聞こえる。

いつもの吸い方ではない。冷静さを欠いていた。いやな予感が胸に込み上げる。

「先輩、早まらないでください」

「あ？」

「仇を取ろうとか思っていないませんか？」

「……」

ホランは応えず、最近、ようやく男らしい顔つきになつてきたミハイルを見返した。

「ああ、思つてるさ。だがな、俺は騎士だ。命令がない限り無闇には動けねえ」

ミハイルの真摯な眼差しにホランは耐えかねたように息を吐き出して手を振る。そして煙草を吸い込む。

「ああ、くそっ！ 不味い……そうさ、騎士だからな」

ホランが自分に言い聞かせているのか、自分に言っているのか判別できず、ただ沈黙で彼の横顔を見つめた。

「お前さんもあと一年もしたら中央に戻れるさ。エリートの本ンボンなんだしよお。辺境暮らしが長かったからって、ちったあ箔がつくぐらいだと思つとけよ」

話題を変えるようにホランは明るい声で言う。今度は軽くミハイルの肩を叩いた。

ホランは背を向けると自分のロッカーを開けて夜の巡回に出る支度をする。

「気をつけてください、先輩」

その背中にミハイルは声をかける。

「ばーか、いつもの散歩だよ。辻斬りもこつちまでは出ねえだろう。B地区にやつが現れたことはねえんだから。それに三日も経ってねえ」

「そうですね」

笑顔を作って送り出すミハイルに、おうよ、と返事を返してホランが外に出て行く。

強い砂交じりの風が戸を打ち付ける。

後に残されたのは灰皿の煙草が上げる白煙。不安を消すようにミハイルがその残り火をもみ消していた。

そして、ミハイル・レスターがフェルドリック・ホランの背中を見たのはそれが最後となつた――



PIPIPIPI……

「マスター、本部からの呼び出しです」

肩を揺さぶるパルスエツトの細い手の感触にまどろんでいた目を開ける。よく眠れない夜だった。

「パルセット……こんな時間にか?」

「はい」

夜明けを迎えた頃、鳴り響く本部からの呼び出し音に目を覚ましたとき、ミハイルは新たな事件が起きたことを知った。

嫌な予感的中する形で――

ミハイルは騎士団寄り合い所の待合室の戸を開ける。

安普請で戸は傾いている。辺境の寄り合い所はどこも似たようなものだ。窓際からは隙間風が舞い込んで砂が落ちている。

「マスター」

椅子に座って待っていたパルスエツトが振り向く。コーヒーメーカーから液体をカップに注ぐと大事そうに持ってミハイルに差し出す。

「お疲れ様です」

「いや……」

まだ何もしていない。呼び出しと報告を受けて、当直に入って話を聞いたただけだ。そして、ホランをやったのは例の辻斬りであることを確認したただけだ。

「パルセット、明日、シュロに行く」

「シュロ？ 近くの中立都市ですね。何かの御用ですか？」

「ファティマが收容された先がシュロらしい。そのの医師に詳しい事情も聞きたいんだ」

「わかりました」

パルスエツトが頷きポットの湯を取り替える。

ミハイルは手渡されたコーヒーの黒く光るうねりを見つめる。ゆらりと映る自らの顔が歪んでいた。

『お前さんもあと一年もしたら中央に戻れるさ。エリートの本ンボンなんだしよお。辺境暮らしが長かったからって、ちったあ箔がつくぐらいだと思つとけよ』

ホランは常にミハイルのことを気にかけてくれた。一時期、騎士を辞めようかとさえ思ったこともある。それでも立ち直れたのは、彼とパルスエツトが側にいたからだ。

同期で仲間だったフェイスもやられた。味方になってくれるのはもうファティマしかない。

「早まらないでくださいか……畜生」

コーヒーを一口飲む。熱い。喉から胸の下に焼けるような熱の塊が落ちていく。それを飲み込んで目をつぶる。

何をしているんだ？

あのとき、止めていけば。

いや、止めてどうなった？

レスター、仇を取るんだ。二人の無念を晴らせっ！

だが、甦るのは震えて部屋に閉じこもった自分の姿だ。とたんに血流が強まってめま  
いがする。息を吐き出して動悸を抑える。

脳裏に関節の焦げたMHがちらつく。

飲み干した紙コップを握り潰す。

何という情けなさだ。

俺は……六年前から何が変わった？

俺を変えられた？

俺は臆病な間抜けのレスターのままなのか？

「マスター？」

心配そうな顔でパルスエツトがミハイルの顔を覗き込んだ。

「何でもない。パルセツト」

笑え——口の端を曲げてミハイルは笑う。自分がどんな顔をしているのかなんて見

たくない。

『フアティマに不安を与える男は騎士として二流。いや三流だ』

六年前のあの日——黒衣の医師に投げかけられた言葉を思い出していた。

## 【5話】エディの夢

これは夢だ。この夢でエディは自分ではない誰かの夢を見る。視点は「誰か」のものと重なって映し出される。

しばらくぶりの休暇。任務から帰れば温かい家庭が待っている。春の陽気の暖かい日差しに包まれた家だ。

色とりどりの花が咲き誇る花壇と白い壁。戸を開ければ、そこはマルサラの我が家だ。

マルサラ？ 行つたことはないはず——

「ほら、挨拶なさい。イリヤ。お父様よ。あなた、お帰りなさい」

「だあだ？」

花壇が見えた。淡い日の光が差し込む中庭。刈られた青い草が揃いの長さで広がりが花壇まで続いている。

幼子が数歩歩いて芝生へ座り込む。貴婦人がそれを見守つて刺繍の手を止めて見守る。そんな絵に描いたような風景。

「彼」が幼い少女を抱き上げた。そして高い高いをすると、幼子から伸ばされた手が彼

の無精髭が残る顔を触った。

すみれ色の瞳が同じ瞳の娘を映しだす。

彼の近くにファティマがいる。カーテンの向こうで彼女は家族のひとときを邪魔せぬようそこに立っていた。

少し風が吹いてカーテンが翻る。漆黒の髪と同じ黒曜の瞳の少女が親子の団欒に混じることなく控えている。

私……？

混乱する。これは「誰」の夢なの？

「だあ……」

娘の小さな手を大きな手が包み込む。

「ほうら、肩車だぞ」

父が担ぎ上げるとキャツキャツとはしゃぐ声を上げる。そのまま娘を連れて庭をゆつくりと一回りする。

ただ、時間はゆつくりと過ぎていく。

「昨日はシャーリイとブルースが遊びに来てたのよ」

「ああ、もう三年は会っていないな。背も伸びたろう。ブルースには武芸を教えろとせつつかれてたな」



「あなたが忙しいから……」

「仕方ないだろう？　我がランダース家は貧乏騎士。出稼ぎしなきや食つていけん。次の仕事が終わつたらしばらく腰を落ち着けるさ。士官の口もな」

まどろみはそこで遠ざかり夢はそこで途切れる。聞こえるのは窓ガラスに当たるパラパラという砂の音と風の響きだ。その音がエディの意識を覚醒させる。

冷たい風が吹き付ける。少し前まで吹雪と言えるほど氷の混じった風が吹いていたのだが、今ではその名残の風でしかなかった。

それを聴きながらエディはベッドの中の温もりを手放していた。

また、あの夢を見ていた——涙？　頬に伝わった雫の跡にエディの指が触れる。

身を起こすと毛布が落ちてその白い素肌が露になる。冷えた室内の空気が容赦なく触れた先から体を冷やしていく。

その肩も身も未熟な少女のものであるがすべてが整いすぎているほど整っている。その横顔も細い肉体もだ。

あえて女として完成されていない、少女らしい瑞々しさと清楚さを強調するような透明で白い肌。すらりと伸びた手足と曲線を描く腰には余分な脂肪さえついていない。

ファティマの体型は完全な食事によってコントロールされている。太ることはまずないのだ。

私は役立たずのファティマ。私は私以外のファティマを知らない。

城の使用人は除くが、町の住人が向けてくるのは好奇の視線だ。無遠慮な視線であるが彼等から話かけて来ることはあまりない。必要だから話しかけてくるに過ぎない。

それでも表に出てお父様の手伝いをしていると無邪気な笑顔や言葉をもらうこともある。それはどこか温かいものであつた。

ファティマは道具だ。道具として扱われることに慣れておけ、とお父様はよく言うが、城では誰もそう扱つてくれないのでお父様だけがエディによく命令をしていた。

館ではきまぐれなご領主に付き合えるのはエディだけなのでいつも感謝されていた。

エディ、いつまでぐずぐずしている！ そんな叱責は日常茶飯事だ。

フルネームで呼ばれるよりエディと呼ばれる方が好きだ。A11 D2という名前前はあまり好きではない。

お父様は理不尽を言うことも押し付けることもしない。エディにできることはできることとして仕事を手伝わせていた。

おかげで近頃では注射の針を患者に挿せという試みを命じられたが、それは恐ろしく勇気の要ることであつた。

泣きじゃくる子どもをあやすなどは次元が違うことである。人の腕に太い注射針を刺して、管の中に赤黒い液体が溜まつていくのを見て初めて貧血というものを体験し

た。

気がつけばベッドの上で患者さんに見下されている自分がいた。ひどく情けない気分になったことは覚えている。お父様の看護婦失格だ。

再度息を吐き出してエディは灰色の空の下で霧にもやる城下町を見下ろす。世界が白い霧に包まれたような幻想的な風景だ。

「お客様？」

エディは呟いて胸元に下げたヘッド・クリスタルを無意識にいじる。このクリスタルは取り外しが可能で、クリスタルを介してファティマはモータヘッドを操ることができ

る。  
ヘッド・クリスタルは宝石としての価値もあつたが、情報伝導体としての価値の方が重要であつた。ヘッド・クリスタルはファティマの第二の頭脳とも呼ばれている。

坂を上りきって城の門をくぐった救急用の大きなデイグが見えた。その姿は木々に隠れてすぐに見えなくなる。

部屋の戸を開けて下の気配を伺う。静寂と照明のついていない階段だけが見えた。戸を閉めると箆笥から服を取り出して着替える。

黒を基調とするロングスカートに白いブラウス。その上に黒い上着のみを羽織って部屋を出る。

ファティマの服装は星団法により厳格に定められているのだが、お父様が外出時のエディの服装を指定しているからそれに従うのだ。ここではお父様が一番偉い。

工房にはいない……階下の人気の無い暗い室内を見渡す。その存在感を表す黒衣の老人がいないと室内はただっ広いだけの空間でしかなかった。

朝食の支度をしていないとお父様はすぐに不機嫌になる。その本人がリビングにいないのでは決めてきた覚悟は泡となって消えてしまった。

ご飯……どうしよう……

リビングにつけっぱなしの端末が見える。エディはデータを覗きこむ。

風の観測データ？

シユロ周辺及び、この地域一帯の風の観測データだ。シユロの風力発電のためのものようだ。

エディはヘッド・クリスタルを頭にセットし風速データをコピーして記憶に焼き付ける。何かに役立つのかもしれない。

端末を消し、キッチンにおける作戦遂行能力を試すつもりであった計画はどうしたのかと迷ったが、城へと下りる階段を降りていた。



館の一室。閉められた扉の前でエディは扉を眺める。中では今頃手術が行われてい

る。

あれは急患の類だったのだろう。塔にある工房よりも館の執務室の隣にある医療室の方が手術のための設備は充実している。

エディが調整を受けるときはいつも塔の工房が使われるの。

緊急の手術だろうか……

いまだにレーザーメスを操作するような仕事は任されたことはない。それでも近頃は看護婦らしくもなってきたのだが、何だか除け者にされたようだ。

その感情さえも平坦にしようとする思考へのアクセスがある。強いものではないので抗う必要もない。

感情という微妙な浮き沈みは強いものであればすぐに沈んで平静に戻される。それ以外のくすぶるような小さな感情は消えずに胸の内にこもった。

ダムゲートと呼ばれる感情抑制装置。すべてのファティマにはそれが組み込まれている。それは、ファティマを正常に動作させるためのシステムだ。

普通の人は感情を完全制御するシステムを持たない。

街に出なくても館で働く人々の喜怒哀楽を目にし耳に聴くこともある。そんなとき決まって彼らは泣いたり笑ったりするのだ。

それは特別なことではない。人に許された自己主張であった。ファティマに自己を

表すための感情の発露は許されていない。

ダムゲート・コントロールはそうした心の動きを抑え込む。ファティマの精神は人に逆らえぬほど脆弱だ。その本来の用途は、脆弱なファティマの精神をコントロールして戦場におけるあらゆるストレスを排除することにあつた。

それゆえに少女タイプの幼いS型ファティマに施されるコントロールはより強いものが求められる。無個性な人形と揶揄される由縁でもある。

しかし条件付けを変えれば、ファティマでも故意に人を殺める指令を受諾させることもできた。

シユロの市民を守るといふ指令は、優先順位を上げれば相手が騎士であろうが刃を向けることができるのだ。

私のような壊れファティマはダムゲートがなければ正常に機能することもない——

エディは戦場で壊れ、お父様の手によって再生された。以前の記憶というものはない。マスターがどんな人物であつたとか記憶には一切残されていなかった。

その代わりおかしな夢を見るのだ。

街を歩いている親子連れに惹き付けられることがある。それは一度や二度ではない。そして懐かしさのような奇妙な感覚に包まれることがたびたびあつた。

子どもが好きだという自覚はない。むしろそういったものは触れるのも怖いもので

あった。

一人の少女と出会った。両親を亡くした少女――

その背中は忘れられないものとして記憶にある。誰とも交わずに絵本を読む少女の姿は深く胸の内に刻まれていた。

少女を孤独にしまったのは自分である。もっと早く助ければ少女は傷つかず、彼女の両親も救えたかもしれない。

イリヤ、とは誰なのだろう？

そしてランダースの名前。

イリヤ・ランダース。夢で見た少女の名前。ここではないどこかの幸せな家庭の風景

あれは……私の記憶なのだろうか？ なぜあんな夢を見るのだろうか？

そして長い廊下を振り返る。敷き詰められた赤い絨毯に高い天井。使用人がカートを運んでいく姿を遠くから見守る。

アーチを描く鉄の扉がすぐ側にあった。それを開けば地下へと続く階段がある。その扉の認証コードを解除して開く。そして暗く冷たい螺旋階段を眺めた。

エレベーターも存在するのだが、直接地下へ降りるルートはキーを必要としていた。それをエディは解除する。階段を使うことは苦痛ではない。

この城が持つもう一つの顔がこの下にある。迷うことなく螺旋階段を下っていた。

◆ それは鋼鉄の巨人だ。装甲部分が丸出しになったその機体はモーターヘッドと呼ばれるロボットだ。

ジョーカー星団で生み出された最強無比のロボット。戦場における決戦兵器とも呼ばれるもの。

暗いその広い空間に彼は座してエディを迎えていた。物言わぬ巨人を見上げる。わずかに差し込む光がヘッド部分を照らし出す。

MH（彼）の素顔が垣間見える。

「こんにちは……また、会ったね……」

その眩きに「彼」は答ええない。

きれい——

この機体を見るのは二度目だ。お父様に連れられて初めて見たのだ。そのとき抱いた感想は今も同じだ。

『アマテラスのやつに押し付けられた』

お父様はそう言つて興味がなさそうにそれをいじっていた。

シエル（コクピット）であるファティマ・ルームを改造するのだと言う。その意味を



そのときははっきりと認識していなかった。

MHを操作することをエディはまだ知らない。

いや、おそらく動かすことはできる。だがその自信はない。できるならば誰か別のフアティマに動かしてもらいたかった。

フアティマがいなくてもMHを動かすことは可能だが、それはたいがいエトラムルという人工フアティマのサポートを受ければというものだ。

エトラムルにMHの遠隔操作などは当然できないし、エミュレート演算による行動予測もできない。彼らはただMHを動かすことだけを考えるのだ。

でも、そうしたくはなかった。

フアティマ・ルームで「彼」はエディを拒絶した。調整を受けているはずなのにシンク口を行うことができなかった。

私はMHが怖い――

その時の拒絶がエディを混乱に陥れた。私ではダメ、動かせない。

今でも怖かった。暗いコクピットに残されることがとても怖い。なぜかはわからない。自分が自分ではなくなりそうで怖かった。

頭の中が何も考えられなくなつて――「彼」は私を締め出したのだ。

静寂の中でエディは冷たいその脚部に触れる。

機械——私と同じ彼はマシーンなのだ。戦争をして人を殺すための道具。私も同じ存在——

「やあ、君か。エディ、よく来たね」

その声に弾かれたようにエディは顔を上げる。人の気配など今までなかったのだ。振り返ればそこにレディオス・ソープが立っていた。

硬いエディの表情がわずかに揺らぐ。彼にはどう対応していいのかよくわからない、心臓がドキドキしてしまうからだ。

思うように言葉が口から出てこなくなる。肝心なときに限ってダムゲートの働きが遅い。

「乗ってみるかい？」

「え？」

「改装するんだけど、ぜひ参考意見が聞きたくてさ。君のシエルの調整をしようかと思ってる」

「私の……」

お父様が作ったのはエディ専用のコクピット制御システムだ。それに乗ってエディはMHへの干渉を試みたのだが失敗に終わっている。

ソープに興味をなくした風を装ってエディはMHにも背を向ける。ソープを見てい

るのも少し辛い。この青年は眩しすぎるのだ。美しすぎる人間がいる。

ダムゲート仕事して——感情の揺らぎはようやく抑えられる。

「どう？ ダメかい？」

「今は乗りたくありません」

「想定外な答えだね……どうしてだい？」

「苦手……なんです」

「へ？」

スープが一瞬だけ詰まる。

「モーターヘッドは苦手です。私はこの子に嫌われてるから」

ゆつくりとエディはもう一度告げる。

「う、うん。そうだねえ。ファティマにも苦手はあるよねえ……でも、モーターヘッドが

ファティマを嫌うのかなあ？」

頬をかくスープ。無言になった二人の間に静かな沈黙が生まれる。その問いに対し

てどう答えたらいいのかわからない。

「私、行きます……」

「またね、エディ」

声をかけたスープに一礼してエディは背中を向ける。エレベーターのスイッチを押

してようやく一息ついた。MHもレディオス・ソープも苦手だ。

ダムゲートがちやんと仕事をしてくれないから。いや違う……

ずいぶんと長い時間を過ごしてしまった。手術は終わっただろうか？

エディは地上の光をしばらくぶりに浴びる。あそこは冷たすぎる鋼鉄の空間だ。ル

ル  
||  
ファイヨンド館の赤い絨毯を踏んで手術室へ向かっていた。

## 【6話】ル＝フィヨンドの姉妹

ル＝フィヨンドの地下。試動させたイレーザー・エンジンの低音な調が鳴り響いている。

「基本がカイエン仕様だけど、僕にはでかすぎるんだよなあ……」

一人ごちてソープは操縦システムとモニタの点検を続ける。当のコクピットの調整は終わっていて後は仮固定するだけだ。

まだこの機体に騎乗する者は選出されていない。そうであるからにはソープにできることは限られてくる。

基本機能はオールクリアだ。モニタには透明度の高い映像が映し出されている。床に落ちているチリの数まで数えられるくらいだ。

「ねえ、バシク、腕と指を動かして〜」

「ラジャー」

フアティマ・ルームからの応えの後、指関節がむき出しのままのMHの手が伸びて関節を器用に動かし始める。

「問題なしっ」と

「忙しい男だ。モーターヘッドばかりいじりおって」

この城の主であるサロモン・ルイ・ミッテラン子爵ことグラン・コークスが現れソープの仕様の様子を眺める。

「仕方ないだろう？ お姫様は相手にしてくれないし。観光は一日あれば十分さ。それにお城からの眺めも申し分ない。仕事に集中できる環境だからね」

「ファティマを連れて来たのか？」

「ああ、うん。うちのスタッフと別便で直送さ。かなり気を使ったけれどね。そう言えば、顔を合わせるの初めてだっけ？ おーい、バシクッ！ 顔を見せてごらん。コークス博士だよ！」

ソープがMHへ向かって手を振ると、ファティマ・ルームが開いてファティマが姿を現す。

バクスチュアルはコークスとソープに向かって一礼するとまたルーム内に姿を消す。

「バクスチュアルか。A. K. Dの最高機密を連れ出すとは困ったやつだ」

「ルスの目を盗んでね。いざとなったら彼女が頼りさ」

「ザ・ブライドの名でも喧伝するのか？ こんな辺境でA. K. Dのファティマと天照のモーターヘッドのお披露か」

「そういうわけじゃ。こいつの相棒はエディと決めてるし、それにバシクは子どものお

守りみたいなものさ」

「人の隠居先にモーターヘッドなど送りつけよって。最近のきな臭さに惹かれてきたハイエナのようなだ」

「こりやヒドイ。ま、似たようなもんだけどさ。僕の新作に君のファティマを乗つけて派手にデヴューしたらみんな驚くと思ってるね」

「それが本音か、貴様という男は……」

「ああ、でもね。彼女は僕をマスターとは呼びそうにないから。それはないかもね？」  
むすつとしたグランにソープの愛想笑い。頑固狸と亜麻色狐のにらめっこだ。

「それより、緊急の患者じゃなかったの？」

話題を変えようとソープは話を切り替える。

「手術はとづくに終わっている。今はアレが面倒を見ている」

「今回の犯人は何年か前の辻斬りと同一犯だって？」

「確証はない、が、やつらはかなり組織立っているようだ。尻尾をなかなか掴みません」

グランもそれなりに事件の詳細を追っていた。相当大きい組織が関与している確証はある。

その黒幕もおおよそだが見当はついていた。

「君なら大体の予測は付いてるかと思つたよ」

「騒いでる連中も、辻斬りも、わしは興味などない。この近辺を荒らされるのが気に食わんだだけだ」

「まあ、目的はとりあえず一致するわけだ。こいつを完成させるのが楽しみだよ」

「よりにもよつてとんでもないものを運び込んでくれたわ。デイモスのヤツと張り合うつもりか？」

「ほぼ組みあがつてはいるが、装甲はまだ未完成のMHを一瞥して、グランが杖で地面を軽く叩いた。

「デイモスとは剣聖デイモス・ハイアラキのことだ。」

「アレはもうカイエンのだよ。ちよつと今はどっかに行方不明してるけどさ」

「それにお前が関わっているのではないかと、どこかの筋から聞いてるが？」

「うわあ……それをリークしたのはもしかしてログナー？」

「わしにも耳というものがあるのぞな」

「いいじゃない？ 僕は僕が面白いと思つたものを作りたい。一人のマイスターとしてね」

「柔らかな笑みを浮かべてお下げの先つぽに指を絡める。いたずらつぽい光を帯びた瞳がグランを捉える。

そのとき、グランの端末に通信が入る。



「何だ？」

『お客様が来ています。ウモスの騎士様でミハイル・レスターという方です』

「すぐに行く」

「レスター？」

「ウモスの馴染みだ」

◆ ソープの問いに答えグランは背を向けて去っていた。

初めてル＝フィヨンドの館に踏み入れた騎士は長い廊下を眺めてから玄関を振り返る。すでに時刻は夕刻に近い。

「領主館に行けと言われて来たが……パルセット、お前知っていたか？」

「はい？」

「自治領主殿がグラン・コークス博士だって」

「私は知りません。マスター」

ミハイルの隣でパルスエツトが首を振る。

「本当に？」

「はい」

「そうか……」

無論、パルスエツトは知らなかったのだろう。だが、どこか不意打ちに似た事実にはミハイルは納得いかない気持ちもあつた。

少しばかり子どもっぽい感情ではあつたが。

「いちらへどうぞで」

使用人に案内され二人は応接広間に通される。

シユロの町を訪れてファティマ医師がどこにいるのか尋ねたのだが、その際に返つてきた答えは領主館に行けというものだった。

城を訪ね、そのとき初めてサロモン・ルイ・ミツテラン子爵がグラン・コークスの別名であることを知つたのだ。

ソファに座り領主が来るまで時間が過ぎるのを待つ。

軽い金属音を立てて車輪が回る。それは車椅子だ。薄暗い廊下から応接間を通り過ぎようとして足が止まった。

車椅子を押す黒衣の少女と、頭に包帯を巻いた少女がそこにいた。黒曜の瞳が来客を一瞥するとエディは無言で頭を下げた。

「フロリー……」

車椅子の少女が誰であるのかをミハイルは知っていた。

フェルドリック・ホランのファティマであるフロリーは先日の辻斬りとの遭遇で重傷

を負いヘッド・クリスタルを割られた。

そしてシユロの町のファティマ医師の元に送られて治療をしたことまで知っていた。

その際に知った事実がミハイルにもう一つの再会があることを予感させた。それはこの六年間、心の何処かで畏れていた再会であった。

ミハイルの声が届いたのか届かぬのかわからぬが、フロリーの澄んだはしばみ色の瞳は前を見つめたままだ。

そしてもう一人の少女から目を離せない。彼女が誰であるのかをミハイルはもう悟っていた。

君が——それ以上の言葉をミハイルは口に出すことが出来なかつた。

二人のファティマ。エディとフロリー。かつて自分が殺した少女。そして主を理不尽に奪われた少女。

立ち上がったままミハイルは一步も動けない。彼女の前に立つ勇氣がなかつたのだ。乾いた上あごに舌が張り付く。何かを言わなければ。

何を躊躇っている。お前はもうあのときの若造じゃないだろう——

そのミハイルの横顔をパルスエツトが心配そうな顔で見つめる。

再びエディが車椅子を押そうと椅子に手をかけたときパルスエツトが話しかけていた。

「私、パルスエットつて言います。その、初めまして……」

エディの黒曜の瞳がパルスエットを捉える。一瞬震えてパルスエットはその瞳を受け止めた。

パルスエット……俺はなんて馬鹿なんだ。表に待たせておけばよかった。

「初めまして、エディです。お父様はそう呼んでいます」

エディはお客様に失礼のないように応える。向かい合う二人を挟んでフロリーは視線すら動かさない。

一瞬の邂逅はまるで時が止まったかのような錯覚を覚えさせる。その沈黙を破ったのは大きく戸を閉める音だ。室内にブーツの音が高く響く。

広間に現れたのは黒衣の老人だ。この城の主にしてファティマ医師でもある。ミハイルは姿勢を正してグラン・コークスを迎える。

「久しいなレスター。お前の用事はアレのことか？」

「今日はフロリーのことでお話を伺いに来ました」

唇を湿らせミハイルは用件を伝える。駄目元ながら医師の言葉から何か掴めないかとシユロにやってきたのだ。それが思わぬ再会を生んでいた。

「いいだろう」

グラン・コークスはソファに腰掛けミハイルに座れと目線で促す。ミハイルは向かい

側に座る。

「お前たちは書齋に行っていないさい。少し取り込んだ話をする」

「はい、お父様」

エデイがフロリーを押し、背を向ける。それにパルスエットも続く。

革張りのソファに座ってグランと対面しすっかり冷めたカップに手を伸ばすとミハイルは唇を湿らせる。

六年振りになる老人の顔はあるとき以来変わりはないように思えた。

そして、ミハイルは最近、活発になつてきた辻斬り事件のことを語り始める。

すでに知っている事件であつたがグランは頬杖を突いて聞きに入る。その間、グランは眉一つ動かさなかつた。

車椅子を引いてエデイは応接間から出て書齋に向かう。

「はいです」

「お邪魔します」

開いた扉の向こうは書齋らしく本棚と大きなマホガニーのテーブルが見える。躊躇つたのは一瞬だけでパルスエットは書齋に足を踏み入れていた。

◆ 広い書室の本棚の前で二人は本を選ぶ。何冊も絨毯の上に並べて、どれがいいのか短

い言葉で談義しながら、右と左へ選り分けて行く。

施設に持っていく本を選んでいるのだ。大量の本は児童書や絵本の類が大半を占めている。

発注主はエディだ。本もどれが良いのかわからず多くの絵本を発注したため沢山の包みが届いた。

星団中の絵本が集まっている。お父様に本屋でも開くつもりかと言われたが、誰かに売るつもりで購入したわけではない。

少し反省して返品を申し出たが、コークスは不要だと言って、市の町民会館に寄付すればいいと助言した。

お父様の許しが出たので選別作業をすることになった。メイドの子も手伝うと言ってくれたのだが、自分の仕事でも忙しいだろうと断っている。

書齋に持ち込んだ本だけで数百冊ある。

お父様とお客様の話し合いが終わるまで届いた本の選定を始めたのだ。それにパルスエットが手伝う形で加わっていた。

エディとパルスエットは並べばよく似ていた。外見的特徴と雰囲気には差異があまりないのだ。一般的な意味での姉妹という形容も当てはまりそうなくらい似通っている。

とはいえ、同様の意味ではない。見た目が似通うのは、同じ工場か工房の出身であるか、または師弟関係にあるマイトなどが同一の胚から分けたファティマによく見られる傾向だ。

パルスエツトはモラード指揮下の工房で生み出され、エディはコークスが生み出した。

同一の胚を共有したとしても不思議ではない。マイトの師弟であればよくあることで、そのファティマが同様の特徴を有していることも珍しくなかった。

そういう意味で、二人は姉妹に近い従姉妹のような関係といって差し支えないのかもしれない。

「この絵、素敵ですね」

「じゃあ……これはこっちに」

選んだ本を積み重ねる。絵本を選ぶ判断基準は挿絵や表紙絵が気に入ったかどうかである。それ以外で気になるものは開いて読んでいたから、この作業はまったく捗っていないかった。

二人のやり取りを耳にしながら車椅子のフロリーは微動だにせずにいる。術後のファティマの世話はエディに任されていた。

今度の訪問でフロリーを孤児院に連れて行っていいか尋ねたら、お父様は構わないと

承諾した。

それに、あの子にもまた会ってみたい。暴漢から助けた少女アイラ。まだ、まともに会話すらしていなかった。

お父様は気にすると言った。でも、私は……よくわからない。

フロリーの術後の経過は順調だ。ファティマの強靱なボディは命を繋ぎ回復に向かっていた。後二ヶ月もすれば直に歩けるようになるとのことだ。

ただし、失われた記憶は元に戻らなかった。ファティマの記憶は基本が焼付けで、本的な知識は失われにくいとされている。

しかし、ヘッド・クリスタルの破壊によつて受けた精神的なダメージでフロリーの積み重ねてきたデータはすべて破壊されていた。

つまり、事件以前のことから、自らのマスターの記憶に至るまでが破壊されてしまっていた。

今の彼女は生まれただのファティマと変わらない状態だ。否、壊れファティマをそう呼ぶならばだが。

フロリーは心を閉じていた。外界のすべてから自らを閉め出している状態だ。

「こんなに本を孤児院に持っていくのですか？」

「子どもたちに……読み聞かせるの。お父様がそうしろと」



読んでいた本を閉じてエディは答える。ほとんどは寄付していいと許可はもらっている。あちらの本棚が許す量でだ。

孤児院には定期訪問をしている。絵本の読み聞かせをせがまれるようになって、エディも本を読むのを内心では楽しみにするようになった。

一度読み聞かせを始めれば、拙い読み手でも子どもたちはエディの前に集まってくる。

アイラはお喋りしてくれるでしょうか？

赤毛の少女は病院から孤児院に移っている。孤児院でも誰とも打ち解けず一人でいることが多いようだ。

「あの、セルマ……お姉様」

躊躇いがちに発せられたパルスエットの言葉にエディが髪を揺らして顔を上げる。その瞳に映るのは俯いたパルスエットの横顔だ。

「セルマ？ 私エディ」

その単語に聞き覚えはない。セルマという名を首を傾げて問い返す。

なぜ、その名前と呼ぶのだろうか？

二人の間に沈黙が訪れる。

「ええと……」

「お姉様……私が？」

エディは疑問を言葉に乗せて瞳をパルスエツトから離さない。

兄弟や姉妹がいた記憶はない。かつてはいたのかもしれないが、フアテイマの家族とは、姉妹とは、この世界において、いつ敵同士になるかわからない存在だ。

機械として生み出され、巨大な兵器の部品として組み込まれるモノでしかない。

そしてその記憶をエディは持たない。その前の記憶と心は破壊されてしまったのだ。フロリーと同じように壊れてしまったのだから。

「わ、私……モラード先生にお世話になっていたんです。小さいときに、セルマ……お姉様が私にいろいろ教えてくださって……」

パルスエツトが無言の視線に耐えかねたように語尾を下げて行く。その手元の絵本に視線を落とす。エディもその絵を眺める。

赤い原色の色使いの背景に白い馬が描かれている。

萌えるような赤は夕日に染まる草原の様だ。荒々しいタッチのように見えて、絵の中に浮き出たような、翼の生えた白馬の姿が印象的に描かれていた。

ペガサスという。馬に似ているが、今では忘れ去られた伝承の中に登場する生き物だ。伝説では、この白馬はその翼で天を翔けるのだという。

二人がそれを選んだ理由は、独特な絵のタッチからだ。それに天馬という、星団では

存在しない種の動物の姿には魅せられるものがあつた。

空想であるにせよ、そこに描かれている天馬の絵は素晴らしいものだ。それは一言で言うならば美しきだ。その絵を一目で気に入った。

遠くで雷の鳴る音が響くのをエディは聴く。

「私は——記憶がない。昔のことはわからない。あなたと会つたことがあるのかもわからない。セルマというのが、以前の名前なのかすら知らない。今の私はエディ。お父様がつけたA-1 D-2（オールツデーイトウ）という名前だけしか知らない……」

窓際のプロリーを一瞥する。

私は彼女のようであつたのか？

マスターもなくして、壊れてしまつていたのだろうか？

その横顔を悲しそうな顔でパルスエツトが見つめる。

そう、あの子のように記憶を失い、以前の私というものはもういなくて死んでしまつたのだ。悲しいと思うより、記憶にないものを実感することは難しい。

私ではない誰かの記憶。ときたま混じるのは誰かの意識と記憶。懐かしいようで、とても怖い記憶の隙間。

どうして、この人は私をそんな悲しい目で見るのだろうか……

途端、揺り動かされるような心の動揺を感じる。それを沈めるシステムが次には心の

動揺を収めた。

胸に残るのは小さなわだかまりだ。もどかしく思いながらもそれに自分の過去が関係あるのかと思う。

ダムゲートは感情を制御するのみだ。生まれた感情の行き先、それは沈み込んで心に歪を残す。

フアティマが人前で感情的になることは許されない。ダムゲートが機能しても感情の名残のようなものを感じることはできる。

それは悲しかったのだ、とか。怒っていたのだ、とかの遅れてくる感覚だった。それを元に感情を再現することはできる。

私は何者なんだろう。セルマという名の個体であつたのだろうか？ わからない……

「パルスエットさんはモーターヘッドに乗って戦闘をしたことがある？」

「はい……」

エデイの問いかけに神妙な顔でパルスエットは頷く。

おかしな質問をしたと思つたが、その問いをせずにはいられなかった。MHに乗るのはフアティマであれば当然のことだ。

戦場にマスターと赴き戦って壊す。

自分とよく似た目の前のたおやかな少女もMHを駆る機械の一部である。マスターを持つ以上、戦場を知っているはずだ。

だからエディはその問いを発した。自分にはまだその経験がない。

MHに乗ったことがない。ファティマとしてそれは欠陥を意味する。それどころかMHに拒絶され、乗ることを拒否する自分。

それは気後れとなっていた。MHに乗れないファティマに何の価値が有るのだろうか。

「私は、わたしという、今の自分になつてからモーターヘッドに乗ったことがないの。でも、なぜか、私のこの頭の中に、戦場の記憶がある……きつと、ううん、乗っていたんだらうと思う」

胸に手を当てていったんエディは言葉を切る。

破壊されたヘッド。

戦車を打ち砕いたベイル。

戦場を飛び交うビーム兵器。

着弾し、飛び散つた兵士達の残骸――

その記憶にエディは身を震わせる。

怖いのだ。

何を？

失うことが？

失われることが？

ただの機械は考えることをしないというのに。

また雷が鳴り、今度は近かった。徐々に近づいて来ているようだった。

「私はモーターヘッドに乗るのが怖い——ダムゲートがそれを拒絶する。戦えつて命令するの。私はコクピットに乗ると頭がおかしくなってしまうそうになる」

エディの黒曜石の瞳が照明の角度できらめいて明確になる。床に置かれたもう片方の手にパルスエットの指先が重ねられる。

その下には白馬の絵がある。

壊れているからだ。そう、壊れているのだ。ファティマが怖いと戦いを拒否することは許されない。そんな感情があつてはならないのだ。

いつそ、ダムゲートがすべてを忘れさせて、私を戦う道具にしてくれたらいいのに、と思う。

「あなたは怖くない？」

「わ、私も。本当は怖いです。いつも……」

エディとパルスエットの視線が交じり合う。重ねられた手は互いの指先を絡め合う。

二人の距離はとて近かった。

思いもよらぬ言葉に、エディはその言葉を胸の内で反芻する。

「そう……」

「ファティマはモーターヘッドに乗るのが当たり前です。でも……やつぱり怖いです。私  
が乗った子が誰かを殺して、誰かの人生を奪って、誰かを不幸にする。でも、私が負け  
たら、マスターがいなくなっちゃうかもしれない。そんなの嫌だから……私は一人にな  
りたくない。マスターを一人にしたくない……だけど、モーターヘッドに乗るのが、私  
たちファティマだから、だから……」

戦う、という言葉を読み込んで、肩を震わせる。その先はダムゲートが制御していた。  
それが、かつて姉と呼んだ相手であろうと、運命は残酷にも両者を戦い合わせたのだ。  
そして彼女は今パルスエットの前に存在している。

パルスエットの瞳にわずかに涙が浮かぶ。

ダムゲートでも強すぎる揺らぎは抑えきれない。戦場でもない限りダムゲートはそ  
の強弱を変えるものだった。

極度の戦闘状態でない限り、ダムゲートの感情抑制機能は抑えられたものとなる。精  
神的に不安定なファティマの精神崩壊を防ぐためのシステムだからだ。

エディは唇を噛んで、胸の内に湧き上がる感情を繋ぎ止めようとする。

押さえつけようとするダムゲート・コントロールをなだめ、その感情を抱いたまま、パ

ルスエットの肩に腕を回した。

「ごめんね……」

そして謝罪の言葉を口にしてその細い肩を抱きしめる。

城の近くに落ちた雷が派手に音を立てる。無反応だったフロリーが顔を上げて、真つ暗な空に走った稲光を見上げていた。



## 【7話】狂犬ラルゴ

どこまでも晴れ渡った空が広がる。その空を背景に男が崖に立ち、そこから望める景色を眺め渡す。

「ノウズの空だ」

冬のこんな空は珍しくはない。風が強く雲はあつという間に流れ去って行く。青い空に白い雲の残照が消えていく。

「辺境の風も慣れれば郷愁というものだ。北の風か——」

そう呟いた若者の顔は少年期をすでに脱していた。軍服の下で鍛えられた肉体は若々しさに満ちている。

男の眼差しを見る者があれば、その目に凍りつくような寒々しさを感じたことだろう。鋭利な刃物か獲物を狙う鷹を思わせるような鋭さを持った目だ。

コートが翻る。その身に冷たい風を受け止めてコートが風に吹かれるに任せる。

白いものに覆われた連なる山々が見える。そこはウモスの領域で、今いる中立線との境はわずか五キロほどでしかない。

直線距離からだに近いが、曲がりくねった渓谷や崖が絶壁となつて道々を遮断してい

る。

こちらに飛び領があるクバルカンとの折衝区域も近いことから絶好の監視ポイントとなっていた。

国境沿いは崖で隔てられているが、心得のある騎士の足ならば一足跳びで達するような狭隘の地だ。

ここを捨てても隠れる場所はいくらでもある。ミミバの者が手先となって近くの村落などから情報収集を行っている。感付かれたとしても連中が来た頃にはもぬけの殻だ。

巡察に出る騎士同士が鉢合うことを避けていることもあり、この付近は空白地帯ともなる。その空白地帯を狙っての布陣だ。

ウモスとクバルカンなど勝手に潰しあえばよい――

口元に酷薄な冷笑が浮かぶ。

普段から仲が良いわけでもない両者が辻斬討伐に共闘することもない。この土地の複雑な事情を知るからこそ絶好の狩場なのだ。

青年がコートの下にまとうのはフィルモア帝国の軍服だ。白地に赤い縦縞の入った制服といえば皇帝直属のノイエ・シルチスに他ならない。

北方に広大な領土を持つ帝国から遠く離れた南の地にフィルモア帝国の騎士がいる。

このフィルモア帝国はカラミティの超大国として知られている。遙か昔に存在した超帝国時代より連綿と続く王家の血筋を誇り、その巨大な軍事力でもってしばしば他国の紛争に介入していた。

他国の国境事情が複雑に絡み合う地にフィルモアの影。

最近の辺境の緊張状態にフィルモアが絡んでいる事実は、辻斬りというオブラートに包んで始末するのが彼の仕事だった。

青年は振り返って無骨な装甲に包まれたMHを見上げる。岸壁の窪地に収まるその機体の反射のないグレイのヘッドが騎士を見下ろしている。

そのMHには国籍、所属を表すマークは一切ついていない。一般的に知られている機体の特徴は有していなかった。

無個性なノーフェイスという仮面を付けた鋼鉄の騎士。どの国のどのマイトが関わったのかさえ定かでない機体だ。そのMHは装甲の表皮に地形対応色の磁気コートを施されている。

グレイの地肌と偏重仕様の装甲がこのMHの異様さを際立たせてもいた。いわゆる駆逐型と呼ばれる、汎用性を捨てた戦闘重視の装甲スタイルだ。

そのメイン武器は太刀だ。

他に余計なMH用の武装は身につけていない。一撃離脱を重視した装備は偏重だが、

これは任務に合わせた特殊な例だ。

磁気コートはレーザーやソナー感知を阻害できる隠密用のものであるが、任務などに用いるには実用的ではなく行動するときは外さねばならない。

装甲の厚さは軽MHに近い装甲ラインだ。動きやすさを考慮されたデザインで、節々の間接に防塵対策されたシールがなされている。

外側からうかがい知れない鋼鉄の巨人は灰色の岩肌を溶けこむように鎮座している。何度も人の血の味を吸った機体だ。ここ最近のMH狩りによる騎士の殺害を繰り返してきた殺人マシーンである。

我が無敵のサイレンであれば面倒なことはないのだがな――

それは叶わぬ。ここは普通の戦場ではない。熱くたぎる血潮を発散させるには、もつと陰惨な血の雨を降らさねばなるまい。

強い風が吹き抜ける。その中で若き騎士ラルゴ・ケンタウリは不敵に笑う。恐れを知らぬ若々しさに満ちた、野禽の如き、獰猛で冷徹な微笑で。

ここで彼を制止し得る者はいない。皇帝自身であろうともだ。

「ラルゴ様、本国より入電です」

軍服姿の士官がラルゴに遠慮がちに声をかけた。

本国から連れて来た任務に当たるための人員もそろそろ疲れが出始めている。この

ような地では仕方のないことだ。

とはいえ、私はすこぶる調子はいいのだがな。

「わかった。すぐに行く」

声をかけた士官に視線を向けた後、ラルゴはきびすを返す。敬礼する士官の前を横切つてテント内へと向かつていた。



「ラルゴよ、久しいな。見ない間にずいぶんと羽目を外しておるようだな?」

「陛下」

親しく自らを呼ぶその声にラルゴは跪く。秘匿回線によりこの通信を傍受される可能性は低かったがそう長く話せるものでもない。

血の宮殿騎士団（ブラッドテンプルナイト）とも呼ばれるノイエ・シルチスの銃士であり、赤の一番（テストアロッサ）と呼ばれる男が膝をつくのは、フィルモア帝国の皇帝であるリーダー八世その人であった。

お互いに若さに満ちた、将来のフィルモアを背負つて立つ男たちである。

「お預かりしているブルーレイの試運転と実戦テストは滞りなく……」

俯いたラルゴの額に冷や汗が浮かぶ。内心では叱責は覚悟していた。

ここ最近、やたらと周囲を嗅ぎ回る輩が増えた。そのおかげでいくつかの野営ポイン

トの変更を行っている。

つい先日嗅ぎ回る犬を始末したばかりだ。太刀の錆び落しにもならぬつまらぬ相手であったが、近頃は辻斬り捜索に人手を割いているのか、ここら近辺も慌しくなってきた。

キャラバンの結界網を利用しているが身動きは取りづらい。思うように動くには相手の裏をかかねばならない。

「アレの出来はどうだラルゴよ？　ハスハの戯れと思うたが、存外、形にもなってみれば可愛いものではないか？」

MHを可愛いなどと言う。愛着を持って呼ぶのであれば、本国に置いてきたサイレンの名を呼ぶのが妥当だ。

「お戯れを……ブレイとサイレンを同列にはできません……」

リーダーの冗談であろう。ラルゴは緩んだ口元を引き締める。

あの機体はブレイという。試作型ブレイのベースはサイレンのものだが、すでにまったく違うMHと言っている。

ラルゴが心を置くような機体ではなかった。戦場で敵を殺すためのただの兵器にすぎぬ。ファティマと同じである。

「わしのネプチューンも騒いでおる。のう、ハイランダー？」

「は……」

ハイランダーという呼びかけにラルゴはかしこまる。

正式にはラルゴはハイランダーではない。戦闘集団である国家騎士の頂点に立つハイランダーを冠するには、まだまだ己は未熟であると自覚していた。

「ハハハ、ブーレイの指揮権をお前にとコレットが言うたときはどうつもりかと思つたが、やつめ、ブーレイの試し切りとデータ取りを我らに押し付けたのだ。もつとも、十分な見返りはあつたがな」

「は……」

レーダー八世とハスハのコレット王との間にどのような約定が交わされたのかをラルゴは知らぬ。

ラルゴの忠誠はレーダーの下にあり、主君が是と言えば是として、否と言えば否と従うのみだった。

その彼も主君の目が届かぬ辺境にあれば、その内面に秘めた血の滾りにも似た野生を抑えることはできなかつた。

忠実な犬の仮面をかぶつた騎士は本性を現すのだ。

ここでは血への渴望を妨げる者はいない——

「引き続きこの地に留まり、収集を行います」

「いや、よい」

「は？」

レーダーの言葉に顔を上げる。

「そろそろ戻って来るといい。交代を向かわせた。お前の顔を見ながら辺境での武勇伝を聞きたいのだ。そろそろ引き時であろう。ウモスの総統めがかなり冠でな。不埒な辻斬りを退治してくれると言っておった。六年前のことと、お前の関連性に気がつく者がおるかもしれん。それにお前がいないと足棟斎（ヒートサイ）めがうるさくてかなわん」

「師、がですか……」

師のアビエン・足棟斎（ヒートサイ）はノイエ・シルチス黒グループの筆頭にしてラルゴに直に剣を教えた人物である。

強天位にしてフィルモア最強騎士である足棟斎はラルゴが敬愛してやまない人物だ。もう一人は目の前のレーダー八世である。

しかし、師のアビエン・足棟斎は気高い騎士だ。今のラルゴを見れば何と云うであろうか？

だが、ラルゴももう子どもではない。師の手を離れた今は汚れたことも厭うてはいられない。



むしろ、望んでここにいるのだと言えた。

「お前のサイレンも寂しがっているぞ」

「畏まりました。引き継ぎ次第帰還いたします」

「土産話を期待している」

「陛下には存分な成果を語りましょうぞ」

通信が切れラルゴは呟く。そして、テントの外に見えるブルーレイにその酷薄な視線を向けるのだった。



数刻後——辺境回廊。道を抜けのシャトルバスが谷の切れ間から姿を現す。

すれ違うデイグもドーリーすらない。山道に入ってから同じ景色がずっと続いていく。

文明社会とは切り離された絶壁の辺境世界が広がる。

「ほーんつと！ 山ばかりのど田舎ね……イラつくわあ……」

窓際の座席で若い女がため息をついた。天然の絶景ももう見飽きた。遠くでゴロゴロと空が鳴る。

気象の変動はあつという間だ。昼間はよく晴れていたのだが。

本来のコースを遠回りしての道のりで、本当ならとつくに着いているはずだった。

例の辻斬り騒ぎでコースが封鎖されて、おかげで予定より半日の遅れが出ている。

観光に訪れた若い娘といった出で立ちで、観光客であることに間違いなかったが、この地を訪れるには少しばかりセレブ過ぎる恰好だ。

長身にブランド物の白い服を着こなし、周囲にいる乗客達とは毛色そのものが異なる。

ピンヒールブーツを履いている者など他にはいない。

バスには鉱山に向かう男たちや行商の者たちが多く乗り合わせている。

このシャトルバスは観光用に整備されたものではなく、この周辺で働く者たちが使うように定期的に各町を巡回していた。

バスはこの辺境に外からの人を運ぶ唯一の交通手段ともなっている。観光の目玉といえ、この近場では中立都市のシユロだけだ。

車内には、顔の浅黒い労働者と、親子連れだったり、行商を生業としていであろう老婆の姿が見える。

観光客と思わしき人の姿はない。

「超場違いすぎ……」

少女のパスポートにはサンドラ・イルケという名前が記されている。サンドラは観光協会が発行しているパンフレットで顔を隠す。

その横顔は、まだどこか幼さを残してはいるものの、花咲く前の大輪を思わせる。

タレ目気味だが、デルタベルン系列の人種の特徴を有していて、大変な美人の相だ。

「……遠回りしすぎじゃない。いつ着くんだよ」

バスのコースに文句をつける。それというのも、一日違いでこうなってしまったからだ。

観光バスの正規コースのルートが封鎖されたなんて情報は聞いていなかった。直通バスに乗りそこなったおかげでご覧の有り様だ。

来たと思ったら、ついさつき封鎖すだあ。ふざけんな、バーロ。

日焼けした地元民が好奇心旺盛にサンドラへ視線を投げかけるが、彼らが直接話しかけてくることはない。

「早く着かないかなあ〜」

サンドラはパンフレットを放る。溜息の後の車内に目を向けると、無遠慮に視線を投げかけていた労働者たちが視線をそらした。

そのとき、小さな女の子と目が合う。あどけない顔の娘は小さく手を振ってくる。

「は〜い」

愛嬌たっぷりなサンドラが手を振りながらウィンクして返すと、その娘はいったん頭を引つ込めてから、座席から伺うように見つめ返してくる。

その娘においで、と手招きすると、少女は自分を指してから、コクリと頷いてこちらに歩いて来る。

「ねえ、ポツキー上げよつか？」

何のことかわからずに幼い娘は愛想笑いを返す。サンドラのバッグから取り出されたお菓子の箱を興味深げに眺める。

「んー、チョコがいい？ ストロベリー？ どっちが好きよ」

少女は箱を手にするサンドラを見上げる。色彩豊かなパッケージの箱が珍しいのだから。

「うー……？？」

少女が振り返る。母親がいる座席から男の子の頭が現れてこちらを眺めている。少女より少し幼い感じの子だ。

「何だ、弟？」

「うん」

「じゃあ、これとこれもあげる。分けて食べるんだぞ？」

「あ、いい……の？」

派手なプリント柄のついたお菓子の箱を両手に少女は戸惑いながら返す。こんな辺境では都会のものとても珍しい。

「うん、もちよもち」

その小さな頭をサンドラは撫でる。そして揺れる車内を戻っていく小さな背中を見守る。

すると、母親が立ち上がって娘とやり取りをすると、こちらに向かつて強張った顔で頭を下げた。

「ノープロブレム、ノンノン、平気平気。オケ〜？」

申し訳無さそうな母親に愛想笑いを貼りつけたままサンドラは手を振る。お互いの意思疎通が終わった所で席につくと、今度は思い切り欠伸をする。

窓からの眺めは灰色の岩肌と、切り立った峡谷、そして黄色い砂塵が混じる風だ。

目的地であるシユロまではもう少しかかりそうだ。

「まったく、スープ様ったら、こんな山奥でこそこそ……まさか、秘密の恋人でもいるのかしら……あたしというものがありません！ グギギギっ!!」

と、強くハンカチを噛み締める。その表情はおかしいほどにコロコロと変化する。

ひとしきり、そうしてから背もたれに落ち着くとぼんやりと天井を眺めていた。

「それにしても、こんな場所で何をやらかすつもりかしら？ あたしに黙ってオイタするなんて、そうは問屋がおろさないんだからね。きつと、なんか面白いことするつもりなんだ！ 整備班とバクスチュアル連れ出すなんて、ぜってー、モタへ絡みに違いない

わっ！ マシンオタクのどんちきめっ！ まったく、へーかがいないとつまんねーんですからねっ！」

窓の外はすでに暗く、過ぎ去る車道も山も暗いダークトーンの淵に沈みこんでいる。元より人里など皆無の場所だ。

この界限にはいくつかの町と不法滞在する移民と犯罪者のキャラバンなどがある。その区別をするのは余所者には不可能とわかっていい。

何があるかわからない。まさに辺境である。

唯一明るい車内の窓ガラスに映った自らの顔を彼女はぼんやりと眺める。

ソープ様捕まえて、このまま愛の逃避行なんてのもいいわね……

ヒヒヒ、初夜はいただき。いや、捧げるんだよ！ アホね私っ！

妄想にほくそ笑むサンドラ・イルケ。彼女はデルタベルンから訪れた「ただ」の観光客である。

「何だ……っ？」

そのとき、サンドラの直感が身の危険を告げる。耳に手を当てざわめく感覚に目を細めた。

不味い——この感覚は。次の瞬間、爆撃音がシャトルバスを震わせた。衝撃が車内全体を大きく揺らして傾く。

「襲撃っ!？」

誰が!

何者が?

考えてる時間など一秒もない。

逃げ場がないっ!

窓をかち割れとサンドラは瞬時に判断する。

次に放たれた高速の弾道が車体を貫通すると車体を爆発炎上させていた。コントロールを失ったシャトルバスが谷の底へと落ちていく。

それを崖の上から眺める幾つもの目がある。異様な風体の男たちだった。

崖の真下で炎上したバスがバラバラに崩壊して辺り一面に惨状をばらまいていた。

「行くぞ……」

リーダーに従って男たちが谷間を駆けて闇夜へと走り去る。

「ふっざけんな〜!」

女の白い細い手が伸びて岩肌の突起を掴む。

唯一の生還者は女騎士だ。襲撃者の目を逃れて地面に追突する瞬間に窓から脱出していた。

あの瞬間、サンドラに出来たのはただそこから逃れることだった。

彼女以外の生存者はいない。騎士の身体能力でも間一髪の脱出劇だ。

「あつちか……おいたが過ぎるね」

サンドラの格好はひどい有様だ。焼けた服とスカートはボロボロで、ブーツは片方脱げて、片方は履いているが踵が折れている。

生存者は自分だけ。誰かを助けている余裕はなかった。民間人が乗るバスに兵器を使うなど、いくら辺境とはいえ無法地帯すぎる。

ゲリラの仕業に見せかけたつもりだろうか？

「ごめんよお……」

真下で燃えるバスの残骸に向けて呟くと、サンドラは一足に飛んで襲撃者の足取りを追っていた。



## 【8話】サンドラ・イルケ

乾いた黄色い岩肌が蹴られ細かい石が転げ落ちていく。平らな岩棚に降り立ち動きを止めたリーダー格の男が振り返る。

特徴的な吊り上がった双眸が部下を一瞥する。その目と黄色い肌の色は男たちに共通する特徴だ。また、黒衣の下の服装も民族的な特色を帯びている。

その服はカラミティでは珍しい着物スタイルで、厚着をして隠しているものの特徴的な装身具までは隠しきれていない。

ミミバと呼ばれる一族がいる——彼らはボオスの少数民族だ。生まれつき騎士として生まれてくるといふ特異な体質を持つ。

「撒いたようだな。騎士がいたか……」

リーダー格の鋭い眼が部下に向けられる。その失態に部下たちは沈黙で答えた。身を切るような寒さだ。吐き出す白い息が暗闇の中で唯一存在感を示す。灯かりのない中、男たちは迷うことなく入り口のある方へと歩き出す。

この絶壁の向こう側に道があるうとは誰も知り得ないことだ。

ミミバ族特有の鋭い目は暗闇でもはつきりと見通すことができる。彼らは遠い星の

人には見えない天の瞬きまで感じ取ることができるほどの視力を備えている。

隠密に優れていることから彼らは重用されるのだ。高い身体能力を持つことから暗殺さえも手がける。

「感づかれたとすれば赤（テストアロッサ）に報告せねばな……」

「誰だっ!？」

微量に感じた気配に仲間が振り向いて誰何の声を上げた。

弾かれたように他の二人が光剣（スパッド）を抜き放つが、それを上回る速さで振り向いた左の男の顎が碎かれる。

派手に吹き飛ばされる壁にしたたかに背を打ち付け骨が碎ける音が響く。

不意の襲撃者に対して切りかかった男の喉笛を手刀が貫き、顔面に拳が放たれる。虚空に血飛沫が舞う。

その体術の軌道に瞠目してリーダーは踏み込みを留まった。

「っ!？」

暗闇に青白い光が散る。光剣の輝きだ。危うく一步下がって頭は光剣で受け止める。暗闇の中で、一瞬の光のきらめきが双方の顔を照らし出す。

「貴様っ!」

「はい、はい、よく止めたね〜 でも、こっちはブラフなんだよね」

「うかつ……」

ごふり、と口から血を吐いてリーダーが倒れる。その腹に深々と突き刺さっていたのはサンドラの握り拳だった。

暗闇の中、一瞬だけ少女の姿が浮かび上がる。サンドラは洞窟内部の構造を確認して足元に気をつけながらまだ生きている男を引っ張る。

苦勞しながらもう一度周囲を見回した。洞穴の入り口が遠くに見える。

「畜生め、手加減できなかつたじゃんかよ」

愚痴るように呟きながら男を引きずる。

「ちよつと、生きてるんでしょ？ 男の癖にだらしないなあ」

顎を砕かれた男の側に座ってサンドラはその頬を叩く。そして呻き声を上げる男の頬口を手で掴んだ。

「さあ、お言い。あんた達は誰に雇われてるんだい？ なぜ、シャトルバスを狙った？」

「……」

「あれ？ 痛くて答えられないか？ 背骨折っちゃったしな……」

軽口のサンドラを見上げたまま男は無言で答えない。その表情には侮蔑の色が浮かんでいる。

「拷問とか趣味じゃないんだよね。お宅ら、いったいここで何してくれたわけ？ つー

か、買ったばかりだったのにあたしの靴くくく オサレ着も全部ボーンだよ！ ソープ様にどんな顔で会えってのよっ!!」

半ば首を締めながら揺さぶるサンドラを見上げた男が声なく笑ってみせる。そのふてぶてしきは答える気配などまったく見えない。

「痛みには強いってか。こういう手合いは埒があかんで困るわ……」

「がっ!」

身をよじらせる男の胸元をサンドラの足が踏みつける。内臓を傷つけているのか、圧迫を受けて口から血を吐き出す。

「ほれほれ、我慢せずに吐いちゃえよ。我ながら拷問とかきもく。メイドさんだってこんなプレイやんないよ?」

「じゅーよーな情報があればお手柄……ソープ様もアイシャよくやった愛してるくぶちゅくく そーだ、この流れだよ! ウヒヒ、あたしって天才だわくく」

「グフ……」

うめき声が上がリ、サンドラは異変に気がつく。そして倒れた男の口元を掴む。げほり、と息を吐き出した後、男の体が痙攣して動かなくなる。

「あちゃく、口の中に毒か……よく調教された草はこれだから。くそつたれ!」

思わず壁キックをかますが岩が濡れていたのかサンドラは足を滑らせて転ぶ。

「あぎゃ〜 お尻打った〜」

パンツ丸見えであるが気にもしていられない。痛むお尻を擦りながら立ち上がる。

「あたしっておバカー！ はあ……」

死骸となった男たちを見下ろしてサンドラはため息だ。捕まえるつもりだったがこの有り様である。

不意打ちとなった襲撃も相手側に態勢を整えられてはさすがに不利だったし、この暗闇の中では全力を出し切れない。それゆえの先制だった。結果の現状には苦笑するしかない。

そして、せつかくの手がかりがペアになってしまった。生きて捕まえられればよかったのだが、すでに後の祭りだ。

これではソーブ様に合わせる顔がない。服もない。

サンドラはポケットを探ると一枚のカードを見つける。

デルタベルン発行の旅行用ゴールドキャッシュカードだ。暗い中でも燦然と金色のサンドラ・イルケの名前が記されている。

唯一無事に残った命綱だ。

「あ、クレカあった〜！ これさえあれば何とかなるよね〜！ 風呂入りたいなあ。たく、何であたしが死体あさりなのさ〜！」

男たちの身元の保証になるようなものはない。それに騎士登録をしているとも思えない。草としての生粋の忍びだ。

特徴から見てミミバと予想をつけるが自信はない。こんな辺境にミミバ族の間諜がいるなどおかしいことだ。

「最近良く聞く辻斬り絡み？　なくもないけど、もしそうならピングゴなんだけどなあ」  
何にせよ裏があることは間違いない。

サンドラは立ち上がると遠くに見える街明かりを見つける。城塞都市シユロの明かりだった。

「おお、ラツキー。とりあえずあそこを目指そう」

夜明けの近い空を見上げる。強い風が髪をさらう。そしてサンドラは崖の向こうの城壁に覆われた町に向かって歩き出していった。



赤い液体がグラスになみなみと注がれる。紅に揺らいで映る自らの姿を飲み干すようにラルゴはグラスをあおる。

グラスが置かれ、後ろに控える魔導師（ダイバー）へ顔を向ける。

「偵察に出た連中が戻らぬと？」

分厚く垂れ下がった天幕の向こう側に気配を消した男が立っている。ラルゴの問い

にダイバーは黒目のない白眼を返して応えた。

ダイバー・パワーにより超常の力を発揮するダイバーを束ねるのは、ダイバーズ・パラ・ギルドという組織だ。

国家騎士団や騎士ギルドと同様、ダイバーという異形の存在を星団法の枠組みに属させている。

そのパラ・ギルドに属さぬもぐりのダイバーをラルゴは雇っていた。

「捕縛されたのか？」

ラルゴは苛つきながらも、彼が何を見ているのかをまた問いかける。

高い金を出して雇っているのだ。苛ついたくらいで切り捨ててはやってられない。ダイバーも貴重な手駒だ。

「……命の……灯火……は消えた……相手は魔導師（ダイバー）……ではない」

ラルゴの脳に直接声が響く。ダイバーの声帯は潰れていて一声も発することができない。精神波で脳に干渉して言葉をイメージとして刻みつけているのだ。

言葉を発した後、水晶球を押し抱いたままダイバーは沈黙の世界に身を置く。

「ふん……」

ラルゴはダイバーの覗く水晶球を眺める。球体内部に新たな光景が浮かび上がっていた。何が映しだされているのかなど見当がつかない。それは超感覚を持つダイバー

だけが予見しうるのだ。

「……争った形跡……ネズミに……嗅ぎつけられたものかと……」

「ウモスカロツゾの捜索隊か？」

「相手は……一人……女？……緑の……」

「ウモス……クバルカン……それ以外のいずれか？ どのみち、しばらくは出られんが

な。この風が止むまではな。ミミバの欠員だが」

「ギエロ様が……補填……要員を……連れて……来られる」

「そうか、ではいい。下がれ」

「はっ……」

天幕から男の気配が途絶える。空間を渡る術もダイバー特有のものだ。

「ダイバーめ……役立たず」

「ラルゴ様、ギエロ様が到着いたしました」

「そうか、通せ……」

士官が姿を消すと現れたのは民族色のある黄土色の服をまとった痩せた男。

「お久しぶりでございます。ラルゴ様、ブレイのギエロ参上いたしました」

ノイエ・シルチスの制服姿のラルゴに対し、ギエロはミミバの服装である。

フィルモアの手足として騎士として雇われている。表に出ることのない任務でミミ



バ出身の騎士がMHを駆るといえばこんな泥仕事しかない。

「わざわざ足労だな。飲むか？」

「いえ……」

杯を掲げるラルゴにギエロは直立不動で答える。

「ここは悪くない狩場だ。もつとも少しばかりネズミが多くなりすぎた。俺の足元を嗅ぎまわっている連中がいる。それを始末してから帰っても問題あるまい？」

問うようにギエロを一瞥し、ラルゴは杯を飲み干す。

「本国はラルゴ様に帰還を求めておいでのようですが……」

「ウモスの連中が大分ピリピリしているようだな、俺の首を上げたくて仕方がないようだ。これを見てみる、俺の首に懸賞金だそうだ」

机の上に置かれた賞金首のチラシを指差す。偵察に出た配下の者がバーテローで仕入れてきた情報だった。

「ミミバの手の者はお役に立てていますかな？」

ギエロは媚びるように口元に笑みを浮かべて尋ねる。

「存外にな」

だが消えた。使えぬ奴らよ。秘密を漏らしたのではあるまいか？

ミミバを使うのはリーダー陛下の命令であるからだ。ラルゴはミミバ族をただの手

足として使っていた。そこに感情を挟むことはない。

「雑魚どもの巡回ルート割り出しには役立つ。ネズミが入り込んでいるようだな。先刻、何人か行方知れずになった」

「尻尾を掴まれましたか？」

「わからんが、ここも引き払う」

「ふむ……」

無言になったギエロが思案した後、ラルゴを一瞥する。

「だが、いまいち、俺の好みに合う手合いがおらぬな。青騎士、イザット、デボンシヤにキラーラなどではな」

ラルゴの酷薄な視線にギエロは口の端を曲げると声なき笑いを放って追隨する。

辺境警備の任務に当たる各国の巡回経路はラルゴがこの地に来て一番に把握させたことだ。

この地での活動に当たってラルゴが選ばれたのは、ラルゴが過去に起こした知られざる事件が背景にあった。

居合いの達人であり、その腕前は天位に届くといわれる男が未だ無冠なのは、その人斬りの「性」が原因だ。

六年前、ラルゴが起こした辻斬り事件は、手合いと称したMH同士の戦いから始まっ

た。

それが手加減無用の力試しになり、次第に手に負えなくなっていくた。破壊したMHは数知れず。騎士は殺害され、その骸は晒された。

フアティマの末路は言うまでもなく悲惨なこととなった。証拠を残さずに解体され、キャラバンのブラックマーケットに流されたのだ。

そのときもミミバ族を使い、この地での利を生かして暗躍したのだ。

フィルモア本国にいられなくなったのは、ラルゴがノイエ・シルチスで刃傷事件を起こしたことがきっかけだ。

少しばかりやりすぎたこともあって、上院からの突き上げを食らったのだ。

懲罰の意味でリーダー八世はラルゴを勘当し、追放することとなった。しばらく辺境でほとぼりを冷ますまで戻ってくるなど命を受けたのだ。

その人斬りのシバレースとしての血が目覚めたのは幼少の頃からだ。

ラルゴはフィルモア王家に連なる家柄であったため、血に流行るラルゴを止めえるのは一番近くにいたリーダーだけであった。

ケンタウリの名を慮り、ラルゴはリーダーの元で騎士としての教育を受けた。

それでもシバレースの血は抑えきれず、騎士同士の決闘が原因で放逐されたが、辺境でまた辻斬り事件を起こした。

ラルゴは呼び戻される。その頃には、人斬りの狂犬ラルゴ——そう呼ばれていた。そして今回与えられた任務は、非公式ながら国家の裏の仕事であったのだ。

「仕方ありますまい。大つぴらにやるな、とのご命令。もつと任務に相応しい地もあるでしょう。ラルゴ様の腕を示すには……後は我らに任せられよ」

感情を押し隠してギエロは告げる。真実はラルゴにこれ以上かき回され、問題が大きくなるのは避けたいところであった。

内心、ラルゴへの畏怖がそこにある。それをしまいこんだままギエロは無表情な能面の顔を装う。

「ブレイは何騎持ってきている？」

「三騎ほど。この地の砂に合わせてエア・シールドをしてきましたが、想像以上に嘯みますなあ」

「俺のブレイもそろそろ限界だ。一つ回せ」

「しかし……」

「何、引き上げる前にネズミを狩るだけのことよ」

押し黙るギエロ。それをラルゴは肯定と受け止める。

グラスにまた赤い酒が注がれる。ラルゴはグラスに注がれた赤い色に魅入る。

白砂の大地を惨劇の赤に染めてみせようぞ——

## 【9話】孤児院の少女

シユロの町の外れにあるセント・モルガナ孤児院の前に黒いデイグが停まった。

二人の少女が降り立つ。石造りの小さなアーチ門をエデイが車椅子を押してくぐった。

真上から照りつける日差しにエデイは目を細める。極めて透明に近い色合いのアイカバーが太陽光を反射してその表情を失わせて見せる。

その印象的で大きな瞳は真正面からでなければ見ることができない。

エデイは孤児院の広場を眺めた。今日の訪問目的の一つである彼女の姿を見つけていた。

「ストップ。挨拶してきます」

フロリーをどうしたものか迷ったが車椅子の角度を傾けて段差を乗り越えようと広場へ足を踏み入れる。

目的の少女は一心不乱に地面に何かを書き込んでいた。エデイは車椅子を固定し座り込んでいるアイラの近くにゆっくりと歩み寄る。後ろからこつそりとだ。

砂の絵にほっそりとしたエデイの影が落ちる。

「こんにちは」

「こんにちは……」

話しかけたエディに赤髪の少女が返した。アイラはまた地面に描いていた絵に視線を落とす。

アイラは町の診療所を退院の後、セント・モルガナ孤児院へ預けられていた。

少女が不自由なく暮らせているかがエディには気がかりだった。他の子たちに上手く馴染めていないようで心配だったのだ。

「お邪魔……でした？」

「ううん……」

枝先が角の先端を描き、ようやくそれらしい形が出来上がる。それは龍（ドラゴン）の姿に似ている。

突き出た頭のホーン。ドラゴンヘッドだ。砂の上の龍は化石から発掘されたばかりのようだ。

孤児院の敷地の広場で他に遊んでいる子どもは向こうに何人かいる。アイラはまだ馴染みが薄いか仲間に入れてもらえてないようだ。

アイラは人見知りする子だ。そのことをエディは知っている。以前お見舞いしたときは全然話してくれなかった。

今は少し慣れたので、こうして挨拶くらいはできるようになった。

少しばかりの進歩です。

「みんなと遊ばないの？」

エディの問いに頭を振るとアイラは枝先で絵をかき回す。そしてまた別の絵を描き始める。

彼女は絵を描くのが好きだ。入院している間もスケッチブックに色々描き残している。

その絵はどこか独特なものがある。それは押し詰まった何かをスケッチに溢れるように表現しようとしながら、今一步技量が足りないもどかしさの中で生まれたものであった。

「かぶと？」

新しく描かれる線に注目する。黙々とアイラは絵を描く。エディはその完成を待つことにする。

今日は定例の読み聞かせ会があるのだが予定の時間より早く訪れていた。待つくらいなんてことはない。

車椅子のフロリーの方を伺うが特に問題はなさそうだが、思い直し寒くないかと足に毛布を広げてかけて戻った。

アイラの枝先は黙々と線を描いて形を作っていく。鎧のような姿に頭は兜。大昔の騎士のような姿。その姿はMHの姿に酷似している。

もーたーへっど？

エディはその絵のシルエットを見つめる。そのとき視界がかすんだ。

気のせいかとエディは頭を振った。

なのに青い騎士の姿だけが浮かび上がる。微妙なタッチの輪郭がぼやけていた。剣を持った青い騎士が妙な厚みを持ってエディへと襲いかかってくる。

非現実な妄想。そう片付けるには現実感がありすぎた。それはただの砂の絵のはずなのに。

足は動かない。

脳は危険信号を発する。

危険、危険!!

どうして、どうして？

後ずさろうとした足を砂が呑み込んだ。

ああ、砂が足をさらっていく。

グルグルと世界は回る。

エディは立つのも辛くてふらつく。



ノイズが圧迫感となつて襲つてくる。

これは何？

『回避不能っ！』

『脱出しろ！』

自分の声と叫ぶ男の声が重なつた。

青い騎士がスローモーな動きでだんびらを振りかざす。

その動きはわかっているのに回避することができない。

砂が足を魔物のように呑み込んでいる。

衝撃と飛び散る血。

灼熱のエンジン音。

弾け飛ぶ装甲。

真つ暗になる視界。

壊れるのはわたし——

「や……だ……？ 死んじゃうの……ダメ……ワタシ」

自分でも何を言っているのかわからない。それつが回らない。見えているのに現実感を失つた地面。自分がよろめいているとわかる。

太陽と建物が作り出す光影が交差する。

誰かが自分を揺さぶっている。その現実感にひどく混濁していた意識がゆっくりと周囲の状況を知覚させていく。

「エディさん、大丈夫？」

肩に回された手。それは院長夫人の声だ。その声にエディはようやく自分が倒れていたことを知る。体を支えているのは院長夫人だ。

「私……何で？」

「どうしましょう。ここには医療施設はないの。ドクターを呼ばなくては」

「平気……です。立ちくらみ。想定外のエラーです。もう治りました」

何でもないと告げてどうにか立ち上がった。アイラがエディを見つめ返す。その大きな瞳がこわごわと見つめている。

心配されているのだと感じた。

「大丈夫？」

「うん……」

エディは地面に目線を落とす。そこにはもう青い騎士はいない。そこにあるのはただの線で描かれた砂絵に過ぎなかった。

吐き気とわずかながらの不快感が残る。体調はもうなんともない。

「ダメなら今日は中止しましょう。大事があつてはいけませんから……」

「平気……です。みんなとの約束は守ります」

「でも……」

院長夫人に再度問題ないと告げる。「大丈夫なのね？」と念を押されるが意志は変わらない。

ここに來た目的を果たさなければ。今のはただのエラーで今はなんとも無い。エディはそう自分に言い聞かせる。

あれは私の中にある、私ではない誰かの記憶だ。だから怖くない。現実であつたとしてもそれはもう終わったことであるはずだからだ。

今日はフロリーのリハビリも兼ねていた。アイラの様子を見るのもだ。これはお父様に言われたからではない。自分の意志で決めたことだ。

ならず者の騎士によって両親を奪われた少女。自らの躊躇いで暴行をその身に受けた。エディの中にあるのは罪悪感だつたといえる。

お父様は、気にするな、お前の責任ではない、と言つたが。けれどエディの中でそれが消えることがなかった。

己の選択が罪もなく親を殺された少女を傷つけた。その罪悪はエディの犯した罪ではないとわかつていても、人の前で感情を現すことを禁じられた人形でも後悔を打ち消すことまではできなかつたのだ。

「アイラ、お水を持ってきてちょうだい」

「うん」

戻ってきたアイラが差し出した水を受け取る。

「どうぞで」

「ありがとう」

そして何か言わねばと今日の目的を告げる。

「今日は絵本を持ってきたの。みんなに読んであげるからお部屋に入りましょう」

「うん……読んで」

アイラは頷くと素直に建物の中へ戻っていく。

これは絵本作戦です。アイラは絵本が好きなのです。みんなも絵本は大好き。こんな私が詠んでもみんなちゃんと聴いてくれます。

そのために私は来ました。

「アイラはあなたには懐いているようね」

「そう、ですか？」

あまり懐かれているという実感はない。

アイラはボオス星移民の子孫だ。このシユロの成立に一役買った一族であるらしく、かつては巫女として聖地ラーンで詩女に仕えた者の末裔なのだという。

町そのものがカラミティを含む各星の移民が作り上げたものだ。それゆえに民族色がいくつも交じり合った文化が残っている。

このセント・モルガナの建物も移民が造った異国の建造物である。

院長夫人を見るとニッコリとエディへ笑い返してくる。彼女はファティマだからと  
いつて態度を変えるようなことはなかった。

むしろ、普通の女の子のようにエディを扱うので返ってやりにくいこともある。

エディとフロリーは子どもたちのいる部屋に入る。彼女を連れてきたのは、例え話す  
ことがわからなくても少しでも人がいる場所にいた方が良いと思ったのだ。

朗読するのは何度も練習したけれど、これだけ多くの人に聞いてもらうのは初めての  
ことだ。ドキドキはするけれど嫌なことではない。

これも自分でやると決めたことだ。

先ほどの体調不良はもう大したこともない。一呼吸吸い込んでからエディは言葉を  
紡ぎだす。

「むかしむかしのある日のこと——」

エディが選んだのは白馬の物語だ。表紙の赤い草原と白馬の絵がある絵本。先日、エ  
ディとパルスエットが選んだものだ。

親を亡くし、孤児となった仔馬が人に拾われるところからお話が始まる。

仔馬は同じ境遇の少年と出会い、仔馬と少年は共に育っていく。やがて仔馬は立派な白馬に、少年は大きな体を持つ青年となった。

馬と少年との友情。

運命のレース。

別れと再会。

そして終焉まで。

その間、とうとうとエディの朗読が続く。子どもたちはエディの一句一句を聞き逃さまいとジーンと動かない。

最後のおしまい、という一言で持って締めくくると、室内にようやくざわめきが戻ってきていた。

エディを静かな興奮が包んでいる。途中、子どもたちの反応が沈黙に変わったとき失敗したのだと思った。でも、終わってみればみんなに笑顔が見えた。

お話のおかげだ——ほっとしてエディは絵本を抱きしめる。

小さな手が伸びてエディの腕に触れる。目の前にアイラがいた。エディに初めて見せる意思のこもった行動だった。

「面白……かったよ……」

「この本ね。アイラに上げようと思って持ってきたの。気に入ってくれた？」

「うん。いいの?」

戸惑いがちなアイラに絵本を差し出す。

「どうぞ?」

「ありがとう……」

おずおずとアイラが絵本を受け取る。贈り物はアイラにだけではない。孤児院の子に上げようと館から沢山の絵本を持って来ていた。

大量の絵本を見て子どもらが歓声を上げる。本を手にとってはみんなで見せ合いっこをしていた。

配り終えた達成感の後、アイラがフロリーの側にいるのを見つける。周囲ではみんなが絵本に見入っていて二人を気にかける様子はない。

「アイラさん?」

エディが後ろから声をかけるが気が付かないのかアイラはフロリーから目を離さない。い。

不思議と大人びたアイラの瞳がどこか今ではない時を映し出す——その口から漏れるのは預言の言葉のようであった。

「今ではない時……砂塵が吹く五匹の龍の住む地……あなたは再会する……機械じかけの踊る人形……よこしまな牙は砕かれ……あなたはもう一對の牙を駆る……天馬(グラ

イフ」と出会い……そのとき……あなたは、すべてを思い出す……」

その瞳に映し出される風景は今ではない未来のどこか。

両肩に巨大なアギトを持つロボットと「踊る人形」を冠したロボットがぶつかり合う光景——そしてもう一対の獣……

言葉を発した後、アイラは体を震わせると柔らかい絨毯に膝をついた。幻影から開放され呆けた顔になる。そして小さく息を吐きだした。

アイラの宣告に感情を見せなかったフロリーの睫毛がかすかに動く。そのわずかな揺らぎはすぐに消え去っていた。

「……ん？」

あどけない幼い顔に戻ったアイラが不思議そうに周りを見回す。

今しがた、何を話したのかも、何をしていたのかも思い出せなかった。自分が観たものが何であるかもわかっていなかった。

◆ ただエディのみがその不思議な宣託を聞いていた。

「その荷物はここに置いて。バイパス・チューブはすぐ使うからそこに開けておいて——」

快活な青年の声が広い空間に響き渡る。作業員がドローリーから運搬物を下ろし荷物



の封印を解いていく。

ルーフイヨンド館の地下は主に倉庫として使われていたが、実際には工場として機能するだけの設備を兼ね備えている。

MHを組み上げることのできる施設であり、いったん稼働させれば、傭兵騎士を相手に商売する町工場並か、それ以上の施設と道具を扱うことができた。

そのための人員は今は十分なくらい揃っている。

辺境の城でこれだけの設備があるのもデルタ・ベルンのA・K・Dから投資を受けているからだった。

一つの惑星を丸ごと支配するA・K・Dでもカラミティの周辺諸国に対する国際的な発言力はこの地では全く及ばない。

現在は自治領主を置き独立都市としてあるが、過去はA・K・Dの飛び領地であったこともある。自治領主を置いてからは騎士団と呼べるものは置いていなかった。

原則、A・K・Dは紛争には不介入という立場を通し、シユロはサロモン・ルイ・ミツテラン子爵が支配権を持っていた。

アマテラスが城の地下に地下工場を建造したことを知る者は少ない。知るのは当の本人と何人かの関係者のみ。そして城の領主のみだ。

それも極めて私的な興味で建造されたことを知るのは本人のみだ。

ソーブが連れて来たエンジンニアは生粋の技術者で政治のことはまったく知らない。皆、彼が選んで連れて来た者たちだ。

人手がなくては工場も稼働はしない。ここ数年程は静かな空間となっていた。城にあるモノが持ち込まれるまでは――

何人ものエンジンニアが梱包された包みを解いていくのをソーブが見守る。亜麻色の髪が照明の光に輝きを返す。

モーターヘッド・マイスターとしてその名を継承する存在。その名を持つのは唯一人だけだ。しかし、今のところの「彼」はまだ世に名を知らしめてはいない。

それが意味するところを世間の人々はまだ知る由もない。彼が何者であるのかを。

「快適、快適。うるさい連中もここまでは文句言つてこないし！ ライムと老クリサリスの鉄壁ガードをかわして、ルスは何とか誤魔化せたし。ふふーん、誰であるーとボクを止めることなんてできないんだぞつと！」

腕を組んでご機嫌に笑うソーブ。

足りなかつた人手はデルタ・ベルン本国から連れて来た。口も堅いしボーナスも弾む予定だ。

カラミティに星団法すれすれにこつそりと持ち込んだ代物はMHのパーツにエンジンと上げれば暇がない。

規格外かつ国家機密レベルのものを堂々と運べばいらぬ注目の的になる。

それを持ち込むための準備をばれないようにしてきたのだ。その集大成となる組み上げの段階までやつとこぎつけたのである。

それも、ひとえにこつそり抜け出すという行為を正当化するためだけにだ。そこに少しばかりのストレス発散が込められていることは否定のしようがなかった。

そのとき、ソープの目を後ろから塞ぐの女の手があった。

「だーれだ？」

「ん？ えーと、もしかして……」

「アイシャちゃんどえくすっ！」

「げげっ!? どーして……なにがあつたのかな?」

ソープは振り返るがアイシャの惨状にどう形容しようかと悩む。

ゆったりタレ目の美少女はここに辿り着くまでにテンパ状態のヒッキースマイルとなっていた。

その経緯は、シャトルバスが爆撃炎上して犯人を捕まえそこなり、シユロまでの数キロを歩いて来たわけである。

「ソープ様っ! ソープ様あゝ〜!」

「ちよ、みんな見て……」

アイシャの嬌声とスープの悲鳴がこだまして何事かと周囲の注目を集める。

ここまで辿り着いたら仮名のサンドラ・イルケはかなぐり捨ててアイシャ・コーダントとしてスープに甘えまくるつもりで来たのだ。

アイシャはコーダント家のお姫様でその跡継ぎである。あばずれ的な性格が災いしてか、いまだに夫はいない。

といつても学生の身であるので、両親からの結婚話などかなぐり捨て、あげくに家出までしていた。

バランシエ邸でメイド修行をしてはセクハラしてくる親父どもにキックをかます毎日を過ごしていたのだが、それにも飽きて不満の日々。

常々、アイシャに関しては問題のある行動と発言が横行しており、コーダント家の大事に成りかねない娘でもあった。

ついでに相性の良いフアティマもないのか、充てがわれたフアティマを難癖をつけては何度も病院送りになっているという札付きのワルである。

周囲からは、夫はまだしもフアティマすらいないので話にならぬと、嫡子問題にまで踏み込んだ内容で周囲を悩ませている状態だ。

つまるところ、アイシャ・コーダントは問題児でスープ様が大好きということであった。

ソープはここまでの経緯の情報をアイシャから受け取る。

「——ミミバ？ ボオスのらっぱがこんな場所にいるか……」

アイシャからの情報はこれまでの辻斬事件における隠されたボールの部分であることは間違いないかった。

鋼鉄の巨人の装甲が光を照り返している。それを眺めながらアイシャは記憶を辿る。どこかで見たことがあるような気がした。

「ああ、これが新しく作ってるモタヘ？ あれ、この型（タイプ）、どつかで見たこと……」  
「ようやく形になったしね。何せ、全部分解して、パーツ別にしてからこつちで組み上げたんだもの。フレームは元々置いておいた予備が役に立ったし」

「フロート・テンブルに置いてあったやつですの？ ホーンドとは基本骨格違うし」  
「開発はバランスシエのところで試験作を何度も運用していたからね。今回ここに運んだのは試験のためじゃないのさ。うち（A・K・D）の膝元じゃうるさいのが多いしね。こなら、誰にも文句も言われないから」

国家予算級の資金が動いているのは間違いないのだが、それすらも個人資金のポケットマネーで動かせるとなれば話は別だ。

どれほどの金持ちであろうとも、ただの遊興にこれだけの金を動かせるわけもない。それができるのが並外れた感覚の目の前の人物だけである。アイシャ・コーダンテの

突拍子のなさも可愛く見えるレベルだ。

「スープ様……戦争でもやるおつもりですか?」

「実戦テストをしようと思つてね。近頃、噂の辻斬りがいる。そいつを狩るんだ。こいつのお披露目代わりさ」

「本気……!? 組み上げたばかりのモーターヘッドで? 乗る人ヤバイ……」

ジト目のアイシャ。それをスープは笑つてかわす。

「何にせよ連中は尻に火が付いてる。ミミバと連絡も取れなくなつただろうしね。あぶり出すのはウモスでもクバルカンでもいいんだけど、ここまで来たんだもの。こいつの活躍を見てみたくないかい?」

「スープ様のモーターヘッドですものそりや負けるなんてありえないし……?」

「こいつにはまだ騎士がいないんだ。君が乗つてくれれば怖いものなしだ」

「うええ? あたし!? 無理、無理無理! だってファティマだつていないもの」

デルタ・ベルンの問題児。

ファティマ病院送り常習犯。

夫などいらぬと突っぱね、後継者など作るつもりなし。

今回も反省を兼ねた名目でメイド修行中だったバランシエ邸からとんずらこいてスープの後を追っかけてきたのである。

国元もアイシャ・コーダントの行方を巡って騒動になっているかもしれない。

両親が聞いたら激怒すること間違い無しだ。

ここでさらに問題を起こしたら、コーダントを廃嫡になってもおかしくない不祥事になるかもしれない。

「あたし、すつごいドジだし。ファティマだって上手く扱えないし……」

「バシクとは問題ないだろ？」

「そりゃ、問題無いですけど……」

アイシャのおくれ毛をソープがいじる。

バクスチュアルとは相性そのものはあまり問題ではなかった。開発ファティマとしてのバクスチュアルの能力は飛び抜けているといえる。どのような乗り手であろうが最高の性能を発揮することができる。

バクスチュアルそのものがA・K・Dの最高機密だ。ゆえに外の世界にその名前が出ることもない。

さすがのアイシャもバクスチュアルを粗暴に扱うことはない。

アイシャに求められているものはコーダント家の嫡子としてのあり方だ。騎士として、王族としての義務と、王族の子孫を残すという務めを果たさなければならぬ。

その重責はまだ学生にすぎないアイシャには重いものだ。

国を背負うということをわかっていながらも、こうして破天荒に投げ出してしまったくなる。

「アイシャならできる。ファティマが苦手なら克服すればいい。君なら彼女から「マスター」と呼ばれる騎士となれる。絶対にね」

「本当に？」

幼い娘のようにしおらしくなったアイシャが顔を上げる。

ファティマは人の信頼関係などを前提としない独特の基準でマスターを選ぶ。強い騎士に惹かれるのはファティマのDNAといえる。

アイシャがこれまでファティマを「選ばなかった」のはそうした常識から目をそらし続けてきたからといえる。騎士として失格な考え方なのはわかっていた。

「結構変わった子だね。モーターヘッドが苦手らしい。たぶん、君と似た者同士だよ」

「それじゃ、あたしがケツをひっぱ叩くしかないじゃない。ソープ様はイジワルです」  
「はは、そうだね」

笑ったソープがアイシャの髪を撫でてMHを見上げる。かつてはウォータードラゴンと呼ばれたその騎体を――



## 【10話】契約の言葉

「さあ、徹夜で仕上げるぞ〜〜！ みんな、頑張るよ〜〜！」

張り切るソープに整備班一同が動き出す。無茶な主の要求も腕の振るいどころだとA・K・Dが誇る最高のスタッフたちも張り切っている。

レディオス・ソープが手がける星団最高のシリーズ。その初お披露目となるであろう騎体。最強のMHに最高のフェアティマを載せ、選ばれし騎士が正義を成す。

そんな戯言のような言葉が国家そのものを動かす。デルタベルンの天照帝（アマテラスのミカド）にして、MHマイスター・レディオス・ソープという存在がだ。

それを見守るアイシャは少し前のソープとのやり取りを思い出す。

「エストと黒騎士がなぜ強いのか知ってる？ あれはね、バツシユにフェアティマ・エストが組み合わさると最高の性能を発揮するように設計されているからなんだ。もちろん、騎士との相性が一番重要なんだけどね。こいつにはあれとほぼ同じシステムが組み込まれているんだ」

「同じ？ でも、エストは突然変異のようなものだったと。モラード博士も論文でそう認めていたと思いますけど？」

「ルミラン・クロスピンとモラード・カーバイトが組んで作り上げた最高傑作バッシュとエスト。世紀の天才二人を結びつけたのは実はコークスだ。コークスはこれまでに五人のファティマを生み出した。その五人のファティマたちが誰かわかるかい？」

「コークス博士の生み出したファティマはすべて照会不能じゃなかったかと……公的に存在するのかさえ謎ですよ」

「そう……記録はボクが消した。コークスの五人目のファティマが生まれたのは彼がアカデミーにいた頃の話だ。彼の前に天才モラードが現れ、当時のクロスピンとコークスが進めていた研究に加わった。けれどコークスの研究を完成させたのはモラードだった。コークスはモラードに主役の座を譲りアカデミーを離れた。それだけ聞くと弟子に先を越されたように聞こえるけどね。実際は名声にはとんと興味のない男だったし。そうしてコークスは研究から退いた。彼の五人目のファティマは元のデータを書き換えられた。普通のファティマとして一人の騎士の元に嫁ぎ、そして死んだ」

「死んだ？」

「コークスは死んだファティマの脳に埋め込まれたプログラムを元に人格を再構成した。まったく異なるファティマとして甦ることとなった。それがエディという少女だ。彼女のためにこいつを組み立て、それに君が乗るといっわけ」

「ソープ様、飛躍しすぎです！ 乗るなんて言ってますから！ それにそのファティ

マ、ソープ様にモタヘなんか嫌いだって言ったんでしよう？」

「まあ、ちよつと変わっているよね。コークスも昔はバランシエに深く関わってたらしいから、性格的にそういうところあっても不思議じゃないよねえ」

「これまた、めんどつちそーな……」

「それはいいとして、エディにもシンクロナイズド・フラッター・システム（S・F・S）が組み込まれているからね」

「エスト争奪戦の引き金になったアレですね」

それは血みどろの争奪戦として星団史に刻まれる事件だ。エストを巡り騎士同士が争い、心労でクロスビンは倒れた。

「黒騎士バツシユとエストに組み込まれたシステム。おそらく、単騎では星団最高の性能を誇るだろうね。バランシエがモラードを買うのがよくわかる。黒騎士とエストが公開されたときの騒ぎはなかなか忘れられない」

「心労が重なったとも、暗殺されたとも言われていますね。その後、モラード博士もエストや黒騎士とともに姿を消したと」

「新たな黒騎士を得るまでエストは表舞台から消えた。でも、騎士を得れば話は別さ。彼女はコーラスの元へ行き最高のパートナーを見つけ出したんだ。思えばコークスは退くことで自分とファティマを守ったのだと言えるだろうね」

エストの話とコークスのその後にはアマテラス帝も少なからず関わっているのだが、ソープはそこまでは語らない。

「エストが完成した後、エディに搭載されたプログラムは凍結された。そして六年前、彼女は死んだ。そしてコークスがこの城で再生させた。こんな変わった経歴のファティマは他所ではお目にかかれないだろう？」

「はいはい、そーですわねえ」

「瀕死の娘を蘇生させ、死んだ脳の代わりに凍結させたシステムを起動させたんだ。結果的にエディという人格が生まれた。あれはね、エスト同様ファティマの可能性を大きく秘めた存在なんだよ。そしてここに君がいる。ボクが君を選んだ。黒騎士と対になるモーターヘッドとファティマを使いこなしてご覧よ」

それは挑戦である。それ以前にファティマがアイシャ・コーダンテを選ぶかだ。

「でも……」

「これはボクのただのわがままさ。彼女に選ばれないなんてことはないと思うけどな。もつと自分を信じなさい」

アイシャの頭をポンポン叩いてソープは微笑む。

「ソープ様はすごい。いつも自分一人で突っ走って。でも許してあげます」

「かわいいボクのアイシャ。君ならできるよ」

「それより辻斬りの情報をくださいませんか？ 例のミミバも絡んでいることですよ」

「奴の太刀筋は鋭く、獯猛だ。対峙したモーターヘッドはすべてが一撃で屠られている。倒された者の中にはかなりの腕前の者もいるしね。腕は天位にも届くかもしれない」

「天位……」

俗に天位とは強い騎士に与えられるものであるが、その基準は定かではない。今では形式的なものともなつてもいる。

天位だから最強というわけでもなかった。もつとも前提からして強力な騎士には違いない。

国の代表的な騎士が天位持ちであることもある。いわば、ただの称号でしかないのだ。

真に強力な騎士の最高位は劍聖の名を持つ者だ。一つの時代に劍聖は一人と定められている。

劍聖デイモス・ハイアラキの跡を継いだのはダグラス・カイエンだ。

そのカイエンはこの時期は表舞台に姿を現しておらず、劍聖を預かるのは宝冠をかぶった劍聖慧茄（エナ）だった。

「ヤツを追いかけているウモスの騎士団もそろそろ大規模に動きそうだよ」

「あら、私の出番なんてなさそうじゃありませんこと？ ウモスも面子丸潰れで躍起になっっているでしょうし」

「うん、そうだね。だから間に合わせたいのさ。徹夜。フル回転しないと間に合わない。君はお姫様を口説いてきなよ。せっかく組みあがっても、乗るファティマがいないんじゃない格好がつかないだろう？」

「はあ……」

「ほら、行った、行った。今からここは部外者は立ち入り禁止だよ。バシクには悪いけど、彼女には生まれたての赤子をあやす役をやってもらう」

……

……

…

「さ、行きますか」

正装した襟元を正してアイシヤは地下工場を出た。そしてファティマが待つ契約の間へと向かうのだった。

◆

「You seek your next! (新たな主を探せ!)」

ルーフイヨンド館の一室でエディの額のクリスタルに当てられた骨ばった指先が離れる。

エディは閉じていた黒耀の瞳を開く。その双眸はわずかにうるんでいた。

ヘッドクリスタルのコンデンサが情報を正しく認識し、処理をし終える。仮のマスターとしての解除が行われたのだ。

『契約の解除を確認……』

エディは手を胸に当てて周囲を見回す。そばにるのはお父様。少し離れた窓際に車椅子のフローラとアイラがいる。

大きな扉の近くに騎士が数人いた。その騎士らはA・K・Dのゴーズの騎士だ。この場の見届けのためにソープが連れてきた騎士たちである。

これからお披露目が行われるのだ。極少人数のお見合いである。

突然決まったことだ。エディにはまだ戸惑いがあった。

お父様に告げられたのは、「これから、お前のマスターの選定をする」という宣言だけだ。

ファティマのお披露目にはいくつかの形が存在する。

最小のものが、ファティマとマスターとなる人物に加え、騎士クラスの人物三人による見届け承認の形を得るものがあつた。

最低限の見届け制度だが、星団法で認められたれっきとした選定のルールだ。

お父様はもう「仮のマスター」ではない。ファティマにとって、マイトは父であり母である。その庇護下を離れるということは、誰かに嫁ぐ準備が整ったということでもある。

お父様が変わりはないが、ファティマにとって最も優先すべき対象ではなくなった瞬間だった。

エデイが再起動した日からお父様はずっとエデイのマスターでもあった。ダムゲートでも制御しきれない胸の内には少しばかりの寂しさが残る。

「主（マスター）を選んで来い。相応しくなければ振ってこい。お前にはその権利がある」

「でも……マスターを選ばなかったら、わたしはホントの役立たず……」

「誰がお前が役立たずだと言った？ 城の者か？」

「いえ、そうではなく……もし、マスターを選ばなかったら……」

お父様の立場に泥を塗る事になる。廃棄対象のファティマなどこの世界では何の価値もない。

「エデイ」

「はい」



コークスの声にエディは頭を上げて応える。

「ならば、わしのところにいればいい。人手ならばいくらでも欲しいところだ。ここも年々、年寄りばかり増えよる。寝たきり連中を起こすのも面倒だ。いまいち不器用で頼りにならないが、助手の手はいくらでも欲しいからな」

「お父様……」

「行つて来い。お前に相応しいと思う者を選べ。出来の悪い娘が嫁ぐのを見るのもこれで最後にしたいたいもんだ。アマテラスの部下を全部袖にするというのも悪くないがな」

ふと、コークスの目に感情の揺らめきのようなものが走つて、すぐに消える。抑揚のない声は感情を抑えたものだ。

そう感じ取り、エディは感情を洩らさぬ声で、はい、と告げて返す。

「A. K. Dの騎士では不足か？」

「いいえ……」

エディは小さく首を振る。よくわからない。この場にいる騎士全員がマスターの対象となる。

契約に必要な見届け人は揃っている。ここにいる騎士の誰をマスターと呼んでも良いことになっている。

実際には誰でも良いわけではない。ファティマが戯れに主を選ぶことはない。

それは本能であり、強い騎士の血と相性から決まるのだ。どちらが優先されるかはフアティマの性質によるところが大きい。

仮のマスターを得ているとき、フアティマはその本能の一部を封じられる。

フアティマがマスターとする対象は原則一人であるから、より相性の良い騎士と出会ったとしてもマスターを乗り換えるということはありません。

フアティマが生まれた頃は複数のマスターに仕えることもあったが、相性の良いマスターを選ぶことで能力を上げるフアティマの性質から星団法でマスター選定の基準が定められていた。

すなわち、フアティマ自身でマスターを選出する。

「モーターヘッドは怖いか？」

「……」

「お前に施されたダムゲートは特殊なものだ。真のマスターを選び出したとき、お前は本当の自分の姿を取り戻す。お前の中にある記憶は開放される。今のお前はその人格に蓋をする存在だ」

「本当の私……？ 記憶……」

造り物の人格……やはり私はいらない子？

「今のお前も私の娘だ。それは変わらん。だが、変わることを恐れるな。その選択もお

前の意思で決めろ」

エディの頬にグランの手が触れてわずかに撫でた。無骨で骨ばった手だ。

その手に自らの手を当てて頬に感じる。年老いたその手は無愛想だが温かい。

「お父様？」

「答えはお前自身で見つけろ。主を得るか、留まるか。選ばずとも誰も咎めん。お前が今のお前のままでいたいと思うのであれば、そのままであれば良い。わしにしてやれることはもうない……」

お父様……

エディは振り返る。扉の前にいた一人の女が進み出る。立ち振舞いから立派な騎士であることはわかった。その後ろからゴーズの騎士が続く。

五歩ほど手前で女騎士が立ち止まると騎士たちも止まる。女騎士がおごそかに宣言を述べた。

「星団法に則り、正式な見届けの騎士の立ち会いの元に選定式を行います。ファティマ、エディよろしいか？」

「はい……」

胸が高鳴る。四人の騎士がこの場にいる。お披露目ともなればもつと盛大に貴賓の貴族や見物人で賑わい、ときには一〇人以上の騎士とも対面する。

そんな華やかなお披露目ではないが、相手はA・K・Dの騎士である。後ろ盾は十分であるといえた。

「クリサリス公、前へ」

「ゴーズのレオパルト・クリサリスです」

エデイの前に進み出たのは若い騎士だ。優しげな風貌で物腰に気品が感じられる。王侯貴族といっても通じそうだ。

この人……強い。クリサリスを前にしてエデイの心拍数は途端に跳ね上がる。

それを理解できるのはファティマの本能からだ。ファティマには強い騎士を求めるプログラムが組み込まれている。そして、その本能に抗うことは難しいことだ。

騎士の実力だけではない。ファティマとの相性も優先事項に含まれていた。

面識があるのに関わらず、ファティマは初対面であつても、自分に相応しいマスターを選別する能力を持つ。

また、友情や情愛よりもそれは優先されていたから、個人的な好き嫌いでマスターを決められるものでもない。

理想のマスターを求め、MHを動かす完全な部品として在ることがファティマの存在意義である。与えられた役目を果たすためにファティマはマスターを選ぼうとする。

そこに一切の例外はなく、すべてのフアティマはその本能に従ってマスターを選ぶのだ。

クリサリスを前に胸の内が昂ぶるような感覚に包まれる。その感情がどのようなものであるのかを言葉で説明するのは難しい。

そう感じ取れるのも契約が解除されたからだ。お父様の施したプログラムが解除されたことでエディの本能が開放されたのだ。

だが、ある言葉が出てこない。強く理想的な騎士が目の前にいるというのにエディの中である言葉が出てこない。

マスターという――

エディは俯く。どのような言葉を発すればよいのかわからない。

やっぱり、私は壊れている？

「あちやちや 振られたみたいね。本命のつもりできたんだけど」

真顔のクリサリスの隣で髪をかきむしるのはアイシャだ。

ただ、申し訳なくなつてエディは頭を下げる。

「クリサリスでダメなら他の二人でもダメかな？ あなたたち、クリサリスを袖にした子のマスターになる自信あるかい？」

アイシャの振りに後ろの二人が苦笑いする。彼らは元より見届けのために来ただけ

なのだ。何せ、クリサリスに至っては任務だと騙されて連れて来られた口だ。

「こほん、しきたりに則れば最後はアイシャ様の番です。この場にいる騎士でファティマなしは貴女だけですのぞ」

「わかつてるつてば……」

クリサリスを睨んだアイシャが前に進み出てエデイの前に立つ。長身の女騎士をエデイは見上げた。

何だろう……頬が熱い。フワフワしてるみたい……ドキドキも何だかすごい。

さつきとは違おう？

頬にかかるほつれ髪を耳元にかける。照れ恥ずかしさがエデイはの顔を伏せさせる。

「えつと、エデイ？」

「はっ」

名を呼ばれただけで、ドキ……ドキンっ！ と鼓動が波打ち始める。それは衝動的な発作のようにエデイの胸の奥を揺らす。

わ、私、どうしたのっ!? こ、壊れてしまったのっ?!

頭の中がこんがらがってショートしそう。これはまるで、恋するという気持ちのようだ。まともにアイシャの顔を見るのも難しい。

先ほどのクリサリスに感じたものに近いが、より一層激しかった。

頬が熱くなりすぎて朦朧としそうだ。動悸で胸が苦しくなる。

フワフワと熱に浮かされたようになっていた。立っているのかすら怪しい感覚。

恥ずかしさにいたたまれなくなつて、もじもじと靴の踵をすり合わせる。無作法だが気が動転していた。これほど動揺することなど滅多にない。

それに……ダムゲートがまったく働いていなかった。

あうあう……ダムゲートどうしたの？ お仕事なさい。肝心なときに動かないんだから。

「ふ、ふにやらあゝ〜」

自分でも分けの分からない声が出る。気の抜けた熱い吐息を吐き出して、何とかクルダウンしようとする。

そう、これは……本能なんだ。そしてこの人は私——

熱で浮かされたようにエディはアイシヤを見つめる。

「あー、仮でもいいーんだよね。あたしは別にファティマとか……」

「往生際が悪いですね。アイシヤ様にファティマが反応しているというのに」

アイシヤの横でクリサリスが真顔でやり返す。

汝、この者をマスターとせよ——

ぞわり……何かがエディの中で嘔く。頭の中で電子光がきらめいて弾く。その単純明快な指令は記憶回路を刺激し続ける。

耐え難いまでの欲求がエディを突き動かしていた。

「仮……ではなくては……ダメですか？」

ああ、そうよ、そう！ 彼女は仮で収まる器じゃない——

その声はエディに嘔き続ける。

そうだ。この人こそが相応しい、私だけの本当の——

覚醒したもう一人の知らない誰かの意識がエディに混じり込む。

エディはようやくやく悟る。ああこれがもう一人。いや一人ではない複数の私がいる。

このときのために「私」は眠っていたのだ。のんびり呆けていたのは仮人格の私。今の「私」が自分自身なんだ。

エディの黒耀の瞳が感情の色合いを強く帯びて輝きを放つ。

「どうか、騎士様……私の手を取ってください。そしてどうか、マスターと呼ばせてください……」

これまで大人しかかったエディの雰囲気に変化が訪れる。アイシヤはスイッチで中身が入れ替わったような印象を目の前のフェアティマに感じていた。



まるで別人のようだ。

今のエディからは普通のファティマとは違う品と格のようなものが漂っている。

廃棄寸前などともんでもない。一流と呼ばれるマイトの作り上げたファティマなどに共通する何かがあった。

アイシヤはソープの語ったエディというファティマの真実を目の当たりにする。

「私でいいの……かな？」

「はい……」

その問いにエディは小さく頷いてみせる。

「何をぼさつとしている？ ファティマがお前を求めているのだぞ？ 小娘のような反

応をするな。A・K・Dの王女だろう」

見守っていたコークスが横から口を挟んだ。「見てられん」と言い捨てた後に二人からそっぽを向く。

「……頑張つて」

その隣でアイラがコークスの手を握りエディに手を振った。

「おっさんが横から口だししないですよ。まったく、雰囲気無しじゃない。エディ、あたしについてきなさい」

アイシヤの指がエディのクリスタルに触れた。それは騎士がファティマを娶る動作

である。

「イエス……マスター・マイロードっ!!」

エディはトリガーを解き放つワードを開放する。それは歓喜となってエディの感情を大きく揺さぶった。

瞳からは無意識の涙をこぼさせる。その言葉は最高の相性を持つ騎士に送られる  
フアティマからの契約の台詞だった――

## 【11話】騎士の誓い／起動

バーテローの駐屯地でミハイル・レスターが訓練に励む。

ミハイルに命じられたのは待機の命令とわずかばかりの休暇だった。これ以上の辻斬り事件の捜査は本来の任務から逸脱したものであるとの通達を受けての休暇だ。

上役に食つてかかった所でミハイルは己の立場を思い知らされる結果となった。

バルⅡバラと呼ばれる獲物が空を切り、標的に命中した後に戻つて地面に突き刺さる。それを拾い上げたのは鍛えられた硬い手だ。

「外れたか……」

同期のフィスが得意とした武器であった。ミハイルはいつも競つては負けて奢らされていた。そのフィスも今はいない。

バルⅡバラを拾い上げると獲物の具合を確かめる。状態は問題ない。再度、標的までの距離を測ると投げ放つ。

高速で回転する獲物が、今度は狙いを外さずにかかしの胴体を真つ二つにしていた。分断してなお勢いを持ったバルⅡバラが旋回して予測した地点に突き刺さる。

「戻るか……」

それを拾い上げミハイルは宿営地に顔を向けて歩き出した。

バーテローの騎士団駐屯所に戻ったミハイルを兵舎から出てきた騎士が呼び止める。尋ね人が来ていた。誰かと迷ったが、詰め所の小屋に入ると中年男がミハイルを出迎えた。

その青銅騎士を表す肩章にミハイルは敬礼で返した。ここの上役よりも上の人間が自分に用とは何であろうか。

「お前がミハイル・レスターか？」

「私がそうですが？」

「俺はオリバー・メツシュだ」

その名前には聞き覚えがあった。オリバー・メツシュはウモス騎士団の青銅騎士の中队長を務める人物だったと記憶している。

つまり、実戦部隊のエリート中のエリートだ。その彼が自分に何の用事があるというのだろうか。

差し出された手に握手を返す。ミハイルはこの訪問者の意図を量りかねてメツシュを伺う。

ミハイルが所属するバーテローの駐屯騎士団は中央の青銅騎士団の指揮管轄下にはない。わざわざ、ミハイルを尋ねてくる理由がわからなかった。

「明日の日付けを持って、バーテロー駐屯騎士団は俺の指揮下に入る」

「はあ……」

すぐにピンと来た。中央が辻斬り事件に介入することを決定したのだろう。

国境付近での辻斬り多発。あざ笑うかのように犯人は拿捕の手を逃れ、逆にこちらが手痛い目を受け続けている。

国家の威信に関わる問題だった。六年前のレスターの不手際はウモス側の手抜きとして非難を浴びるきっかけになっていた。

いずれ乗り出してくると思っていたが、介入に訪れたのがオリバー・メツシュというわけだ。

「お前のことはホランから聞いている。腕のいい騎士だとな」

「恐縮です……」

「レスター、ホランは俺の義理の弟だ」

「っ!？」

ミハイルはオリバー・メツシュを見つめ返す。すぐに失礼だと視線を外した。

「そ、そうでしたか……」

「お前に辞令がある。ミハイル・レスター。青銅騎士団への再編入を行う。辺境任務を解く。これから中央へ戻れとのことだ」

「そ、それは……しかし、今の任務は……」

青銅騎士への復帰。任務の解任。その意味すること――

「俺らと入れ替わりだ。復帰、おめでとさんだな、レスター」

「は、はい……」

肩を叩いたオリバーの声をミハイルは上の空で聞いていた。

想定外の辞令。青銅騎士の叙任。喪われた名誉の回復。それは求めていたもののはずであった。

だが、胸中に沸き上がってきたのはこれでいいのかという想いだ。

それは重くのしかかってミハイルを押し潰す。

それではどうなる？

今までのことは？

辻斬りは？

フィスやホラン先輩の敵討ちは？

歯を食いしばる。自然、握った拳に力が籠る。

吐き出せない何かがミハイルの胸の内でもヤモヤを吐き出していく。

「気持ちにはわかる……奴は俺の仇でもある。これ以上はのさばらせやしない」

メツシユの力強い手がミハイルの肩にのしかかる。

それをミハイルは無言で受け止めた。とうてい、喜ぶ気持ちにはなれそうもない。「後は任せろ。わかつたな、レスター?」

諭すようなその声にミハイルは無言で頷く。

言葉にするには重苦しい胸の内だ。本来ならば喜ぶべきはずの中央騎士の復帰。だが、暗い何かがミハイルの胸に落ちている。

フィス——ホラン先輩——俺は……どうしたらいいんだ?

ポツカリと胸の奥で塞がったはずの空洞が開いたような気がした。

◆ 「マスター?」

パルスエットが帰宅した主を出迎える。帰宅したというのにミハイルがすぐに入つてこないのので玄関へ出ていた。

ミハイルは狭い玄関で佇んだままだ。

「おかえりなさい、マスター。お酒を召してるんですね?」

突然、ミハイルがパルスエットを抱きしめて壁際に身を寄せる。近い距離でお互いの息遣いが伝わってくる。

荒々しい呼吸と心拍数。鼻につく酒の匂いは相当量のアルコールを摂取している。

「あの……酔っているんですか?」

廊下の暗がり、見上げたパルスエットの瞳がミハイルを見つめる。

「ああ……」

荒く酒臭い息を吐きだしてパルスエットを離す。

ファティマの目に正面から耐えられず、ミハイルは視線をそらしていた。

「酔ってなんかいない……」

それだけ呟いて、ファティマに背を向けると乱暴に安物のソファに腰を下ろす。

強いアルコール臭が室内に満ちていた。

「お水持つてきますね」

「ああ……」

オレは酔っているのか？ タチの悪い冗談で酔っているのか？ 意味のない問いを

朦朧と胸の内ですり返す。

騎士は薬物やアルコールに耐性を持つものの、酔わせるためだけの酒というものはいくらでもあった。

ミハイルは酒場で強い酒を何倍も煽って酔っ払っていた。バーテンダーに止められなければ潰れるまで飲んだことだろう。

いっそ、安い酒で悪酔いしてこのまま消えてしまいたかった。酷い気分だ、これ以上ないくらい。



「本部から、青銅騎士に復任しろだとさ……」

「はあ……」

その報せは喜ばしいことのはずだが、沈んだミハイルの様子にパルスエットの声も小さくなっていった。

マスターの心を占めているのは辻斬り事件のことに違いない。

砂ばかりの辺境任務は何もないと普段から冗談は言っていたが、いざ戻るとなれば、躊躇いも生まれるのだろう。

二人の間に沈黙が落ちた。

コップの透明な水ごしに映るパルスエットは心配そうに自分を見つめている。

険しい顔でミハイルが見返した。水を飲み干すと胸に詰まって激しくむせる。

背中当てられたパルスエットの手を乱暴に振り払う。構われるだけ自分が惨めな気持ちになっていくのを抑えられなかった。

「なあ、パルセット。お前、何で俺なんかについてくるんだ？ エリート街道のはずが一気に落ちこぼれた……ここで俺が何て呼ばれてるか知ってるか？ 間抜けのレスターだ。俺が何年もこんなとこにいたのは何でだ？ 俺は、ずっとただの晒し者だった。六年間だっ！ その間、俺は何をした？ この岩と砂ばかりの町で？」

「マスター……」

「何もしなかったんだっ！ 何もだ……その俺が中央に戻れだど。戻ってどうなる……戻って、フィスとホラン先輩が戻るわけじゃねえ……なあ、パルスエツト、俺は、俺はどうしたらいい？」

酔った声で、すぎるような目の青年がパルスエツトを見つめる。ひどく気弱な少年に戻ってしまったような変化だった。

「マスター……」

マスターのその表情は知っていた。六年前もそんな顔をしたことがある。そして彼はパルスエツトの膝の上で泣いたのだ。

「私はマスターに何があっても側にいます。けして側を離れませんから……どんな決断をなされても、私はついていきますから」

そう応え、パルスエツトはミハイルの頭を胸に抱いた。かつてそうしたように、また、彼を抱いていた。

それは、偽らざる本物の気持ちだ。だからこそ、パルスエツトはそれを忘れたくないと思う。いつか戦場で記憶をなくしたとしても、今の自分でなくなつたとしても、それだけは忘れなくなつた。

「……そうだよな。お前たちはそうだ。ファティマなんだから俺に不利なこと言えないよな……」

「私……マスターから離れません。ずっと一緒にいます」

パルスエットとミハイルが見つめ合う。ミハイルの手にパルスエットは自分の手を重ねた。

「畜生……いつそ、罵ってくれたほうが良かったよ。お前なんかマスターじゃないってよ……」

「マスターは、私がマスターと選んだ人です。自分を信じてください」

「自分か……」

黒衣の老人の姿を思い出す。彼は六年前の傷ついたフアティマを抱えた姿でミハイルの前に立っている。

過去の亡霊はもう自分を悩ませる存在ではない。夜、飛び起きて汗ぐっしよりになった悪夢を見ることももう無くなるだろう。

「はは、俺は大馬鹿野郎だ。フアティマに……女にここまで言わせて、何が騎士だ……」  
乾いた笑いを浮かべる。その背をパルスエットが抱きしめていた。

「なあ……俺、騎士団を辞めるかもしれないぜ？」

「はい、ついに行きますから。マスターが嫌でも……」

「パルセット、苦勞するけどいいか？」

「はい」

くしやり、とパルスエットの髪をミハイルが撫でていた。暗い室内で二人は共に天井を見上げる。

ここ数年間をここで過ごした。後悔しかない場所を出て行くとは決めたのは逃げためではない。

「悪いな、こんなマスターで……」

苦笑いするミハイルの表情に先ほどまでの苦悩の色はない。

わかつていたことだ。わかつていて、あんな間いをファティマに投げかけた。それこそ、自分の背中を押してもらいたくて、卑怯な台詞を吐いたのだ。

自分はとことんまでに弱い生き物だ。だったら、弱いなりに生きてみようと思う。

「大丈夫……」

ミハイルの手にパルスエットの細い指が重ねられる。

ボンボンのエリートだった自分はもう終わりにする。これからは違う自分として生きてみよう。償いの人生であったとしても、それは俺が選んだ道だ。

「俺は……今日を限りにミハエル・レスターとして生きる。ボンボンのミハイルはどっか行つちまったよ。辞表は間に合いそうもないから、命令違反は仕方ねえ。たぶん首扱いだ。当分は傭兵稼業をすることになるが、それでも構わないか？」

「はいっ！」

勢いよくパルスエツトは答えていた。

ミハイルに先程までの、この六年の間に背負ってきた暗さはもう無い。その目には輝きが戻っていた。

パルスエツトが初めてマスターを見つけ出したときのあの頃の目をしていて。それがとても嬉しかった。

「つたく、主が首なのに嬉しそうな顔をするファティマがいるかね？」

「炊事洗濯はかなり覚えましたが、どこに行っても平気ですっ！」

「はは、頼りにしてるぜ、パルセツト」

どこか嬉しそうな顔のパルスエツトに苦笑いで応える。

「マスター、何度も言いますが、私、パルスエツトですからっ！」



城の地下では期待に満ちた視線が新造MHへ向けられている。

かつてウオータードラゴンと呼ばれた機体はほぼ完成に至っている。後はエンジンに火を入れるだけだ。

「よしっ！ お色直しの装甲付けたし最終起動チェックするよっくっつ！」

くま目に徹夜でハイテンション気味のソープがフラフラになりながら宣言すると、作業中だった周囲の人々がわらわらと集まってくる。

「ええと……ウオーター MkII（まーくとう）？ そいや、まだちゃんと名前考え  
てなかったな……まあいいか、改良型がちゃんと動いてくれますように。ポチツとな」  
スープがイレーザーエンジンのスイッチを点火する。先程まで調整をしていたバク  
スチュアルも後ろに控える。

そこにグラン・コークスの姿もあつた。

人々が見守る中でイレーザーシステムが立ち上がり、工場にモーターエンジンの音が  
響き渡る。

「ありや?」

スープがすぐに異変を察知する。イレーザーのエンジン音に首を傾げる。

感じ取つたのは異音だった。低く唸るような低調な起動の響きから、一向に嘯み合う  
エンジン音に移行して行かないのだ。

「あれれ? 何かおかしくない? エンジントラブルか? パワーが上がらな  
いよ、バシクー」

本来ならばとうに安定しているはずのモーター音が不規則な音を響かせている。

「スープサマ……コノコ……トテモコワガツテル……ジブンノアシデ……タツノ……ト  
テモコワイコワイ……コワイ……メヲトジテ……クライトコロ……トジコモツテル  
……」

胸に手を当ててバクスチュアルが答える。

「でえええ……ここまで来たのに……何が気に入らないわけ……？ 全然パワーが上がらん……？」

「言わんことではない。目覚めが悪いのは人もモーターヘッドも同じと見える」

「う……」

テンパリ気味のソープがじろりとコークスを睨み、頭をかきむしりながら計測器を覗きこむ。全く異常は見当たらない。

「うーん？ 最終工程のチェックはすべてオールクリアしてるのに何でー？ やっぱアパッチのデータとか入れなきゃ良かったのか……？ うるさいから切つて原因を探ろう……」

イレーザを切り、収束していくエンジン音。周囲から落胆の声上がる。

「ん……」

ソープが振り向くと、コークスの側にファティマスーツに身を包んだエディがいた。

その美しい光沢のあるスーツは白を基本の大地に於いて、張り出したダブルシヨルダーは青いラミネートコーティング金属によって縁取りが飾られ、伸びる袖とスカート部には白いベルベットがあつらえられている。

全体的に純白を強調する服装となっていた。エディのファティマとしての正式な姿

だ。

その後ろにゴーズの騎士らがいる。

「おー、そうかそうか。マスターを選んだんだねっ！　で、どっちなのー？　レオパルト？　それとも……」

マスター選定の場にソープは立ち会っていない。誰をマスターに選んだのかはまだ知らなかった。

「残念ながら陛下。自分はハズレのようです」

真面目顔に答えたのはゴーズの制服のレオパルト・クリサリスだ。後にクリサリス家の総領となる彼も今は若手騎士の一人でしかない。

すぐ後ろにいるアイシャも同じゴーズ騎士の制服姿だった。

「アイシャか」

ソープの目線を照れているのかアイシャが顔をそらした。エデイが進み出てソープの前に立つ。

「マイスター、レイオス・ソープ様。どうか、私にあの子と話をさせてください」

「もちろんいいよっ！　君のために作った相棒なんだしねえ。今は引きこもってるみたいだね」

「ありがとうございます。もう一度エンジンを入れて欲しいのです」



「わかった。君が何とかしてくれると助かるよ」

「はい」

エディがソープに丁寧な頭を下げる。すると、バクスチュアルがエディの元に歩み寄る。

「バシク？」

バクスチュアルから積極性を示すことは稀である。同じファティマに対しても。

「アノコハ……アナタダケガ……アヤセマス……ワタシ……デハ……アノコヲ……チャントオコセナカッタカラ……ズット……アノコハ……アナタヲマツテル……クライセカイデ……ズット……マ……マヲマツテタ」

バクスチュアルの言葉をエディは正面から受け止める。

「あの子の面倒を見てくださってありがとうございます。大丈夫、あの子は芯は強い子ですから」

「ガンバツテ……」

「はい……」

エディとバクスチュアルが顔を合わせるのこれが初めてだ。それが初めから分かり合う仲のように会話をしていた。

その光景をソープは不思議そうに見つめる。

「何だか分かり合ってるし〜?」

バクスチュアルとの短いやり取りを終えてエディは歩き出す。真っ直ぐ背筋を伸ばし、気弱でおどおどとした印象は微塵にも感じられない。

「ねえ、グラン。ちよつと、ボクの知ってるエディと雰囲気違うよねっ!」

「アレのスイッチを入れるとけしかけたのは貴様であろうに……」

「いや、でもさあ……」

少し不満そうな顔をするソープ。何だか除け者にされたような感じである。

コークスは両目を覆うグラスアイで表情を見せず、不動の姿勢で前を見たままだ。

「全く違うファティマに見えるね、彼女。おどおどしたところが全然見えない。人格が切り替わったみたいだ」

「アレが本来の姿と言っている。マスターを得ることで保護プログラムである仮想人格が吸収され、眠っていた主人格に蓄積していた情報を明け渡す。アレはたとえマスターを失っても、主を探すための人格を作り出し、自らの意思でマスターを探すことができる。お前の知っている人格がそうだ。ファティマとしての制約であるダムゲートは状況に合わせてアレが条件付けをするようになっていく。マスターが存在しないときのアレの能力は一定することがない。条件付け次第でいくらでも変動する。その幅はわしもよくわからん。最下限のDII（ディーツー）から上限は不明だ。それも安定すれ

ば本来の数値に戻る」

「そんなファティマは見たことも聞いたこともない……もしかして騎士以上ってことなのか？ バランシエがそんなファティマの可能性を語ったことはあるけどね。ダブルイpsilonとか？ 彼の母が造った光のタイフォンがそうらしいんだけどね」

「ダブルイpsilonか、いや……」

ソープの言葉にコークスは首を振って自分の言葉を否定してみせる。

「ダブルイpsilonではない。だが、それに近い存在かもしれない。かつてわしが得た因子は予想もしない進化を遂げた。その秘密さえバランスの一族は解き明かしているのやも知れぬ」

「君ってバランシエのこと嫌いなんじゃなかったっけ？ 娘のプリズムが彼に弟子入りして一悶着したじゃない？」

「バランス家の話をしたただけだ。それと、娘のことは関係なからう？ あいつは勝手に出て行っただけだ」

「あれ、怒ったの？ 仲直りしたらどう？ こっち来る前に会ったけど、彼女、気にしてるみたいだったよ？」

グラン・コークスの娘であるプリズム・コークスはクローム・バランシエの元に押しかけ弟子をしていた。

若くもマイトとしての才能を開花させた少女は父親に反発して家を出て行ったのだ。マイトとしてファティマ製作のためのお手本とするには父親の研究するものが異質すぎたと言えた。

父親は星団を飛び回り、家で親らしいことをしたことなど一度もなかった。

よりよつて宿敵たるバランシエのところに行つたということも、プリズムの父親への当てつけとも見れたが真実はわからない。

「知らぬ」

「頑固爺……」

ソープの眩きをコークスは無視する。そして先程切つた言葉の続きを始める。

「精神的に不安定な問題は、マスターを選び出し、統合された人格を得ることでアレは安定する。すでにアレがファティマであるのか、そうでないのはわしも判断がつかん。複数のファティマの情報遺伝を共有しながらも、それぞれの人格が破綻することなく存在している。ダムゲートを自らの意思で条件付けするなど、本来ならばありえんことだ」

「創造主にもわからないファティマか……モラードのエストとは違うようだけど？」

「……S. F. S (シンクロナイズド・フラッター・システム) そのものは研究における偶然の産物にすぎん。エストは二人以上の情報体を再現するには至らなかつた。アレもまたエストとは違う。モラードがアレのことではいくつ打診してきたがな」

「でも、クロスビンはモラードのエストを選んだんだよね？ なぜなんだい？」

「わしのは未完成……いや、S・F・Sの基礎だけはできていた。それを独自に完成形まで持っていったのがモラードだ。どちらが早いかかなど問題ではない。わしが一〇〇年かけても未完成だったものと比較するようなものでもない。わしは時代遅れの凡人にすぎぬ」

その言葉は自嘲なのか、スープには窺い知れない。

弟子のモラードが若くして名声を得ると、グラン・コークスはシュリーズを去つたのだ。その進退は様々な憶測を生み出したものだ。

「元は同じでも行き着くものは別だったってことだよな？ 君って、まだ何か隠してるっぽいけど。まあ、それはおいおいわかるのかなあ？」

「さあな」

イタズラっぽいスープの視線をコークスは無表情で受け流す。

「つたく、食えない爺さんだなあ……」

スープの眩きに、あくまでもコークスはポーカーフェイスを崩さない。その瞳に映るのはエンジンを震わせる白い巨人だった。



再び心臓に火が灯される。彼はその音を遠くで聴きながら胎児のように心を丸めて

いた。

嫌だ。誰にも起こされたくない……

子守唄を囁いてくれたバシクお姉ちゃんは今はいない。誰かがボクを無理やり起こそうとしている。

嫌だ。ボクはまだ起きたくない。

このままずっと寝ていたいのに、ボクをいじって起こそうとする……

「久し振りだね君——あの頃とは随分変わったけれど、私を覚えていて？」

ファティマルームに乗り込んだエディが制御コンソールキーに触れた。青白い光がその姿を照らしだし、アイレンズに反射して感情のない瞳を映し出す。

ここに入ると、自分がただの機械に戻った気持ちになる——

それを否定していた自分は今は胸の内にいる。

ダムゲートにも完全制御できない人格がもう一人のエディである。その彼女は今でもMHに乗ることを怖がっている。

「大丈夫……大丈夫……落ち着いて……」「私」

エディは胸に手を当てて目を瞑る。トクントクンと心臓が音を立っている。

震える響きを伝えるのはもう一人の自分自身の心だ。MHと接触して拒絶されることを恐れている。

心配ないよ。さあ行こう——

自分に言い聞かせてMHの「声」を聞き取ろうとする。

エンジン駆動音が、まるで鳴き声のように響いている。まるで、生まれたての赤子がグズるようなそんな響きに聴こえていた。

「私と君、ずっと一緒だったのに忘れちゃったのかな？ 私は思い出したよ、君のこと

……」

『……ダレ……バシク……オネエチャン……ドコ？』

拒絶感のこもった応え。MHの意思が頭の中に響く。

ファティマはMHと意思を通じることができると機械であるMHにも意思というものも存在した。知性と呼ぶには幼い心は人工AIともまた異なるものだ。

『ココ……キライ……サムクテクライ……ボクノカラダヘン??』

「全然変じゃないよ？ 目を開けて周りを見てごらん？ 前と違うボディだけど、君は君……新しい体は嫌い？」

『……マエノホウガ……ヨカッタ……』

ポツポツとMHが意思をエディに向け始める。肌がざわつく感じがした。MHからの意志の伝達は心を丸裸にする。

エディの一挙一投足が「彼」に見られているのだ。

今ならわかる……私も閉じこもっていたからだ。君のことを忘れて、表に出ることを怖がっていた。

だから君に拒絶された。もう一人の私の記憶を私は共有している。

エディはコクピットルームの天井に両手を当てる。より声を聞き取ろうと指先から足の爪先まで意識を集中させる。

「もう怖がるのはお止めなさい。みんなが君を見ているよ？　怖がらないで、君には私がついてるから」

『ボクヲ……イジメナイ？』

「みんな、いじめてないよ。君のこと心配してるんだよ」

『ナゼ？』

「君のことをみんなが大好きだからだよ。君のことをみんなが待つてる。私が一番、君に会いたかったの」

『ナゼ？　オネエチャン？』

「君の体を造った人が、新しい体に「君」を入れて、その記憶と向かい合うのが怖かった……私が死ぬ瞬間を思い出すのが怖かった。でもね……私、全部思い出したの。マスターがいて……そして君には私がいるの。ねえ、だから思い出して。そして……私に力を貸して。君だけが私のすべてを預けられるから。私が君のママだよ」



『マ……マ。ママなの?』

低調で不安定なMHのレーザー音を聴きながら、エディは覚醒めのためのある言葉を囁く。それは彼女だけが知る起動パスワードだ。

「だからね、いい加減に目を覚ましなさいな「アパッチ君」?」

『っ!』

ヴォーン——とMkIIの目が開かれる。外部に向けて一気に覚醒する意識。そしてありとあらゆる情報を彼は感じ取っていく。

自分が何者であるか——何であったのか——忘れていたこと——そしてママの存在

『アアッ……セルマ……マママ?? ソウ……ボクハズット……マツテタンダ……ドウシテキテクレナカッタノ?』

「目を覚ましたかな? そう、ゆっくりでいい……今の君の姿を見てみよう。今の君は昔と少し違う……だからびびくりしないでよく見ようね。ゆっくり、ゆっくり体を動かしていこう」

論すように優しく、子どもに語りかけるように続ける。絵本を読み聞かせるように。

孤児院の子達に読み聞かせた経験がエディの声に柔らかさと抱擁さをもたらししていた。統合されながらも、以前のエディとしての記憶と人格が自分の中で生きているの

だ。

「さあ、息を吸って、ふう〜 落ち着いてきたかな？ 君がドキドキしてるからみんな君が心配。ほら、あそこに君を造った人がいるよ。ご挨拶なさい」

『パーパ？』

MkIIの焦点が金髪の青年に合わせられズームアップする。低い唸りから徐々に高鳴っていくエンジン音。イレーザーエンジンが本来の駆動音を響かせ始める。



「やったっ！ イレーザーが回り始めたぞっ!!」

MkIIを見上げソープが叫ぶと周囲から歓声が湧き上がる。疲れきった男たちの顔に笑顔が浮かぶ。

「うーん……何だか見られてる？ ボク？」

「アノコ……ソープサマニ……ゴアイサツ……デス」

ソープの隣でMHに向けてバクスチュアルが手を振る。

「君たちフアティマってそういうところかすごいと思うよ。僕にはわからないもの。少し羨ましいね」

そう言って笑うソープにバクスチュアルはわずかに頭を傾げて小さく頷く。

「ハイ……マスター……」

MkIIを見上げるバクスチュアルの横顔はどことなく嬉しそうだ。

「あそここの黒い人が私のお父様」

周囲を観察し続けるMkIIが次に黒衣の老人をズームアップする。

『ウン……グラインパ……ゴアイサツ……スル』

チカチカと目を光らせるMkII。キラキラと光の粒子が舞う。

制御コントロール掌握——MH制御の全権コントロールがエディの手に委ねられる。

今やMkIIの制御はエディの思いのままだ。

「ご挨拶は済んだかな？　じゃあ、君の機能を少しずつ開放していくからね？　お勉強の時間始めよう。いっぱい覚えることあるからね？」

『ウン……ママ』

ファティマルームの座席にエディは座り込む。青白い光の中で膨大な量の情報が整理されていく。

エディの指が高速でコンソールキーを叩き、新しい学習プログラムを構築する。

「OSに君の癖を上書き……前と変わらないくらい君は動ける。ずっとずっとボディはパワーアップしてる……最初はびっくりしちゃうからちよつとずつ行くからね」

『ママ……ボク……ガンバルっ！』

MkIIは張り切ってエンジン音で応える。

彼に戸惑いはもうない。暗い檻の中から自ら出て、エディを自分のママの「セルマ」と認めた。

会いたくて、会いたくて、ずっと待っていた人によく出会えたのだから――

MHが無事に動き出した頃、事態は急変を迎えようとしていた。衛星からの監視映像が新たな局面をソープの元に報せてきたのだ。

「え？ ブルーアーマーが集結してドンパチ始めそう〜!? クソ〜やられたか〜」  
辺境の地での大捕り物が始まるうとしていた。

## 【12話】決戦

地響きを立てて五騎のMHが大地に降り立った。ウモスの主力旗である青騎士だ。陽の光を浴びて紫に近い装甲が反射を照り返す。

「各自、連携を崩すな。ファティマたちは監視を怠るなよ」

『ラジャー！』

青騎士のエンジン音が辺境に響き渡る。オリバー・メツシュ指揮での掃討作戦がついに開始されていた。

表向きは不法キャラバンの一斉摘発だ。その実はここ数年に渡って暗躍する殺人鬼の拿捕、及び殺害という任務を帯びている。

本隊の指揮を執るオリバー・メツシュは復讐に燃えている。

「功を焦るな。互いの座標位置を確認し、テレポートできる状態を維持しろ。これより作戦を開始する」

了解の言葉の後に青騎士が散開して離れていく。

その様を眺めている目があった。しびれを切らした頃、作戦が始まっていた。乾いた舌を舐めるのはミハエルだ。

彼はこのときを待ちわびていた。

「パルセット、先遣隊のマーカーは追えているか？」

電子音を響かせる機械郡も今はその音を潜ませて静かだった。稼働に必要な電源だけで空調まで切っている状態だ。いつでも駆け付けられるように電力を温存していた。

首筋を溜まった汗が流れ落ちていく。妙に暑い。緊張のせいもあるのだろう。

『問題ありません、マスター。ノイズが発生していますが、おそらくキャラバン隊のものですね』

コクピット内にファティマの声がやけにはつきりと響く。パルスエツトの声を久しぶりに聞いたような気がした。

「キャラバンに張りついてた甲斐があった。すぐにボロを出すとは思えないが、ネズミは追い出せるだろう。こっち一人じゃ炙り出すこともできん。本隊だけが頼りだな」

『監視、続けます』

「早く動いてくれ……」

希望的観測か。どのみち俺には後がないんだ。だったら、奴の面の皮を剥いでから辞めてやる。

もし、何も起きず空振りに終われば笑いものだ。笑いは俺だけじゃない。本国の青騎士本隊が介入して辻斬り一人捕まえられなければウモスの沽券に関わる。

捕縛、もしくはは処理という任務を受けての出兵だろう。国内での上部への突き上げも相当に溜まっているらしい。このまま日和見を決め込めば民衆の政府への信頼はガタつくことになる。

何せ選挙も近い。政治的な思惑なんて知ったことか。

いいように蹂躪され、多くの騎士とファティマが奴に殺された。奴だけは許すことができない。

フィスにホラン……これは復讐なんだ。

ミハエルは強く息を吐きだす。スタンバイに入ってから四時間あまりが経とうとしていた。ずっと待ちの態勢が続いていたがようやくやく事態は動き始めた。

額に汗の粒が浮かんで落ちていく。その不快感に耐えながら電子戦はファティマに任せるしかない状況だ。

今はおかつにエンジンを作動させて悟られるわけにはいかない。隠密行動がすべてにおいて優先される。

ネズミはどつちなのだろう？ 俺がでっかい猫のケツについて別のネズミを探している。

ミハエルはそんな想像をする。そしてパルスエットの声が響いて顔を上げる。

『マスター。メッシュ部隊、右翼に動き』

「動き出したか……」

唇を噛んでミハエルは呟く。モニターの動きに神経を集中させる。マーカーが点滅しながら一定の範囲で移動していくのを眺める。

『範囲最端から円を描いて北上中。こちらが動ける範囲線まで後数キロです』

モニタのレーダーの警戒域と、現在のミハエルの位置と展開している部隊の位置。徐々に本隊のマーカーは遠ざかっていく。

こちらが動いても気が付かれない微妙な距離を計算してのラインをパルスエツトが設定している。

「洗いやらい探索か。キャラバンの動きを読んでいる。狙いは同じだな……突いた先からどう出てくるか。どのルートが奴らの出てくる穴だ？ パルセット、その穴を探せ」

『了解です、マスター』

パルスエツトが先行する搜索隊の動きを追う。こっちはそれに食らいついていくしかない。

こちらが動けば先遣隊のレーダーに引つかかってしまう。ネズミの尻尾を彼らが捕まえてから動く。

これは正式な任務ではない。すべて自分の独断行動だ。敵を見つけないうちからバレルるわけにはいかない。



復隊を任じられたばかりといってもまだ正式な青銅騎士ではない。メツシュからの助力の要請もなかった。

だから、不始末が起こってもそれはメツシュには何の関わりもないことだ。責めは自身が背負えばいい。

国を離れて傭兵にでもなるさというのも強がりではない。六年前の自分はそんなことすら考えられなかった。

どうにか先回りできないものだろうか？

焦りがミハエルを衝動的に突き動かそうとするのを抑える。

ダメだ。ここで慎重にならないでどうする……六年前と同じでつを踏む気か？

「早く行ってくれ……まだ動けないのか？」

『もう少しです。ほんのわずかな時間差を利用できます。タイミングはこちらに』

「わかった……任せる」

パルスエツトは逐次その動きをトレースしている。ファティマの先読み演算（エミユレート）は騎士の勘などよりも遥かに正確だ。

辻斬り搜索にブルーアーマー本国仕様の青騎士が五騎投入されている。後陣の控えもいるのだろうが、作戦の性格上、即時の戦力投入は考えにくい。

国境が近い。最近の騒ぎのこともあって他国も敏感になっている。派手に動けばこ

の動きを悟られてしまう。

指揮を執るオリバー・メツシユは実績がある指揮官だ。作戦に問題などあるはずがない。

有能だ。有能すぎても困る。俺が奴の首を取れない。

これだけの戦力を出して打ち漏らしがあれば笑いものだ。そこで俺が本隊を出しぬいて奴を倒したらそれこそ味方に泥を塗りつけることになる。

そして、今度こそレスターは永久追放だ。そうなつても構わない。その覚悟は決めた。きた。

この機会を逃したら終わりだ。今しか、今しかないんだ。

これは私怨だ。わかっている。でも、やらなければ一生後悔する。そんなのはゴメンだ。味方を犠牲にしてまで得られるものが何かなど今は考えたくもない。

コクピットの中でミハエルは唇を噛む。焦るな。ここの地理は俺達の方がよく知っているはずだ。

マーキングが遠ざかり、本隊のレーダーが範囲圏を外れる。

『エンジン始動しますっ！』

「よし、追跡開始！」

『シークレットジャマー発動。左迂回経路で行きます。プルート、行くよ』

MHにエンジンが入るとドリーリーが振動音と共に震えた。扉が自動開閉していく。巨大な足が乾いた大地を踏んで、体に振動を伝えてくる。

駆動音が大地に響く。ミハエルとパルスエットの駆るのはデボンシヤというタイプのMHだ。六年前の件で青銅騎士を降格されてからこの中古のデボンシヤがミハエルの乗騎となった。

名はプルートと言う。プルート、という名前の由来はよく知らなかったが、パラベラム・スタームが手がけたデボンシヤ三番機シリーズらしい。

中古品で癖はあるものの、一度馴染めば手足のごとく使いやすい機体だ。今ではパルスエットのお気に入りでもある。

『マスター、風向き変わります。視界に注意を——えっ？ 見つけたー！』  
わずかなノイズの間隙を拾ってパルスエットが叫ぶ。

「当たり前かっ!？」

『アンノウンですっ! 戦闘、始まっています。この子、起動したばかりでテレポートにパワーが足りません。テレポート直後の即戦闘に備えます。約二分ください』

「無防備なところをつかれたら目も当てられないしな……」

その時間さえも惜しく感じる。

テレポート直後の戦闘はこのプルートのスペックではすぐには難しい。青騎士なら

ばどうってことないんだが。

エンジンを二つも積んでいれば別だが、そんなMHはお目にかかったこともない。

『プルート、テレポート開始しますっ！』

一か八かだ。辻斬りを先遣隊が討ち取れば空振り。だがもし、チャンスが有るなら――そのとき、プルートがテレポートの光に包まれていた。

パルスエツトがアンノウンを補足した頃、最初の戦闘はすでに終わっていた。砂塵が視界を覆い尽くすほどの風の中で二つの騎影がぶつかって重なりあう。

「ハハハっ！ プルーアーマーとはこの程度かザマアないな！」

青騎士の肩装甲に分厚い剣が食い込んで一気にその腕を切り落とすと地響きを立ててMHが倒れこむ。

灰色のブレイイのkokピット内で舌を舐めるのはギエロだ。

『ギエロ、遊ぶな。トドメだ』

kokピットにラルゴの声が響く。先遣隊の二騎を先に始末したラルゴともう一騎のブレイイはこの砂では視認することもできない。

味方の危機に駆けつけたもう一騎は体制が整わぬうちにギエロが先制して潰していた。地形を利用した予測不可能な不意打ちだ。

「ふん、アバヨ、だな」

振り下ろし、胸部装甲に無慈悲な一撃を加える。コクピットは破壊され、中の騎士は即死だ。

『ギエロ様、テレポート来ます！ 二騎。ブルーアーマーです』

「は、遅いわ」

先遣隊を率いるオリバー・メツシユが急行したとき、すでに三騎がブレイの前に惨敗した後だった。アンノウンの足元には無残に残骸をさらす青騎士が横たわる。

コクピット部分と急所であるアゴ部分は容赦なく破壊されている。生き残りはゼロだ。

「なんてこった畜生……」

メツシユら青騎士の目の前にブレイ。破壊された青騎士を見てもう一人の隊員が呻き声を上げる。

『マスター、同様の駆動音が三つっ！ ご注意を！』

メツシユは歯ぎしりをする。あまりにも鮮やか過ぎる手並みだ。並の使い手ではな  
いだろうと予測はしていたが、やはり殺人鬼は一騎ではなかった。

「無念だろう……」

「うお~~~~！ ふぎけやがって！」

「待てっ！ 迂闊に動くな！」

メツシユの制止を振り切った青騎士がギエロのブレイヘ襲いかかる。  
「はは、そうこなくてはなっ！」

狂気を孕んだラルゴが笑う。怒りに燃える騎士の太刀がブレイに届く前に青騎士を袈裟斬りに斬り捨てる。

歪んだ金属音を立てて真つ二つに断ち切られる装甲。青騎士の巨体が砂の海の中へ飲み込まれていく。

「ラデイーツシユ！ 今のは居合かつ！」

「残りはお前一人よ。我らの力を見誤ったことを知れ」

ラルゴの刃が残った最後の青騎士へ向けられる。

『テレポート来ます』

「何？ だが、もう遅いわ」

プルートが転移を終えて姿を現す。青騎士の後方一五〇メートル。新手の出現に双方が警戒して注意を向ける。

『プルート再稼働。マスターへコントロール戻します』

「畜生、なんてこった……」

『無事なのはオリバー・メツシユ騎です』

唯一無事な青騎士は一騎のみ。視認できる倒れた青騎士は二騎。灰色の敵MHは三

騎はいるはずだ。残りの青騎士二騎の姿が見えない。

信じたいがすでもう倒されたと考えるしかない。

「メツシユ隊長っ！ 助太刀します」

『お前、レスターか？ 何で来やがった！』

「何だつて覚悟の上です。こいつを倒すことが俺の散つていった者への弔いなんです」

『この大バカ野郎……かつこっけは一人前になつてから言いやがれ』

「抜刀っ！」

ブルートが実剣を抜き放つ。同時にメツシユ騎とブーレイが動く。

連携しなければやられる。

『レスター、合わせろ！』

「了解っ！」

勝ち目の薄い戦いだ。相手は四騎の青騎士を短時間で難なく屠つてみせた恐ろしい手練だ。かといつてももう一度テレポートして逃げる余裕はない。

ここが死に場ならそれでいい。六年間、俺は死んでいたようなものだった。最後の最後に男として、騎士として死ぬるのであれば悔いもねえ。

ヤケクソのこなくそだ！

「突撃、開始っ！」

『ラジャーっ！』

メツシユに合わせて攻撃を開始する。眼前の敵は二騎だ。もう一騎の姿が見えないが、考えている時間はない。敵も武器を振りかざして矛先を絡み合わせる。

敵との拮抗した力比べが始まる。もう一騎はメツシユが引き受けていた。

「はは、そんな中古品で俺の相手が務まるものかよ」

ミハエルのプルートを相手にするのはギエ口だ。

「パルセツト、もう一騎はどこだ？」

『この風と妨害チャフで正確な位置掴めませんっ！』

「畜生、足場を気をつけろよ！」

そのまま二太刀、三太刀と切り結ぶ。

このパワー……プルートより上だ。腕も立つ。次第に守勢に立たされるのを感じて

焦りがミハエルを襲う。

落ち着け、足場を確保して一手一手を見切れ。

「喰らいやがれっ！」

そのとき、メツシユの胴切りに見せたフェイントがブレイの頭部を捕らえる。直撃だ。一撃で破壊されたMHの頭部が跳んで落ちる。

「お見事っ！」



「余所見してんじやねえっ!」

辛うじてミハエルはギエロの打ち込みを刃を走らせて受け流す。

熱を持った関節部がわずかに歪んだ音を立てる。撃ち合いでのダメージを流しきれずに関節部に熱が蓄積されていく。

これほどの相手、長丁場になればこちらがやがて撃ち負ける。その前に焼き切れちゃうかもしれない。決めるのならば一手。こんしんの一撃を叩き込むしかない。

そのとき、メツシユ騎が激しい音を立てて沈んでいた。そのすぐ背後に灰色の影が立つ。もう一騎のブレイはラルゴだ。

「メツシユ隊長っ!」

『クソツタレ……野郎、後ろから……』

メツシユの声を聞いて一瞬だがミハエルは安堵する。

「ははは、もう残りはお前だけだ。観念して死にやがれっ!」

ブレイの撃ちこみをいなし剣を振り上げる。

どの道後はない。こいつを道連れにしてやるさ!

「無駄、無駄、お前の動きはお見通しなんだよ。死ね」

「しまったっ!」

渾身の力を込めた突きだったが、敵はそれを読んでいた。大きく体勢を崩し敵の刃が

目の前に迫る。

『退避を！』

「うおおー！」

プルトの装甲が切り裂かれる瞬間。これが死だとミハエルは目をつぶる。その刹那、ミハエルはその音を聞いていた。

質量のある鋼鉄の球体の飛来。誰がそれを予期できたか。戦いの最中、彼らの戦いに介入する存在があったのだ。

その攻撃はギエロのブレイの脚を粉碎し、止まらぬ勢いで胴の装甲に直撃する。

強烈なその一撃でブレイはもんどり打ちながら吹き飛び、装甲部に円形の跡を刻んで止まる。

コクピットルームごと押し潰されて中のギエロは即死だった。

「何だっ!?!」

ギエロのブレイを攻撃したその動きをラルゴが目で追う。その球体は円を描いて反転すると砂の海に派手に落ちた。それは巨大な鉄球だ。

武器と呼ぶには歪すぎるその形はイガイガの付いた巨大な鉄塊そのものであった。

砂塵の向こうからそれを放ったのは白い騎影だ。吹き荒れる砂のカーテンがその姿を覆い隠して二基のエンジン音が戦場にこだまする。

「何者だ？」

ブルーレイの中でラルゴは目を細めた。砂の向こうに新手の敵がいる。

『エンジン音二つ。あのMHは二基のイレーザーを積んでいる？』

「どこの誰かは知らぬが、とことん邪魔が入るものだ。役に立たぬ分析は不要だ」

太刀を眼前に構えラルゴは新手の敵を迎え撃つ。

「何だ……パルセット、あのMHは？　ぐ……」

「マスター、動かないで。怪我の手当をします」

ブルートの装甲はパイロットルームまで切り裂かれ、あわやというところで止まっていた。

九死に一生を得た。生きているのは奇跡に近いといえるが、内臓破裂に肋骨数本。それに手の骨折と数え上げればきりが無い。

ファティマの治療に任せ、ミハエルはブルートのモニターを見つめる。

そこに映しだされたもの。砂塵の中から現れたそのMHはどこまでも純白の美しい騎士だった。

「あー、もう使えんっ！　ソープ様ってば思いつきで変な武器もたせるんだから！」

白いMH——MkIIが持っていた武器の柄を投げ捨てる。鎖に繋がれているこの武器は分離式で投擲するときに切り離すことが可能なのだ。

正式名称はけん玉フレイル。世にも恐ろしいただの鉄球である。

『投てき調整完了。〇・〇〇四%の誤差修正。次はもつとうまく投げれます』

「あのねエディ！ 次なんていらなからい！」

コクピットで頬を膨らませるのはアイシャ・コーダンテだ。

もつとかっこいい登場シーンを考えていたのにいろいろ台無しである。それもこの武器を試してご覧というソープの言葉に乗せられたせいだ。

テレポートに手間取ったのは、現場の妨害が激しくて正確な座標を出しにくかったことにある。それをエディが現地の風のデータを読みだしてより近い位置を割り出すことに成功していた。

間に合ったので良かったが、そうでなければ今頃は地団駄を踏んで悔しがっていただろう。もはや辻斬り退治はアイシャのうつぶん晴らしついでとなっていた。

『マスター、敵、来ます……』

黒曜石の瞳を光らせエディはコンソールを叩く。戦闘プログラミングの制御も実はギリギリで間にあわせている。

「よっしゃっ！ エンジン全開っ！ エディ、ぶつ潰すよっ！」

『イエス、マスターっ！』

全開フルスロットルの「アパッチ君」がその咆哮を轟かせると、灰色のブルーレイの一

撃を「片手」で受け止めていた。

「何というパワーっ!？」

モーターヘッド同士がぶつかり合う金属音が戦場に響き渡る。エンジンから伝わる振動を受けながらラルゴは驚愕する。

「バカな、この私が動けぬとは！」

ブレイの拳が悲鳴を上げる。白騎士の機械の手がその拳を締め上げていた。

「ひとっつ！ 人の世、生き血をすすりー！」

アイシャの口上でブレイの拳が劍の柄ごと握りつぶされる。

つぶした手を突き放すとブレイはのけ反っていた。その態勢が整う前に白騎士が動く。

「コントロールっ！」

『間に合いませんっ!』

「ふたっつ。不埒な悪行三昧！ じよしこーせーキョクク！」

白騎士から蹴りが放たれブレイの胴へ直撃する。激震に見舞われたブレイが砂の海に足を取られ沈み込む。

「何という見事な無茶っぶり……ふっつ蹴りません」

フアティマールムでエデイがぼそりと呟く。

この程度の無茶な機動は想定内ですが、バージンMHでこんなことするのはきつところの人だけです。たぶん？

「みーつつ！ 醜い浮世の鬼を退治してっ！ エディ、何か言った？」

『いいえ』

とても地獄耳です、とメモに付け加える。

「そりゃ〜〜！」

次にはブルーレイの機械の腕をねじ上げる。両腕で固定し、足で胴部を踏みつけると「思い切り」腕を引き抜く。

質量のある金属同士がぶつかって軋みを上げる。MHの神経ともいえる無数のチューブや鋼線がねじ切られていく。

モーターヘッドのエンジン音が悲鳴のように響き渡る。白騎士のパワーに抗うブルーレイの叫びであるかのようにうだ。

引き抜いた腕を片手にぶら下げた白騎士の姿は、まさに《狂える騎士》（シバレース）の姿そのものであった。

「よーつつ……まあいいか」

『いきなり投げやり……面倒になりました……』

「いーんだよ。つーわけで、あたしがアイシャさま（暴れん坊プリンセス）じゃー！」

アイシャは面倒ともぎ取ったブレイの腕を後方に放り投げる。

圧倒的なパワー。それを体感するアイシャも全力の力を引き出せているわけではなかった。今もまだそのパワーに振り回されそうになるほどだ。

「あれがモーターヘッドだというのか！」

信じられない思いで観戦していたミハエルが叫ぶ。目の前で起きている現実があまりにも浮世離れしすぎている。

自分たちが苦戦したMHが、いとも簡単に子どもが人形を解体して遊ぶかのように蹂躪されているのだから。

その衝撃をラルゴは自らの身で受けていた。フィードバックされた衝撃はパイロットである騎士にも伝導される。

脳の神経が焼き切れるような痛みの上にラルゴ自身も片腕を持っていかれていた。血みどろのкокピットで怨嗟の混じった悲鳴を上げる。

押しつぶされた肺に溜まった血を吐き出し戦闘服を汚す。

『マスター、退避を。戦闘はもう無理です』

「ぐおおー！ ふっざけるな！ この私がつ！ 退避などしたら貴様を殺す！ 赤（テスタロッサ）が引くなどありえん！」

血走った眼でラルゴが叫ぶ。あつたはずの腕は千切れてスーツから落ちる。

「立ちな！ それくらいでくたばっちゃいけないだろ？」

ブーレイが態勢を起こすのをアイシャはわざと待った。中の騎士がどうなっているかなど予想はつくが気持ちに容赦はない。

「悔りか、余裕か……貴様は殺すぞっ！」

残った腕で光剣を抜いたブーレイが白騎士へと挑みかかる。

『了解、ラルゴ様、本懐をつ！』

「それでいい……」

ブーレイの損傷摺座率はすでに三〇%越えに達している。これ以上の稼働はMH自体の自壊を招く。

焼き切れたジェネレーターや過負荷を負った関節部が完全溶解するだろう。後先を考えぬ最後の一撃をラルゴは繰り出そうとしていた。

「正々堂々。騎士らしくってかー。エディっ！ 剣ちようだい」

『MKII。秘匿モード解除。アルマスソード開放します。出力最大っ！』

空中に青白い電光（プラズマ）が伸びて大気中へと火花を散らす。

「何だ、あれは？」

戦闘を見守るミハエルが青く光る電気騎士に瞠目する。

白騎士そのものが青白い燐光に包まれる。ツインエンジンから生み出された莫大な



エネルギーがバックロードし、ボディから体外へ放電される現象だ。

抜かれた伝家の宝刀は超高密度のエネルギーソード。すべてを一刀両断にする秘剣（アルマスソード）。

「ふはは、美しいな。壊しがいがあるぞっ！」

狂気の笑みを浮かべたラルゴのブレイが神速の剣を振り下ろす。その刹那、それ以上の速さでアルマスソードがブレイの胴体を両断する。

まるでチーズでも寸断するかのようにはMHの装甲とフレイムを一瞬で切り裂いていた。

「速い……」

「思い出したよ。そいつはあの子どもたちの分だっ！」

振りぬいた姿勢のままアイシャは呟く。ミミバ族が破壊したシャトルバスのかたき討ちを間接的にだが果たす。

『脱出モード。すべて焼き払います。マスター、ご無事で』

意識のないラルゴをファティマがコクピットごと排出する。それを確認するとブレイの自爆装置が押されていた。

同時に離れた場所にあった三騎のブレイが火を噴いて爆発するように溶解している。MHの装甲すら溶かす瞬間数万度に達した熱が周囲の砂をも溶かして結晶化させ

ていく。

まるで溶岩が突如地表に噴出したかのような火炎がモニターを埋め尽くす。瞬光遮断していなければ即失明してもおかしくないほどの熱と光が放たれていた。

『マスター、デミフレアナパーム（瞬間溶解焼夷弾）です』

「あーあ、これじゃ証拠も何も残りやしない。ま、残ってたらそれで大問題だろうけど……」

政治的なことは知らんとアイシヤはコクピットにふんぞり返る。

『マスター、事後処理は……』

「辻斬りはウモスの青騎士隊が始末したってことでいいじゃん。あたしらはただの通りすぎり。さあ、ずらかるよエディっ！」

『ラジャー。ビーコン送ります。内容は』

「てきとーで」

生き残ったウモスの青騎士に光ビーコンを送った後、白騎士は煙幕の中へと消えていく。

「証拠の隠滅か……」

伏せていた身を起こしミハエルは目を瞬かせる。ようやく視力が戻ってきたところだ。謎のMHはすでに煙幕の彼方に去っていた。

「この信号は……セルマ姉様？」

通信を解読したパルスエットが白騎士が去った方角を眺める。

「まったく、余所者に獲物をかつきさらわれるたあ青銅騎士の名折れだぜ」

「メツシユ隊長……」

しかめ面でメツシユがミハエルの脇に立った。メツシユも戦いの間に治療を済ませ、腕を包帯で吊っているが大事はないようだ。

その後ろでメツシユのパートナーのジャカルナがパルスエットに話しかけている。

「隊に穴ができちまったなあ……その分、お前にはきつちり働いてもらうからな。覚悟しとけ」

胸を軽く小突かれミハエルは当惑気味にメツシユを見返す。

「しかし、自分は……」

「あん？」

「自分は違反を犯しました。本部の命令なく勝手に出撃して……」

「仁義で出撃して辻斬り野郎をぶったおした英雄様つてところだな」

「それは事実では……あの白いモーターヘッドのことは？」

「あー、こまけえこたあいんだよ！ 世間向けに英雄様つてことにしておこうぜ。辻斬り退治を英断したお偉い様のいい宣伝役つてところだ。ほれ、選挙のやつな」

ポンポンとメツシユはミハエルの肩を叩く。

「そんな……」

「世間には表沙汰にならん方がいいこともあるさ。辻斬りの中身も、謎の助っ人もだ。どこの国の奴らが関わっていたかなんて民草は知らんていい。悪い奴らを正義の味方がやつつけた。そういうメルヘンな筋書きさ。白銀の騎士なんて化け物が出たなんてニユースは都合が悪い連中もいるだろうよ。上層部は慌てふためくかもしれんが、政治的なことは任せておくさ」

「はあ？」

メツシユの独白にわからぬままミハエルは疑問を返す。そして答えを得られそうにないとわかると口をつぐんでメツシユの横顔を眺めた。

「しかしまあ、派手に焼いたもんだ」

残り火くすぶるブレイの残骸を二人で見下ろす。

これで終わったのか……本当に？ 俺は散っていった者の無念を晴らせたわけじゃない。

ただ、無様にやられただけだ。どこの誰かわからぬ相手に全部持っていかれた。悔しければもつと強くなれ、レスタ―」

メツシユが背を向けるとプルートのから飛び降りる。

「ようしジャカルナ、後方の部隊を呼べ。回収用のやつもな。全部焼けちまったが取れるデータくらいあるかもしれん」

「わかりました」

そのやり取りを聞きながら振り返るとパルスエットが目の前にいた。

「悪いなパルセット。まだ当分、騎士は辞められそうにない」

「残念です。でも、どこへだつてついていきますから。マスターがいるところが私がいる場所です」

風が吹いて二人の髪をかき乱す。

「ああ、そうだな」

ミハエルははるか遠くの青い空を見上げた。薄つすらと白いノウズが見える。過ぎ行く雲に散つていった友と仲間の顔を思い浮かべる。

「帰ろう。俺たちの基地に」

「はい、マスター」

そう応えたパルスエットがミハエルの肩に寄り添うと共にノウズを見上げるのだつた。



「完全、完璧大勝利っ！ やっぱりアイシャが来てくれてよかったよ！」

うんうんと頷いて自分の作ったMHの完全勝利に微笑むのはソープだ。

「ソープ、サマ……」

「ん？ 何だい。バシク？」

「ホンゴクカラ……トテモ……コワイカオノ……ルスサマ……カラ……レンラク」

「今さら気がついても遅い。この大勝利をみんなが見たら驚くだろうね。まあ繋げて」

「ハイ」

バシクが映像を回すとドアアップのA・K・D重鎮ルスの顔が映る。

『陛下っ！ お遊びはそこまでにしてさっさとお帰りくださいっ！ 政務ほっぴり出して何をやってるんですか！ 一言でも言ってくればいいのにこっそりとは情けない！ このルス、今からでも陛下の首に鎖を繋げに参りますぞ！ そーれーとー、いつも癖でロボット弄り回して辺境でオイタなどなさっておられないでしょうな。聞くところによれば辻斬りがどうのこうのと……まさか関わってなどおられませんでしょうな？』

「あー、それについてはこっちの実験でウモスから問い合わせがあるかもしれないんだけどさ……」

『へーいーかー！ 勘弁してください。ケツを拭うのは我らの役目！ ですが陛下――』

額に血管を浮かせたルストアップ画面の回線がぶつちり途切れる。スイッチをオフにしてため息のソープ。

「さっさと帰れということだ。この騒動、隠居の身には少々刺激的過ぎたわ。娘も嫁いだことだし、そろそろ静かにさせてくれ」

黒衣のグランがソープを見下ろして告げる。その傍らに分厚い医療カバンがある。

「あれ、どこに行くんだい？」

「これから診療だ。できの悪い助手が一人いなくなったところだが、それを話せば寂しがるジジババどももおるだろうて。不思議と子どもにも懐かれていたからな、アレは」

そう言つてグランは背中を向ける。

「ここを離れるつもりはないのかい？ 彼女には君が必要じゃないか」

「巢立ちした娘にいつまでも構うのは親バカというものだ」

「かもしれないね」

そのまま振り返らず、グランは地上へのエレベーターに乗り込んでいた。そしてすぐに姿は見えなくなる。

これがレディオス・ソープとグラン・コークスが交わした最後のやり取りとなった――

## 【章終】エピソード

## ◆終話—01

グラン・コークス（2578—2945）『偉大なる調整者ここに眠る』

アドラー・トラン連邦の地方バスターニユ。ベトルカ郊外にその墓があった。

彼のもう一つの名をフルード・コークという。ベトルカにある小さな診療所で細々とファティマの調整を行いながら貧しい人々の間を診療して回った。

どんな患者も受け入れ、偏屈ながらも腕の良い老医者として近所の者に知られるようになる。患者の元までわざわざ訪れる医師の横で赤毛の娘が助手として働いていた。

晩年、彼が体調を崩すと黒髪の少女も付き添うようになった。

生涯を医療に捧げた老医師に救われた者が彼のことを忘れることはなかった。ここに集った参列者の数がそれを表している。

こうしてコークが開いた診療所の前にも多くの人々が集まっていた。ベトルカの町の人々だ。

「先生がそんなええ人だとは知らなかったあ……お悔やみ申し上げます」



「はい、お父様も、皆さんが集まってくれて、とても嬉しいはずです」

黒髪ショートトの少女が献花の花を診療所の入り口で受け取る。野の花を摘み取った花束は町の人々の感謝の印だ。

皆が喪服を着て老医師の死に祈ろうとここに集まった。彼らにとってはここが老医師との接点であつたからだ。

ここに集う多くは生活が貧しく高度な医療を受けられない人々だ。

コーク医師は貧しい家を回りながら最低限の治療費だけを受け取っていた。彼らが払える金額しか要求しなかつたのだ。

「エディさん、今までありがとうな。俺たち、先生のおつかない説教聞きながら、あんたの顔見にどうでもいい傷こさえてここに來てたんだあ〜」

「おい、口説いてんじゃねえぞ」

花束を渡した男を横にいた男が小突いて場に和やかな空気が流れる。

「祈ろう」

帽子をかぶっていた者は帽子を脱いで胸に当てて目を閉じた。短い祈りの間、エディは彼らを見守る。

「それじゃ、俺たちは行くから……」

黙祷が終わって一人ずつ背を向けて立ち去って行く。その最後の一人が見えなくな

るまで少女は見送った。

◆ として花を診療所の戸口に添えた。エディは葬儀が行われている家に戻る。

「本日は、お集まりいただきありがとうございます。故、グラン・コークス氏の委任を受け、遺言を預かりましたモラード・カーバイトであります」

即席に作られた壇上にモラードが立つ。その元にエディが歩み寄って故人の遺言状を手渡す。

「ありがとう。エディ、彼女は？」

モラードの問いに首を振って応えた。尋ね人は葬儀の列には加わっていないかった。

「そうか、時間もない……皆さん、故人を偲び、しばしの黙祷をお願いします」

モラードが片手を上げその一言に皆が目を閉じた。わずかな時間、静寂が彼らの間を支配する。

その面々は、有名どころではフィルモアのノイエ・シルチスの騎士。

法と徳で知られるクバルカンのルーン騎士。

A・K・Dのミラージュ騎士。

そして関係が深いトラン連邦の騎士たちがいた。

それぞれに連れ合いのファティマを伴っていた。ファティマは喪章を示す黒い花を

胸元に飾っている。

ファティマを物として扱うことで有名なフィルモアの騎士がここにいるのも生前の  
コークス先生の功績であるに違いない。

善や悪、正義や不正義に関係なく、彼は多くの命を救ったのだから。それこそマイト  
の鑑であつたといえる。

恩師であつたが最後までわからないことが多い人でもあつた。天才とはすべから  
くそういうものなのかもしれない。

コークスからモラードに託されたものは大きい。それは目に見えないものであるだ  
けに師の名に恥じぬように努めなければならなかつた。

モラードは居並ぶ人々と自らに譲られた邸宅を見上げた。



「惜しい男を亡くしたものだ」

短い黙祷を終えてそう呟いたのは黒衣の騎士だ。その傍らにいるファティマは彼の  
パートナーのエストである。

黒騎士バツシユ・ザ・ブラックナイトを駆る黒騎士ロードス・ドラグーンと言え  
ば、この場にいるもつとも有名な騎士だと言えた。

エストと言えれば今日の仮喪主となつているモラード・カーバイトの名も知らぬ者は

ないほどだ。

新進気鋭のファティマ・マイトであり、二八七六年に彼が生み出したフローレンス・ファティマ・エストは彼の最高傑作と言われている。

そしてもう一人……この場においてもおかしくない星団最高のファティマ・マイトは姿を現す気配はなかった。

「バランスエのやつめ、最後まで来ないつもりか？」

モラードがぐちつてある方角を眺めた。

ファティマの聴覚で遠くに響くエンジン音を聞き取ってエデイが敷地を横切つて道へと出る。

その向こうから土煙と共に一台のディグがコークス邸目掛けて走ってくるのが見えた。周囲には民家もなく荒野の向こう側から高速で走ってくる。

そしてディグはエデイのすぐ目の前で止まった。揃えた黒髪がなびいて風に揺れる。降り立ったのは女だ。黒い喪服を身にまといスカート先端についた埃を払った。

「お待ちしておりました。プリズム・コークス博士。皆様がお待ちです」

「フン、まったく、相変わらさずのど田舎ねここは。エデイ、埃まみれよ？」

「はい、お風呂ならばいつでも入れます」

「風呂に入りに来たわけじゃないわ。あの人は？」

プリズムは取り繕った無表情な顔を庭の方に向ける。あの人とはプリズム・コークスの父であるグラン・コークスのことを指していた。

「こちらです」

プリズムを伴ってエデイが庭に姿を現すとモラードがホツとした様子で弔辞を読み上げ始める。

「死んでも頑固を貫き通したわね……病だとは聞いていたのに」

グランを悼む言葉と祈りが響きプリズムは頭を下げる。プリズムは自分の指と喪服の黒いスカートだけを見ていた。

最後に看取ったのはファティマだ。プリズムは目を閉じる。

もはやあの人と喧嘩することはないのだ。一人で逝ったわけではない。エデイが側にいた。

実の娘は父親が死ぬまで顔すら出さず、今、こうしていなくなっただけからここにいます。

最後に喧嘩別れしてからどれだけの年月が過ぎたことか。

「さようなら、お父様。伝言があるの。 balan シェもじきに行くから待つてろ、ですつて。 いい年してさ、最後まで正面切つて言わないのだから。 お父様の言ったとおりね。我が師は根性なしよ」

墓に最初に土をかける役目を担ったプリズムが土を墓の穴に投げ入れた。黙々と騎

士が後に続いて土を棺おけに投げ入れていく。

誰も何も言わなかった。

死者は何も語らず冷たい土の下で永遠の眠りに就いた。

◆終話—02

バストーニユ郊外に広大な敷地を持つその土地に大きな屋敷がある。その屋敷はバラシエ邸と呼ばれている。

「頑固な男が逝った」

一人の男が照明もつけぬ暗い部屋で呟いた。その声はしわがれていた。グラスを口元に運び水を一口含むとグラスの氷が音を立てる。

「君、なぜ行かなかったの？ プリズムは行かせたのにさ」

床の絨毯に腰掛けた美女と見紛うような青年——レディオス・ソープが問いかける。

瑞々しく老いるという可能性さえ知らないような肌を保ちその目に若さと叡智を湛える。その姿は一〇〇年……いや一〇〇〇年経とうとも変わることがない。

「俺はあの男が嫌いだった」

「うん？」

グラスの氷を鳴らして男が呟く。

名前はクローム・アイツ・フェイツ・バランス・イレブン。またの名をクローム・バ

ランシエ。彼がこの館の主であった。

座る青年の膝には少女が頭を乗せて眠っている。 balanシエが養育しているファティマの少女だ。訳ありで他の姉妹たちとは違って成人が遅れている。

「昔の話だよ、ソープ。俺も奴も若かった。考え方の違いと言えればいいか。俺はファティマに未来を……希望と可能性を与えたいと考えていた。それに真っ向から対立したのだよ。だからこそ、それゆえに俺はやつを屈服させたかった」

「子どもっぽいね。それで彼はどうしたの？」

ソープは長い栗色の髪をいじくる。

「証明してみせろと言われた。だから俺はやつを連れて星団中を旅したのさ」

「ふうん？ それでどうなったんだい？」

ソープは微笑んで自らの膝元で眠るパシテアの髪を撫でる。

「食らいついてきたさ。ファティマに可能性を持たせるなど無意味だと言ってね。お前のやっていることこそ無慈悲でしかない」と

「凄く想像できるなあ。頑固ジジイだったしねえ……」

「二人で星団の各地を回った。そのときのことはいや、まだお前には語らないでこう。それにはまだ少し時間が欲しい」

「なんだい？ じらすんだねえ？」

「俺が死ぬ前にでも語ってやるさ……俺たちはお互いに、おそらく何らかの答えを得たのだと思う」

「思うって？」

「それは確かめようがなかった。やつはおそらく何らかの答えを見つけ、俺の前から姿を消した。たった一人の娘を残してな。勝手な男だ」

「バランスィエの不戦勝？　そして君は娘を一人前のマイトに育て上げたじゃないか」

グラン・コークスは失踪した。バランスィエは彼の娘の養育を引き受けた。

養女扱いで引き取ったプリズムにはマイトの才能があった。バランスィエは彼女に自らの技術を教えこんだ。

しかし、彼女が見ていたものとバランスィエが見ていたものは同じではなかった。

プリズムが追っていたのは父親の背中であった。バランスィエは師であったが父親ではなかったのだ。

最愛の弟子として育て、その緊密さから愛人だなどと中傷の標的にされていることも知っている。

バランスィエにとっては教え子に過ぎなかったが、それでも愛情がないわけではない。

プリズムが成人し一人前だと認めるとき、バランスィエはプリズムにコークスの名を名乗るよう勧めたのだ。



かつて去った友人は彼と同じものを見ておそらく理解したのだと考えた。その男もこの世から去ってしまった。

時間は残酷なまでに老いを突きつけてくる。この身を蝕む死という病に抗い続けている。

彼は今のバランスィエを見て笑うことだろう。

「いや、勝ち負けなど俺たちの間にはなかった。マイトとは知識欲の塊さ。求め求めて答えを得るまで決して止めない。そういうった意味で、俺はあの男の食欲さを愛していたと言つてもいい。あの男は俺とは常に違うものを見ていたからだ」

「それで、君も見つけたんだらう。答えを？」

「ああ……狂った幻想を現実にする手段を。それは結局、彼女らを弄ぶ事でもある。やつがもつとも俺を嫌悪した理由はこれだ。ファティマの救いを説く者が希望を説きながら、そのファティマに地獄を見せるのかと」

バランスィエの視線が眠るパシテアに投げかけられる。今までに彼が手がけこれからも造り続けられるであろうファティマたち。

「ファティマを誰よりも愛した男だった。やつが先に死んで俺はまだ生きている。俺は

……」

「俺は？」

怜悯な瞳がバランシエの動作を追う。

「笑ってくれていいぞ、ソープ。俺はやつが遺したものに会うのが正直怖い」

「馬鹿な、彼女はただのファティマに過ぎない」

「そうかもしれない」

疲れたのかバランシエが目を閉じる。ここ最近、バランシエが体調不良を薬で誤魔化していることをソープは知っていた。

二人の間に静寂が落ちる。ソープの膝元でパシテアが身じろいで目を覚ます。

「ソープ様あ？」

眠そうなパシテアの瞳がソープを見上げる。

「やあ、パシテアおはよう」

「あのね……夢を見たの……とても怖い夢」

「どんな夢を見たんだい？」

「遠い、遠い、きつと未来の夢なの……」

◆  
そしてまたパシテアは目を閉じてソープの膝元に顔を埋める。

見える見える——見えるのよ——

残酷な運命の物語が——

天駆ける天馬（グライフ）が  
空から墜ちる夢が――

それは運命の三女神が紡ぐ未来へ続く糸の夢……

星団暦三九六〇年。ジュノー・コーラス王朝首都ヤース。

コーラス最後の玉座たる王宮門手前。そこに立ちはだかるはたった一騎の白い騎体だった。

そのMHを取り囲むように数騎のL・E・Dミラージュが立ちすくんでいる。

王都防衛のベルリン部隊もわずか数騎のL・E・Dミラージュによってすべてが駆逐されていた。

赤く燃え上がる空はL・E・Dの放った炎である。すべてを燃やし尽くすまでその炎は消えることはなくすべてを焼きつくしていく。

王都周辺での抵抗も徹底的に破壊していく。白い悪魔の蹂躪によって残された希望までも火の中に消えようとしていた。

「ここいつは思わぬ収穫だ。やつがああ天馬の騎士（グライフ・シバレース）で間違いない。あれの首を持ち帰りたいものだ。火器装備を切り離して近接戦闘に切り替えろ」

『あ……ダメ……』

「どうしたパシテア？」

L. E. Dの騎士は相方のファティマの様子がおかしいことによく気がつく。

『ダメ……わたしおかしくなっちゃう。白い天馬（グライフ）の騎士……わたし、戦えない……ソープ様あ!!』

「パシテア、おい、パシテア！」

一騎のL. E. Dミラージュが停止する。呼応して連鎖するようにもう一騎のL. E. Dが動作を停止していた。

『くそ、リンクスが解除されたぞ！ どうなってやがるL. E. Dっ！ まったく動かん。ファティマの様子がおかしいぞっ！』

同僚が喚きたてる声。周囲が混乱をきたしながらもまともに動ける事を確認する騎士。

あれと直に対峙してまともに動いているのは自騎のみとなっていた。L. E. Dをサポートする殲滅部隊はMH戦に備えて下がらせている。

「何が起きている？ こちらの制御はできているようだが……」

『マスター、ライドギグを強制解除しました。彼女たちではダメです。あのモーターヘッドにはダメなんです！ バランシエ・ファティマである彼女たちはあれと戦う事ができないんです！』

「なるほどな……陛下が仰っていた意味がようやくわかったよ……これが、あれが真の天馬である証拠か」

バイザーをつけた騎士が口元を歪める。わかっていてなお主がそう望んだのであれば従うのみ。

それこそが騎士の宿命である。

『コーラスと大詰めの戦い。きつと、君と君のファティマが鍵になるだろう。君だけがコーラスの象徴を倒すことができる。あの白い天馬騎士（グライフシバレース）をね。僕は今回は降らない。さあ、最強同士の戦いにケリをつける時が来たよ。およそ、一〇〇〇年振りの二人の因縁もね』

それがこの宿命の戦いを決める言葉でもあった——

「エディ、敵軍の動きに遅延が見られる。年寄り一人屠るのに何を手間取っているのやら」

『いえ、向こうは動きたいけど動けないのです。だってこの機体も元はミラージュですから』

「はは、長く騎士をやっているがそんなことは初めてだ。骨のある若者はおらんのか？」  
『マスター……お体は……』

「病でボロボロの体だろうが構わぬ。最後の徒花、コーラスに散らす。止めてくれるな

エディ。我らが希望は無事落ち延びられたであろうか……」

コーラス最後の希望である王妃と王子はコーラス城から脱出している。

ここに残る最後の騎士は彼と相棒のファティマ。そして長年付き合ってきた愛騎のみだった。

「すべてはグラードに託した。これがわしにできるコーラスへの最後の御奉公よ」

『……』

『白騎士殿と見受けられる！ 我が剣を受ける所存はおありかつ！』

「よかろう。そう来なくてはな。一線を退いて三〇年。わしの腕は錆び付いておらぬぞ

？ エディ、頼むぞー！」

『イエス、マスターっ！』

エディが応え天馬の騎士が実剣を引き抜く。銀色に輝く刀身が王都を焼く炎を照らし映す。

「乗ってきたか。白騎士を相手にどこまで戦えるかわからんが、行くぞ、パルセットっ！」

『思う存分サポートしますっ！』

……

……

…

戦いが始まる。

それは私たちに定められた宿命の証。

逃れられぬ運命。

ああ、どうかこの戦いに慈悲を。

私たちに安らぎを――

パルスエツトつ！――

お姉様。ごめんなさい。ごめんなさい――

エディ、ここまでだ。もうこれまでとしよう――

マスター駄目っ！ まだ――

愛していた。さらばだ――

いやあああーっ！――

…

…

…

マスター、敵MHの自壊爆破を確認――

これで陛下に胸を張って報告できるな。泣いているのかパルセット？——  
どうか、誰かこの残酷な運命を終わらせて——

最後の抵抗を続けていたコーラスは滅亡しジュノーは天照の手に落ちる。

この後、星団は統一される。本物の天照は隠れユーパンドラの圧政が始まる。

数多の騎士の血とファティマ達の涙を流していまだ悲劇の連鎖は終わらない。

流れ落ちた宿星。天馬は墜ちず白騎士は甦る。それは人々に伝えられていく物語。

黒騎士がジュノーとクローソを隠しコーラスの希望は紡がれた。やがて反A・K・

Dの機運が高まり黒き魔女の存在が囁かれるようになる。

そして、それはまた別の物語として語られるだろう——

#### ◆終話—03

二つのグラスに濃い色の酒が注がれた。

ベトルカの邸宅の一室で向かい合うのはモラードと黒騎士ロードスだ。その傍らに

はファティマ・エストが座り、赤毛のメイドが控える。

「——というのが話の顛末です。先生からのまた聞きですがね」

モラードがグラスに口をつけて辛いなど呟く。

思いつ話にとモラードが黒騎士に語ったのはエディが生まれることになった辻斬り

事件の顛末である。



「そのウモスの若騎士だが」

「ああ、ミハエル・レスターだな」

「名を聞いたことがある。青銅騎士隊の隊長になつてゐるそうだ。話に聞く限りでも相当な腕前だな。男は挫折を知つてこそ成長するというものだ」

うんうんと頷くドラグーン。

「そんなこと言つて追い抜かれても知りませんよ。頂点にいる者はいつ後輩に出し抜かれるかわからない」

「わしはそう簡単に出し抜かれやせんぞ？ その言葉、まんまお主に返すとするわ」

「ごもつともで」

グラスが重なつて音を立てる。モラードはすぐに飲み干していた。

「おーい、もう一杯くれないか」

モラードがグラスを振つてメイドに催促する。

「お酒はほどほどになさつてください。コークス先生もお酒が好きな人でした」

空になつたグラスに先ほどの半分ほどを注ぐのは赤毛のメイドだ。葬儀ではエディと一緒に裏方を手伝つていた。

名はアイラ。かつてエディが助けた少女は娘らしく成長していた。

辻斬り事件解決の後、グラン・コークスの養女として引き取られ、ルーフィヨンドを

出てベトルカに移った際も一緒に越してきていた。グランの晩年の世話も一手に引き受けている。

グラン・コークスの弟子として医師としての道を歩み始めていた。すでに医師免許を取得していた。

葬儀の後の工房の引継ぎで残っていたが、すべてが終わったらアイラはベトルカを出ることになっていた。グランが残した相続のほとんどをアイラは断っている。

「アイラはここを出てどうする？ 当てがあるのか？」

「両親……私の実の親が残したお金があるのでそれでしばらくあちこちを回ろうと思っています。私の曾祖父が巡り歩いた土地とか、故郷のナカカラを訪ねようと思っています。とにかく、世界を見て回りたいんです」

「そうか、困ったらいつでも頼ってくれ。先生から頼まれているからな」

「はい」

アイラはお辞儀をして去る。

「つたく、サンドラは結局来なかったな」

葬儀の人々が去り閑散とした庭を見下ろす。小さな林の中にひっそりと故人は眠っている。

「その、エデイのマスターだが……」

口を濁すドラグーンにモラードはニヤツと笑い返す。

「世直し白騎士。黒騎士と対をなす正義の騎士。その中身はA・K・Dのアイシャ・コーダンテ。今じゃ知らぬ者はない暴れん坊プリンセス様だろ？」

「まったくもって最近の若い者は慎みを知らん。世直しするのであればやり方というものがあゝるわ」

世間巷でサンドラ・イルケといえは有名人である。

正義の騎士を名乗り、各地の悪徳領主や騎士をバツタバツタとなぎ倒すという痛快騎士物語。今では戯曲や舞台で名前を変えて引つ張りだこだ。

よく白騎士と黒騎士とどっちが強いとか論議になるのだが、当の黒騎士は少しばかりはた迷惑な話であつた。


その頃、荒野の土地を歩く一つの影がある。デイグのトラブルで葬儀に間に合わなかつた女がここに。

「あー、もう遠い……：……レンタルデイグめーエンジントラブルとは許せん！」

ポニーテールが揺れて垂れ気味の瞳がぎらぎら輝く太陽を睨み付ける。ポフツと埃が舞つて風がさらつていく。

その向こう側から一台のデイグがやってくるのにアイシャは目を止める。

「ピッチハイクにゴージャスな美女！ 放つて行つたらただじゃ置かないよ！ はゝ

い、そこのおにーきーん。よってらっしやーい。一晚のあまーい夢も見せてあ・げ・る  
」

服を脱いで下着一丁でセクシーにポーズを決めると、デイグは目の前で止まった。  
「マスター……何してるんですか？」

ジト目で返すのはエディだ。遅いマスターを迎えに来たのである。

「お前かーっ！ バカー、もっと早く来なさいよ！」

「無理、お葬式。マスターの格好はとつても非常識」

アイシャを乗せてデイグは走り出す。どこまでも続く青い空と荒野のロードを駆け  
抜けて――